# 芭蕉襍記　全

好文庵のあるし
大和尚のうた自筆
二首の和歌一軸
幾以常信筆
自画自讃之像一軸
近以長筆

杉

堅田十六夜之辨　翁自筆

智月尼への文

湖南堂山比丘尼より觀法於

翁茶碗

二見文台

書様短尺硯

藤井紫影序
室生犀星著

昭和三年五月出版

# 芭蕉襍記（ばせをざつき）

全

東京
武蔵野書院（むさしの）

# 序

# 序

俳聖芭蕉の傳記評論は古人その數尠しとせず。されど廬山の嶺をなし峯をなし、遠近高低同じからざる如く、偉人の面目は觀る人によりて異なり、古人は古人の觀方あり、今人は今人の觀方あり。群盲が象の足に觸れて桶の如しといひ、鼻を握りて杖に似たりといひ、腹を撫でて壁に似たりといふは、象の全態にあらざるも皆一局一面の眞たるを失はず。吾人は傳記評論の愈々出でて愈々多く、次第にその觀察を增補擴張して、腹足より耳目肺肝に及び、渾然たる一箇の大象を彷彿せしめむことを望む者なり。犀星君は詩人にして

又小說家たり猩々猩々を知り、好漢好漢を知る。その芭蕉襍記は詩人の心境を解せざる學者の考證とは自ら其撰を殊にし、興趣湛々情味津々たるものあらむ。

昭和二年十一月時雨ふる夜

藤井紫影

# 自序

# 自序

芭蕉傳記の中で予の觸れようと志したことは、彼の全豹的研究や傳記や考證の類ではなく、寧彼の氣魂がどういふふうに自分に打込んで來たかといふことを瞭かにしたい爲である。同時に一賣文の徒が彼の中に曾て見落され失はれてゐたものを、どの程度までに拾ひ上げたかといふことに些か後世をたのみたいからである。天下に芭蕉的學徒の先覺は殆數へるに暇が無い位である。後進黄嘴の予の如きが努々云々するまでも無い、唯、自分も亦芭蕉城をとりかこむ氣鋭の一人として、筆劒の炎を浴びながら參與してゐることだけは事實である。

藤井先生には原稿を見ていたゞいて序を忝うした。年少にして先生に句作を

見ていたゞいた自分は因緣を手賴ることに喜びと親密とを感じたのである。亦桂井未翁氏には同樣原稿の試閱を乞ひ、奥の細道の歷史的考證に假瑾なからしめんことを努めた。尙下島勳氏に題簽其他を忝うした。

自分は發句道の達人者ではなく、賣文怱忙の暇にこれらの隨筆を得たものである故に、出來得る限りの謙遜をも加へ、同時に予の拾得したものの上では出來得る限り强識しなければならぬと感じてゐる。武藏野書院の主人は殆二年近く予の雜記上梓について陋居を敲かれた。予の武藏野書院に情熱を感じたのも、强ち偶然ではないのである。

昭和三年四月下浣

著者

# 芭蕉襍記目錄

# 芭蕉襍記

## 芭蕉論

## 元祿の大作家

芭蕉の一面

## 蕉門の人々

# 芭蕉句解

## 俳道雜記

## 句解



## 句評

序　　　　　　　　藤井紫影氏

表紙題簽　　　　　下島　勳氏

裝幀考案　　　　　著　　者

# 芭蕉論

# 新人芭蕉

今にして念ふことは元祿時代に住んで居て、芭蕉が絶世の新しさを有つてゐたことである。その新しさは今まで二百年の彼岸に行き到き乍ら、なほ泉のやうな新しさを感じさせることである。大名物や大作家の何人も此の新しさの外のものではない、併し乍ら芭蕉の新しさはそのまゝ古く膠着しない柔らかい新しさである。大雅や鳥羽僧正の新しさは年を經るごとに、ひと皮あて剝れてゆく壯大な無盡藏の餘韻ある底力を有つてゐる、彼もまた星霜と板下の加はるごとに、水からあがる鴨のやうに幽寂でしかも新鮮である。

新羅燒や高麗が掘り出されても、いま窯から上つたものとしか思はれない新

しさを持つてゐる。それにも拘はらず五百年の歳月はその古陶の精髓に丁々と滾れてゐる。此の二つの面、古くて新しい故になほ何百年かを豫約する光輝は、絕代の作家でなければ、稀代の大名物たる所以であらう。芭蕉が讀み捨てられて最早顧られない時代があつたら、その時は人類が此の土地の上に棲息しない時であるかも知れぬ。人々が此の土地にゐなくなつても或は芭蕉だけが、彼の俳句だけが、禿山の上に殘つてゐるかも知れぬ。

元祿が古來稀なる西鶴の情痴を生んだことは、元祿年間の習俗の一面であることは多く人々の知るところである。そして芭蕉がその全然反對の、まだ何人も手をつけない掘出しものに寧日無かつたことも誰人も識るところである。しかし何人も氣のつかなかつたことは一介の乞食俳人たる彼がひそかに後世を信じながら、豁然とした何百年か何千年かを通じた境に住み込んで、ひとり寂し

く眼を開いてゐたことである。「俳諧の姿いまより七度も變らん。」と言つた彼は、「我が俳諧の道は後の世も廢ること無からん。」と信じてゐたことは當然のことである。師を信じることの厚い丈草去來の徒であつても、芭蕉が何百年も後に生けるが如く論はれるとは考へ及ばなかつたことであらう。もう一と抉り約めて言へば或は芭蕉自身ですら恐らく何百年かの後世を、その壯大な光榮には苦笑を禁じ得ないであらう。彼もあらゆる名人の如く煩さげに世評の存外甘いことを輕蔑したであらうと思つてゐる。

芭蕉は時代に先立つとか新しがるとかいふことは無かつたらしい。彼はその氣質のまゝに時代と平衡した。その證據として彼が名人であるところの奇行逸話の類が奈何なる書物にも著されてゐない。彼の遺業の傍のものとして殘されてゐるものは、可成な嚴肅な語彙と訓話の類ひ許りである。或は敬虔の情を

述べたもので無ければ、溢美の嘆賞である。芭蕉と雖も失敗の逸話くらゐあり
さうなものである。丈草の端粛、去來の老實、正秀嵐雪の温雅は稀代の名人を
傳へるに瑕瑾無からしめたものである。惟然や路通の瓢逸をしても猶芭蕉を謬
り傳へたことは無い。比較的高邁の器である其角でさへも、事、芭蕉の行狀に
及ぶと自ら言葉を謹んでゐたではないか。

太平の代、元祿は西鶴芭蕉の二人の興味ある二面を抉り出したが、芭蕉は西
鶴を評して淺ましく下れる姿なりと曰つてゐる。「或は人情をいふとては今日の
さかしきくまぐまで探りもとめ、淺ましく下れる姿なり」と言ひ、己が門に
掟して「事は鄙俗の上におよぶともなつかしく云ひとるべし」と云つてゐる。芭
蕉が西鶴を下れる姿だと言つたのは、彼の小說文章の意味もあらうが、主とし
て西鶴の連俳の卑俗に當つたものであらう。最も新しい人情の科學者である西

鶴と、自然の大醫である芭蕉とが相容れなかつたのも興味がある。併し乍ら西鶴を容れない芭蕉は文章の旨い人ではない。あれほどの神韻漂渺の俳諧の奥をまで探り當てた芭蕉も、文章紀行の類は綾を尊み飾ることに汲々としてゐて、西鶴の敵ではない。幻住庵の記や、奥の細道、嵯峨日記その他の紀行を見ても、一代の俳聖であつた芭蕉の文章として見ても大したものではない。皮肉の辛辣と洞察の達者な西鶴にくらべたら、今更の如く此の二人の道の喰ひ違つたことが首肯れる。靜寂を慕ふ魂と、俗情にも組する魂とは、やはり根本から入れない元祿の二つの相異つた鏡であつたらう。一つは蕭錯たる冬枯の風物の中に咲く薺のやうに幽遠哀寂で、一つは混沌の感情の中に光る一個の露はな人情の獵人である。

併し芭蕉と雖も全然西鶴を容れないことはなかつた。人情の奥底を知つてゐ

た芭蕉の上に、なほ大西鶴があつたことは認めてゐたやうである。唯西鶴が嫌ひであつただけかも知れない。一日百吟を以つて誇る西鶴は、一句を練るに或は十日をも二年をも算へる芭蕉の粒々苦心の魂には近づけないのは當然である。「俳諧は時代を考ふべし」と言つた彼に、元祿の精髓の裏づけをあんなにまで叮嚀に仕上げたことは、今にして思へば芭蕉西鶴の二面相打つたゝめであらう。

衣匠や器具や陶器の類にも新しい工風と運動と改革の起つた此の時代に、彼の新しさはずば抜けてゐたことは、何よりも芭蕉が爲人たる上に興味のあることである。

明ぼのやしら魚白きこと一寸　（甲子吟行）

山路來て何やらゆかしすみれ草　（同じく）

梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉　（句選拾遺）

よく見れば薺花さく垣ねかな　（續虛栗）

枯芝やや丶かげろふの一二寸　（笈の小文）

春雨や蓬をのばす草の道　（草の道）

閑さや岩にしみ入蟬の聲　（奥の細道）

てふの羽の幾度越る塀のやれ　（句選拾遺）

新藁の出そめて早き時雨かな　（芭蕉翁全傳）

これらの靜さの中に充ちてゐるものは、生れた時からして好ましい古さを漂はした無二の新鮮さと優柔なその心とである。木の芽を指さきで挘り摘むやうな小氣味よい觸れ方で、靜かに凡ゆる風景や草木のシンを挘り摘んでゐる彼の手が、二三百年ももつと先の分を摘み取つてゐることは、實に先の見通しが利

いてゐて驚嘆に値する。この奥の方へ誰も進めぬ樣に、進んで行つても何も摘み取れぬまでに、鋭い胴察を美事に刺し貫いて摘み採つてゐる。彼の歩いたあとに實際何もないやうな空漠に等しい景色でさへある。併し彼だけが歩いて行けばまた何物をも得られる道のやうでもある。

永遠とはつひに何物を指差した言葉であらう。「閑さや岩にしみ入蟬の聲」の閑寂の境には定家も西行もまだ行き着いてゐない、此の風流は日本の古い詩歌道の極北であり、もうその外へは行けなくなつてゐる閑寂の地平線である。予らが此の境で僅かに嘆賞の呼吸をつくだけである。斯の樣な奥と底に行き到くまで、人はどれだけ樣々の心境の數奇鍛練を經なければならぬか？——「山路來て何やらゆかしすみれ草」の可憐、その可憐に心をとめるものは、人生の垣根にさく仄かな薺の花にも心そゝぐ雅人でなければならぬ。かかる平凡である爲に

閑却された「よく見れば薺花さく垣根かな」の景色は、時に最大の景色をもしのぐ可憐を併せ持つて居る。蕪村の壯大がそれ故に私には懷しめぬものがあるのも往々素大で馴染めぬためである。最も微かなものには最大を餘してゐない。芭蕉が求めるものは何時も「枯芝やや丶かげろふの一二寸」の幽さである。得も言はれぬ暖さの廣がりが遂に眼前一二寸の景色に止つてはゐない。絕後の大風景をも併せ嘯んでゐるところの、最微にして最大のものの凡てが彼である。何たる淺春のいたいけな姿であらう。三たび此の句を讀んで邪氣なき姿に接し得ぬものがあれば、遂に藝道にあやかれぬ俗流の徒であらう。

自分はいま更らしくにほひやさびしをりを說かうとは念はないが、彼の清列さは何を摑いても心を打つてくるものである。何とも云へぬ清朗さは神々しい初々しさを以て囁くのだ。「明ぼのやしら魚白きこと一寸」の明ぼのは元祿か

ら天明を拔けて明治へ一と走りに行き着いてゐる。その間何ものも遮ぎるものすらない、蕪村も一茶も又子規も渺たる一雲翳をすらかざせぬ。子規が芭蕉を採らず寧ろ蕪村の壯麗を選んだのは、當時の流行であつたとは云へ、子規の俳道にさびの絶無であつた所以である。病褥に多くの年月の苦難を經た子規は當然芭蕉を取るべきであつたのに、健實な蕪村の文學に心を容れたのは彼が病理的にたよるべき人生の活潑を求めてゐた所以であらう。彼の發句が活達なる自然を健康なる草木にのみに腐心したことや、嶄新を求めて蕪村を見出したことなぞ考へて見ても、遂に古い新しさに辿り着けなかつたことは、何たる彼の焦燥であつたらう。「風呂吹や小窓を壓す雪曇り」は蕪村を一歩も出てゐない。怎麼にもがいても蕪村をぬけられなかつたことは、遂に彼がさびる機會が無かつたからである。性情の中にさびが無かつたからであらう。「枯芝やや〻かげろふ

の一二寸」にまで、彼が行き着けないのは、蕪村がなほ芭蕉に及ばざると一般である。子規がさびしをりの心を養ひ得た人であつたら一層彼は後代を問ふべきであつた。非常な情熱家であつた彼の情熱は枯淡を外にして生活したからであるとも云へる。又彼は彼らしい枯淡にのみ辿り着いて、芭蕉の高さへまで行きつけなかつたのであらう。

新藁の出そめて早き時雨かな　芭蕉

松風の里は籾するしぐれかな　嵐雪

嵐雪は蕉門の内でも特に温厚な男である。「松風の里は籾するしぐれかな」の静閑さを一歩踏み込んだ芭蕉の冴えは、もつと時雨の何者かを掴んでゐる。嵐雪の道具立を踰えた彼の直接的な新しい觀照は、殆ど比較にならないくらゐの効果を出色してゐる。嵐雪のよたよたな腰の弱さに比べたら、何と云ふ把握力

の強さであらう。しかもその強さは一寸動きさうもない嚴丈さで、永生動かないところのものである。

## 路通と芭蕉

路通が芭蕉を賣つたユダだとしても、彼れの眞實の心は師叟を怖れ震へた心で、絶えずその僞筆を夜半の小机の上に試みたものであらう。彼の狡猾しい心を以てしても、なほ芭蕉の心を有難いものとしたに違ひない。或は去來丈草の徒よりももつと芭蕉の何物かに觸れてゐたことは實際である。苛責と良心とに路通は絶えず師叟に謝りたい心を有つてゐた。悔ひ改めたユダの心は恐らく路通は始めから有つてゐたのであらう。しかし彼が左うしなければならなかつた

生活は、芭蕉の睨顏を以つてすれば疾くに氣が附いてゐた筈である。

師匠の僞筆を贋る事なぞは今の世では何でもないことである。路通の僞筆が世にそれ故に珍重されてゐるとしたら、路通と雖も一層の赧面羞恥の情に慚死せねばならぬ。蕉門の師弟は溫厚でなければ典雅從順の徒の集りであつた。路通の如き異端者は一指にのみ止るくらゐである。路通を破門した芭蕉はいち早く路通の心を射透してゐた。だから路通を認めることに少なからぬ苦痛を交へてゐた程、芭蕉と路通とは近い關係を有つてゐる。

芭蕉が初めて路通に會ふたのは、行脚の折、草津守山の或る貧しい茶店の傍に憩ふてゐる一人の男に茶菓子を振舞ふたのが、師弟交誼の初まりであつた。この一見、二子の袖無しに木綿の袋を提げた乞食體の男は、路傍に睡る男としては餘りに卑しさから脫け、洒落で少しばかりの人品も窺へるところがあつた。

男は芭蕉に一首の和歌を紙片に書いて示した。

露と見る浮き世を旅のままならばいづこも草のまくらならまし　路通

芭蕉は乞はるゝまゝに、その男に路通の名を與へ、爾來風雅の交りを約した。路通が芭蕉の何人であるかと云ふ事、自分の近づいて行くべき人は芭蕉を置いて他に無いことを知つてゐたのであらう。人の軒下に眠る放蕩無頼の果に、もう一度彼は人生に呼びかけて見て、どうにも爲らぬ身の振方をつけたのである。路通の詩情は同時に生活の改革でもあつた。

その後江戸（元祿二年）に出て深川の芭蕉庵の近くに借家して、日夕、師叟に親しんでゐたが、絕え間もない貧窮は杉風ですら持餘した程であつた。芭蕉庵の乏しい米櫃の厄介になつたことは勿論のことである。師叟に隱れた時折の短冊賣や、見窄らしい心になつて名もない町人相手の俳諧興行に身を窶したこ

とも再度ではなかつた。芭蕉は言葉を繼いで生業と俳道の正義を説いたのであるが、風頼犬の如き路通はその度に本心に還り乍らも、芭蕉庵を一歩外へ出ると持前の放埒に身を委せ、口に師叟を楯に町人俳諧の取込役などを勸めるのであつた。彼はその度毎にこれは惡い事だと云ふ後悔をくやみ乍ら、芭蕉の耳に入ることを恐れたのであつた。親密の中に端正を含む意見振り、柔しいが時とすると人の腹の中まで見据えてゐるやうな眼付、さういふものを路通は絶えず師翁から感じ、絶えず事の發覺を恐れてゐた。その意味で路通は生涯を通して芭蕉を惧れ過ぎた位、恐れたのであつた。師翁の愛情をさへ恐怖に代えなければならなかつた路通は愛情を嚙み締める間もないくらゐであつた。それほど窺かに芭蕉の聲名を售り、それを己の口に上らせることに依つて乏しい衣食にありつくのであつた。

「おれは師匠を售つてゐる。賣れば賣るほどそのためにもおれには師匠が必要だ。おれが師匠を賣るごとに謝りたい心で一杯になつてゐる。おれはそれを止めようと思つてゐるが、おれのやくざな暮しはついそれを遣つてしまふ。」彼れは芭蕉を口にしないことは無く、それを口に上らせるごとに無邪氣で狡猾な心で、世の愚人に接したのであつた。芭蕉は路通を見るごとに苦痛に近い表情をした。その表情と心の有態はすぐ路通に通じた。かれも苦しさうに師匠と對座しなければならなかつた。かういふ彼らの狀態は一層兩方の心を却つて深くしたものではないか。

曲水あての手紙の端に芭蕉は斯う書いてゐる。「路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事、推量いたし候、其志三年以前より見え來たる事に候へば驚くにたらず候、とても西行能因の眞似はなるまじく候へば、平生の人にて候、常の人

が常の事をなすに何の不審か可有御座候哉、拙義においては不通仕まじく候、俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候ばむかしの乞食よりまさり可申候。」と書いてゐる。その淡々たる手簡の內に何となない憤りさへ流れてゐるが、それだけ隱れた芭蕉の心が微かに動いてゐる。幾度となない改悛の心を披攊した路通のすつかりを彼は見透してゐたのであつた。騙されまいとしながらなほ騙されてゐる氣持ちは、絕えず芭蕉の心の中にあつたらしい。

芭蕉は路通に問ふてあなたは何をして居らるゝとも云はなければ、何をせよとも言はなくなつた。唯、時とすると作り話などに耳を藉し乍ら、芭蕉は眠さうに半眼を見開いて、路通の言葉を聞き流すくらゐであつた。さういふ芭蕉を知つてゐる路通は氣拙く寂しく芭蕉庵を辭することもあつたが、別に芭蕉はそれを引止めようともしなかつた。輕い憎しみに加はる愛着はあり乍ら、最も人間

的な芭蕉がそこに端然と坐つてゐるだけであつた。どういふ時にも芭蕉が一番人間的な心の構えを以て接してゐたのは、路通の場合が多かつた。一個の清濁を併せ有つてゐる路通の魂は、芭蕉のさびを以てしても澄ますことが出來なかつたらしい、芭蕉は心で路通をあきらめかけ又諦めかねてゐる。通じかねる永い清濁の結ぼりが根を張つてゐたのである。

吸露庵涼袋の「頭陀物語」は信用できないが、或時、路通が鬼貫の宿を訪ねたことが書いてあつた。「今鬼貫の名を隱し朝夕の煙をいとふ、昔は花洛に遊吟して翁と畫讃の遊をもなせしが……」そして鬼貫は明日の飯をも缺く貧窮の暮しであつた。路通には困窮は解りながらも、自身もなほ頭陀袋下げる身のどうなり樣もなかつた。涼袋は此二人に僞筆の一夜を明させたやうに書いてゐたが、芭蕉臨終の時も鬼貫は病床に通されなかつたことを考へると、支考丈草去來な

ども此事は知つてゐるらしく思へた。花屋日記に「鬼貫來る去來應對して還す。」とある。笈日記の同じ七日には鬼貫のことが書いて無い。

芭蕉が心苦しさから路通を破門したのは、芭蕉本來の心もあつたらうが、他の子弟を慮つた氣もちも無いではなかつた。路通とそのまま交はることは日を追ふごとに苦痛になり、路通の方でも庵の戸を敲くことも時稀になるのであつた。しかしそれも三井寺の僧の取なしで許されたが、路通の心にはそれ以來何か硬い氣もちが殘つた。敬愛は拗れたまま融けないで彼のつむじを枉げたのである。彼が本統の心で芭蕉を慕ふたのは矢張師翁歿後であつた。「花屋日記」に依ると、芭蕉は去來丈草支考を床近く呼んで、遺言のあとで斯う附け加へてゐる。

「路通とも親しく交はつて下されい、あのやうな男であるが心には善いところが

あり誠がある、決してあの人を仲間はづれにしてくれないように頼みます。」「花屋日記」は信じないとしても芭蕉といふ人は、かういふ叮嚀さのある人であることも實際であつた。必ず斯う遺言したであらうと私は信ずるのである。芭蕉生涯中の心を痛めた路通であつたゞけに、私はその言葉を信じてゐるのである。

路通はこの元祿七年十月十二日芭蕉屬纊に就いた日には、加賀金澤の町に行脚の假遇をしてゐた。生駒萬子の手厚い世話になつてゐたらしく、路通自身「むつまじき方ありて、日數へぬ。」と言つてゐる。路通は殆何物の死よりも、芭蕉を失ふたことに驚かされ嘆かされてゐた。今更のやうに謝りたい氣持と悲しみに萬子と交々傷んだのであつた。路通は何か知ら平常から師翁にその本心を解き明し、それを聞いて貰ひたかつたのである。本當の心と云ふても路通自身さ

へ釋明しがたい何物かであつた。話さう話さうと念ひ乍らたうとう言ひ盡せない或る心持であつた。正邪を區分した彼自身の委曲した氣持の一切であつた。併しいまは彼はその機會を永く喪ふた。芭蕉の生前に或る不愉快を起した氣もちが、當然路通自身から起つてゐる何物かは、もう路通には手がつけようがなかつた。彼れは秋風の稍々寒い異土を彷徨し乍ら絶えずその思念に囚はれ惱まされた。しかも彼はその師翁の病褥を訪ふ機會も無く、亦最後に自ら花向けすることもできなかつた。

富裕である萬子には路通の生活が最初から解つてゐるだけ、師翁の病歿を聽いて悶々する彼の蒼褪めた顏容の中に、何よりも著しい焦燥と苛責とを讀み分けることが出來るのであつた。しかし右するも左するも心悶えた路通を見ると、萬子自らも壓せられた程であつた。路通は萬子から旅途の費を得て上洛の

途に就いたのは、それから間もないことだつた。

路通は芭蕉翁行狀記の中でかう書いて自らを悔んでゐる。

「やつがれは此三とせ折々のたかひめに、翁心障り侍りて、音信も遠ざかり侍りぬ。されどむかしの哀みふかきに社かへつて惡みもつよからんとおもひながして、やをら憂世にまかせうち暮しぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心かゝり成とて、翁の方なだめまいらせ、此度萬罪ゆるし給へども外の障なと侍れば、面むきうときさまにて、それよりはやつがれ加賀の國へ旅立ける。そこにむつまじき方ありて、日數へぬ。此度翁遺言の次に、餘命たのみなしなからん後、路通が怠り努々うらみなし、かならずしたしみ給へ、その望おの〳〵聞あへり。今さらくやしさのみぞせんかたなき。やつがれはせめて十四日の法事に參合ぬ。新舗塚の前樒の花筒ものあはれに、聲もふるひながら、陀羅尼など

涙おさへて……」

彼は俳諧勸進帳に自ら乞食路通と記してゐるが、しかし芭蕉を知つた後の生活は、昔、人の家の軒に眠つた彼でないことは勿論であつた。衒奇と齎屆とを持つてゐた彼は、師翁歿後前後は貧窮ではあつたが、不思議に時折藍鼠の羽織打ちこかして、其角などゝ交り乍らゐた。勸進帳二卷は決して路通が孤獨の男でないことを證左してゐる。むしろ彼は莫逆の友を得ないで、やゝともすれば瓦石の友垣を結んだ爲めではなかつたか、何と云つても芭蕉は彼の生涯の師翁であり、益友であり別の意味の親御のやうなものであつた。

ひからかす袖や小春の死出の旅　　路通

風俗文選で許六は「路通者不知何許者不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命、瓢泊之中著俳諧之書。」と書き、路通を不實と輕佻の者とし

てゐる。その去來との俳諧問答の中にも路通を卑しんでゐるところが尠くない。路通は輕薄であるといふことは、その乞食生活を皮肉つたものであると同樣に、スネ者のひねくれた性格は人に容れられなかつた。芭蕉でさへ持餘した彼は他の門人に容れられる譯がない、――温厚な丈草法師さへも路通には眩しい眼付をしなければならなかつた。しかし師歿後は丈草に多く親しみを感じてゐたのは師臨終の折諸友もみな路通と親しくして吳れるようにとの遺言も所以したものであつたらう。路通の性格には風雅高韻の相は無かつたが、その生活振りの中には甚だ近代風の破れ毀れた性格を持ち廻つたものであつた。そのために疎まれ乍らも彼は彼らしい生活を後代にまで傳へたことは蕉門の一異彩であつた。常に瓢逸である如くして然らざる悲しさうな彼の顏容の中には、拭へぬ人生の風雪があつた。人にも我にも容れられぬ人間らしい一切のものを搔き集めた放

浪の魂が彼の生涯を切り廻してゐたゝめに、不實薄情の樣に人々から睥睨されてゐた。私は彼を憎みながら彼の何物かに心惹かされてゐる。彼の性格の中に我々の持つ善良とする意識を裏返しにして見せたものを、彼は時に臆面なく展いて見せるからである。それ故自分は許六のやうに誹ることとは採らぬ。

いねいねと人にいはれつ年の暮　（猿　蓑）
つみすてゝ踏つけがたき若なかな　（同　）
痩馬も淺草拜め年の市　（勸進帳）
草臥て烏行なり雪ぐもり　（同　）

然し路通には一茶の僻見と露骨に歪んだ人生觀とがなく、却つて彼の人生は打沈んだものらしかつた。受身で內の方の心で呼吸してゐる。「いねいねと人に言はれつ年の暮」の如く、沈んだ微笑みがその儘の彼の人生觀になつてゐた。

それに抗ふことをせずに居て、或る從順と素直ささへ窺ひ見せてゐる。自分はさういふ心境に澄んでゐる路通の中に、彼の本統を見る氣がしてゐる。「草臥れて烏行くなり雪ぐもり」の如きは、路通自らの人生が表出されてゐる。雪ぐもりが重々しく壓してゐて、そのため何も彼も動かないでゐるやうな日の光景が、さびしく一羽の烏の立つてゆくさまに描かれてゐる。彼が北國行脚の詮方もない疲勞や心遣りの程が、その奈何樣にしても見える見すぼらしい風采の上にあらはれてゐる。或ひは彼の全生涯もまた「草臥れて烏行くなり雪ぐもり」の途づれではなかつたか？　親友の少かつた彼は一羽烏のそれのやうに陰影を負ふて歩いてゐるやうな人であつた。芭蕉さへ「路通はいづれの所なることを知らず。」と遺語集に言ひ殘してゐるが、それは間違ひであらう。芭蕉は知つてゐなければならぬ筈だ。遺語集などに流布されてゐるものには、眞僞を分つて

とのできないものが往々ある。美濃の生れで享保に歿してゐるとだけ、その折々の句作も、他の元祿の諸家のやうに纏められて殘つてゐない。散漫と愴惶の暮しの中で、何時の間にか書き捨てられて行つたものであつたらう。俳諧勸進帳二卷の興行も觀音の靈夢によつて爲されたと序言で言つてゐるが、さういふことも何となく白々しいやうな氣がしてならぬ。

元朝や何となけれど遲ざくら　　路通
鳥どもも寢入つてゐるか餘語の海　　同

## 小說道の芭蕉

芭蕉もまた小說道の何物かを持つてゐる。

宗房時代から江戸深川の住居、奥羽行脚や幻住庵入鎖の生活、數へ來ると彼の生涯もまた鬱然たる小說中の人物でなければならぬ。彼自身が既にそれであるやうに、彼の發句も一句をもつて人生の數奇大局を盡したものが尠くない。彼の素直な、なげきや、匂ひや、さびしがりや、感慨や、やさしい菫のやうな愛情、物の見方や感じ様や、その毛深く考へ耽るところなぞ、一つとして吾々後代の人生の委曲で無いものはない。

彼が何故小說を書かなかつたといふよりも、彼は一句の內に人生の心づくしを凝視めてゐた。小說と俳諧の間に一髮の餘裕が無かつたらしい。彼は彼の生涯のものを俳諧に沁み亘らせた。餘處目をすることの無い彼は、ひた向きに俳道の王城を築き上げたと言つてよいのである。

草の戸も住替る代ぞひなの家　（奥の細道）

彼が茶人の佶屈に入らずしやれ者を輕蔑したことも理である。眞面目と眞實との外のもので暮せぬ彼は、その一すぢの道を徹したのは何と言つても己を知る大雅の士であらねばならなかつた所以である。彼がその生涯を通した押し方の强さは莫大のものであつた。之加も彼は騷がず急がず一句づつ押し進んで行つたのである。片々たる俳諧とは云へ、此の巨匠の踏み方は全く古今稀であつた。

草の戸も住替る代ぞひなの家は元祿二年奥羽行脚の前の三月の句である。支考の笈日記に、「その後舊草を見に行けるが、たゞ見知らぬ人の住みてぞ待るなる。むかし師叟の深川を出るとて、此草庵を俗なる人にゆづりて。」とあり、あとに「今はまことに。すまずなりてかなし。」と當時を偲んで書いてゐる。

芭蕉は奥羽行脚の前に「股引の破れをつゝり笠の緒付かへ」て、一先づ杉風

の別業に移居した。深川の古住居を捨てたが、間もなく他の人が移り住んだことを聞いて、彼はひそかに或日その舊い門前を通りすぎたのである。折から雛かざる季節で狹い家内に、皺壇の紅いだんだらさへ格子戸を透いて見えるのであつた。寂しいやもめ住みのかれの古い住居は、いまは雛を守る娘の居る家に變り果ててゐる——「住み替る代ぞひなの家」、此處に小說家の芭蕉が、格子內の踏石に脫いだ雪駄の類まで見遁さう筈がない。自分の居た間の樣子も違ふ、何とも云へず昔懷しい氣もちがする、——彼の此の心もちは我々にも通じる心である。支考はその後にまた行つて阿叟がゐた家を見て來たが、いまは雨雪に洗はれて住む人もないやうに破れ毀れてゐると書いてゐる。

芭蕉が舊居を眺めに行つた心は、自分の人生を讀み殘さずに置く懷しさの餘りである。温情と言はうか、素朴と云はうか、一味の子供らしい感懷を交へて

ゐて慕はしさを有つてゐる。かういふ境致にある心は多く門人の眞實を惹いてゐる。「六尺をこえんと欲するものはまさに七尺を望むべし。」の鋭い洞察を以て人生に呼びかけてゐる彼は、外科醫の手術の際、一寸の切開に一寸五分を以てする科學者の大膽とその用意を知つてゐた。彼の小說はやはり六尺を踰えんとして七尺を飛ぶ用意のあるものであつたらう。徹することに深く、さびるにいよいよ曠かつた彼は、悲しみに濁らず嘆きて澄むこと切なるものがあつた。「けふははれて笠かろく、けふはしぐれて袖おもき曇、」と云ふ旅人の心を知る彼は、「一つ家に遊女もねたり萩と月」の哀切なる人生の記錄を漏すことなき人生の作者であつた。「……不便のことに侍れども、吾々は行くところに止まるとおほし、唯人の行くところにまかせ行くべし。神明のかならず恙なかるべしと云捨て……」て越中の磯べに遊女と別れた彼こそ、索寞たる人生にひたと面

を對せ、亦それに背後を見せて立つ自ら近代の人の持つ心を志とした人でもあつた。

芭蕉は在るまゝの人生に即してゐるばかりではない、樣々な門人等の生活や門人同士の間の仲勞を執り、聾である杉風のために同門へ聾の言葉を封じ、癩を病む許六にはその事を一生口にしなかつた。況や路通と同座して餓人の言葉を控えたことは勿論であつた。一介の苦勞人としての端嚴なる面目、生活者としての心意氣も坦乎として護られてゐたことは、人情の内に竊に念ひを潜め、人心の間に平和と懇切を釀すところの、心ゆたかな小說道の大器であつたからである。人として蕪村や鬼貫の苦行を止錄する前に、人としての芭蕉の苦勞が足りないといふ者があれば、彼は常に人生に現れたものしか眼に止めない杜撰なる記錄者の輩であらう。加賀の旅は北枝と句空との仲たがひを和睦せしめたこ

とは誰でも識るところであるが、彼が人情のこまかさ、得も言はれぬ寂しさに心を向け考へたことは、あまり人の口にしないところである。彼が小說を書いて人生に直面したら恐らく眞情の內に幽韻をかなでるところの渾然たる作者に爲り得たであらう。近松の內側をあさり、西鶴の漏した機微を彼はしかも丹念に彫刻するに閑暇を偸んで綴つた人であらう。しかし幸にかれは稍々ともすれば俗流の媚に接觸しなければならぬ作者にはならなかつた。彼は靜かに一句づつ乏しい人生の灯を點け始めた。しかもその乏しい灯は山嶽の全面を壓する炬火となつたのである。

髮生て容顏靑し五月雨　(續虛栗)

奈何なる芭蕉の像を見るよりも、「髮生て」の芭蕉は旣に氣魄面を打つ底の自畫像を有つてゐる。精神の生活を奧底まで辿つたものの、鏡に依らずして自ら

の容貌を描くことを摑んでゐる。すごみある苦行が出てゐる。端然と坐つてゐる彼が常も何物かを、喧噪な人生や騷々しい自然を手をもつて抑壓してゐる大量の態が見える。「容顏青し」の素晴らしい呼び方は、小暗い五月雨の軒端をめぐつてゐるやうである。彼が描いた自畫像の內でこれほど凄みの出てゐる句はない。四十四歲の句であるが、彼の半生を讀むことが出來、顏色と同じい枯れ樣をしてゐるその心の程も窺ひ知られる。何人が斯くまで己を書き得たか？

白髮ぬく枕の下やきり〴〵す　（江鮭子）

おとろへや齒に喰あてし海苔の砂　（今日の昔）

不性さやかき起されし春の雨　（猿蓑集）

此秋は何で年よる雲に鳥　（芭蕉翁行狀記）

あきらめも嘆きも物憂さも茫漠たる人生の行手も、自ら彼には見え透いた一

切である。一つとして彼の身邊心境の消息で無いものはない。何人も此の蓊鬱の中に杳として囁いてゐる「雲に鳥」の迥けさには驚くであらう。夜半の枕べに白髮ぬく一介の老爺の所在なさは、老いたる人の總ての所在なさのつれづれであり、斯くて此句があつてから無味の所在なさにも、老いのおごそかさが横はつてゐるではないか。「歯に喰あてし海苔の砂」に愕いて口へ手をあてた芭蕉は戞然として天外の聲を聽いたに違ひない。彼には日常茶飯の事々に深いおどろきと意味ある永い世の聲や姿に、いつも初々しく心を潜ませ働かしてゐる。「不性さやかき起されし春の雨」の中の芭蕉のほろりとさめた眼の中に、實に遠い世の夢まで籠つて居さうに思はれるのも誇張ではない。彼の此の幽遠の心は行亘つて皆の者になつてゐるからだ。これらの念ひが行き到けるだけ達いたものに「秋ふかき隣は何をする人ぞ」の大極、「此道や行く人なしに秋の暮」の寂寞

が、その前方に遠い雲煙のやうに聳え立つてゐる。人の言葉は限りあるものとされるが、彼の言葉には際限がなく雲表の遠さに行き到いてゐる。

日本の文學で此のあたりに行きついてゐたことには、いまさら驚くより外はない。念々止まざるもの一句をないがしろにしなかつた彼は「秋ふかき」隣を思ひ乍ら、小説道の全幅を抉り立てゝゐる。彼の自傳小説は彼ばかりのものでなく、讀む人のものにその魂を移し植ゑてゆくことは、彼が用意と廣さとを持つてゐるからである。その寫實の和やかさは本物そつくりに形づくられてゐる。

さま〴〵の事思ひ出す櫻かな　（笈日記）

行秋や身に引きまとふ三布蒲團　（韻　塞）

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗　（伊達衣）

のうれんの奥物ゆかし北の梅　（菊の塵）

こちら向け我もさびしき秋の暮　（笈日記）
粽結ふかた手にはさむ額髪　（猿　蓑）
前髪もまだ若草の匂ひかな　（翁　草）

彼の發句の或程度までの寫實的意味を解くことはできても、その奥にどの程度まで觸れていいか分らない。實際は彼のものは俳句だか自然だか寫實だか解らないと言つた方がよい。あれ程のものは芭蕉の中に在るもので、本物の自然や草木であつたとしても、彼の場合では、彼のみの世界の現象として見た方が私の好みに合ふてゐる。彼の「さまざまの事思ひ出す櫻かな」の「櫻」は、彼の五十年の全生涯の中に散りもし咲きもした花で、普通の櫻でないのかも知れない。彼の心でのみ老いたる櫻であつたであらう。左甚五郎や吃又の作品は夜半に這ひ出して來ても、彼の作品がさういふ口碑を持たぬだけでも、心のも

のと、形のものとの相（すがた）の違ふ所以であらう。

園女亭に招かれた彼はその優しい一篇の物語を「のうれんの奥物ゆかし北の梅」と詠み、好箇の小品にして齎してゐる。園女亭の物閑かさ、彼が描く園女のつゝましさは常に彼の心にある女性の凡てであるにちがひない。大原女の素朴の姿を路傍に眺めて、あれこそ自分の好みのある女人だと語つた彼は、野天に育つ田舍女の美しさを悉皆知つてゐるものである。作つた上品や化粧に據る美しさを輕蔑してゐる彼は、一見、野蠻な泥の付いてゐるやうな田舍女の美を解く達眼を備へてゐる。それにくらべて園女の床しさをのうれんの奥に見た彼は、また淑かな上品をも梅花の如く感じる高尚な彼でもあつたのである。(園女は伊勢山田の醫師斯波一有の妻、夫の歿後、眼科醫を業としてゐる。貞淑端雅の婦女子であつたらう。)

「粽結ふかた手にはさむ額髮」は彼自身も物語風の作と呼んでゐる。夏の初め、笹の葉で餅をつつみながら、煩さく額と眉に下る髮の毛を掻いてゐる姿に、何か清艷のありさまが﨟たげに浮ぶ。濡れてゐてもなほ白い手、笹の葉の濃いみどりの色、——坦懷の彼も自ら意識して「物語りの面影をば一句は入集すべき」と言つて猿簑集に入れてゐる。粽結ふ女もまた彼の心の中の女である。園女の貞淑を愛する彼はまたかた手にはさむ額髮の物憂さを眼に止める男であつた。

芭蕉は美小童を愛したことは人々の言ふところである。元祿は殊に美小童を愛する流行の時ではあつたが、自分はむしろ彼はその美を美として愛したゞけに止つてゐるだらうと思ふてゐる。「前髮もまだ若草の匂ひかな」の彼は、美しい元祿少年の姿に眼をとめたことは當然であつたらう。併し彼を世の稚兒あさりのごとく言ふのはどうか、若い時分は（三十歳前）相當の若い者として生活を

した人であらうが、それは全幅の彼を論ふ上の問題ではない、却つて危險な中年後に蹉跌の無かつた彼は、やはり蕭條たる大雅の道に殉じた男であつた。何よりも我々の頭にそれらの色慾世界への想像を呼び起すところの（例令呼び起したにしても）何物をも其の不純さを與へないところが、彼の身上でもあり淸節さでもあつた。若し情事の一端が我々の耳に入つたにしても、彼の爲人のおもしろさを加へるくらゐのもので、彼の不名譽にはならないことである。壽貞尼と彼とが何故に別居してゐたか、門人はなぜ壽貞尼の事を口にしなかつたかと云ふことも、一寸不思議である。別居して芭蕉が通ふた譯ではなからう。杉風宛の手紙には壽貞が芭蕉行脚中に亡くなつたやうに書いてある。故鄕で關係があつて後にそれが無くなつたのかも知れない。唯、彼が小說道に彼自身さへ壽貞のことを書かなかつたこと、それに觸れないところを見ると、芭蕉も底を

示さない深い用心を持つて人に接してゐたやうである。「かくれ家や目立たぬ花を軒の栗」の彼は「こちら向け我もさびしき秋の暮」の主人である。「軒の栗」の幽さに心を動かす彼の心も、到底人生に「こちら向け我もさびしき」と呼びかけなければ居られぬ或物を有つてゐる。彼の幽情寂寞の境も時にしばしば他に竊かに呼ばねばならぬものがあつた。人としての彼の弱さも剛情の中に芽ざしてゐて床しい。彼の小説道はつゞめて行けば寂しさの一すぢ道である。埃と苔とを有つ寂しさに外ならぬ。埃は人生から、苔は自然から、ひそかに彼の上に彼を古風にして見せたものであらう。

## 嗤笑

芭蕉は時に非常な高いところから門人を見てゐる時と、門人の內側の心に入つて交つてゐる時とがある。常に何か心に豐富な餘裕と寬やかな大人の笑ひをもつてゐたことは實際である。しかも子弟の間にある彼は濶達で自在な氣風を示してゐたらしい。むしろ天才ではない、一段づゝ己を築くことに營々たる勉めを努めた男である。宗房時代からの彼と五十一歲の生涯を貫いてゐるものは、一句づつの進展と、加はりゆくさびと勉強のあとである。少しの油斷もしないでゐるところに、彼の素晴らしい併し地味な發展があつたのである。

人間は自分の才能を自分でどの程度までに洞察できるかどうかは疑問であ

る。しかし仕事のある人間にはその仕事によつて、自分の才能をはじめて押し拓き統べられるものである。

彼は何時もその仕事に沈潜して刻々と大成の域に近づいたのであらう。天才でない彼が結局天才の道をあるいたといふことになれば、或は天才であつたかも知れない。

病雁の夜寒に落て旅寢かな　芭蕉
あまが家は小えびにまじるいとゞかな　同

「猿みの撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆云、病雁はさることなれども、小鰕にまじるいとゞは句のかけり事新らしくまことに秀逸なりと云、去來云、小鰕の句は珍しといへども、その物を案じる時は余が口にも出ん、病雁は格高くおもむきかすかにしていかでか爰に案じつかんと論じ、終に兩句とも

に乞ひて入集す。その後翁曰、病雁を小えびなどと同じごとくに論じけるやと笑ひ給ひけるとなり。」

猿蓑をあづかる凡兆も、芭蕉の「笑ひ給ひける」であしらはれてゐる。急所を突いて笑ふ彼のうつはの大きさは、この挿話の中にも悠然として坐つてゐる。彼の心に行きとゞくまでには門人等の及ばない遠さと隔たりがあつたやうである。彼自身も最早それらが日常の會話にも露骨に現れたものらしい。去來が凡兆の句評と己の句評とが、おのおの相違してゐることについて、芭蕉は人それぞれの色分けのした句評をしたことを云ふてゐたが、それも芭蕉の細かに氣のつく一面であつたらしい。實に芭蕉はさういふ心づかひを以て接してゐたことが、門人の各々の道につかしめる朗かな原因となつたのである。凡兆には類なき洗練を、北枝秋の坊には素朴を見出し、去來を以て忠義一徹の士ならしめた

のも、彼の笑ひながら人を人たらしめたゆゑんであらう。いはんや蒼古の丈草を彼のわすれがたみたらしめたことも、彼の類なき高さに近づけた德の一つであらう。

彼が口訣に、「他門の句は彩色のごとし、我門の句は墨繪の如くすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず……」といふてゐるのを見ても、彼が門人を敎へるに隨所にその才幹を發してゐる。

じだらくに居れば涼しき夕かな　宗次

猿蓑集の撰の時、宗次一句の入集を乞うたが芭蕉は取る句がないといつて斷つた。後に宗次は「おゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍る」といつて膝をくづした。芭蕉はそのじだらくを詠んではどうかといつて、入集させたと去來抄に出てゐる。彼が門人の間に入つて一言半句にも心を寄せ心を働かしてゐ

る一面が出てゐる。

## 芭蕉庵

寒菊の隣もありや活大根　許六

冬さし籠る北窓の煤　芭蕉

月もなき宵から馬を連て來て　嵐雪

「今の六間堀の裏と、御舟藏との間に鯉魚のいけすを持ちし者あり、そこに住みたりといふ。」「類聚名物考」(「樋口攻氏芭蕉研究」)

芭蕉植ゑて先づ憎む萩の二葉かな　芭蕉

芭蕉庵は一ト間に勝手のついた手狹なものであつたらしい。杉風の別業を繕

ふて建てたものである。古池に枯葉の浮く初冬、水の溫む暖い春さき、芭蕉は自ら炊ぎ焚いてゐた。自分はかういふ彼の生活に沁みついて、彼のことを考へると落寞の情が一しほ深い。淺い井戸端で一向年齡の分らない氣むづかしいやうで親切深さうな彼が、米をごし〳〵磨いでゐることを思ふと、幽思自ら元祿の昔に飛ぶやうな氣がするのである。時折障子をあけて外を眺める彼は何ともいへず好ましい品のよい男のやうにも見える。

「この道はもう霜時で參られません。」彼は井戸端で道問ふ人にさう答へる。元、杉風の家のいけすのあつた池に、枯れ草が參差として折れ込んで、霜に瘠せいぢめられてゐる。片戸の開いた庵の勝手口に、　青菜があをあをと冴えて見える外、別に道具らしく際立つたものがない。

芭蕉破れて盥に雨をきく夜かな　　芭蕉

樋口氏は「今の西元町の萬年橋と猿子橋との間で、六間堀に面した通りの能登屋といふ下宿屋の中庭に、古井のやうな形になつて遺存されてゐる。」といつてゐる。

予は芭蕉の容貌をよく想像して見るが、年よりも老けて見え、齡四十に達しない前から霜を交へてゐたこと、四十にも五十にも見えた說が當つてゐる。しかし何か枯槁されたまま敲けば音のある凜乎たるところがあつたらしい。門人の内でも氣の弱い者はその端嚴に打たれたことは實際である。にがみ走つた中に一抹の柔和がなごやかに流れてゐる顏容であつたらう。

此秋や何で年よる雲に鳥　芭蕉

この漠々の年なみに彼の風貌が出てゐる。この一句の精神は結局彼の皺であり老いであるところの、晩年のかれが唯一の自畫像であつたらう。髮生て容顏

青し五月雨の彼の生彩と立體的肖像畫は「雲に鳥」の淡々の境に辿りついて描かれてゐる。實に彼の進展はほんの少しづゝで、目にとまらぬやうだが、一句を出したときには、ずつと進み深くなり曠くなつてゐる。「何で年よる」の心は吾々にも動く心である。しかも明瞭には摑めない片雲漂茫の高さであるが、かれは思ひ切つて「雲に鳥」といひ、吾々の些かの象徴の殼を叩き破つて中身を差し覗かしてゐるところは、及び難いところといつてよい。

再びいへば全く彼はほんの少しづゝ動いてゐて、しかも、あとで見渡すときは、はるかの前方に出てゐるのだ。靜かさがもつ驚く發展だといつてよい。庵の小庭に一株の芭蕉を植ゑてあつたことも實際で「芭蕉破れて」の句で見ても分ることである。

# 元祿の大作家

## 永い年月

彼は幽けさの中に美しさを見出し、美しさの中には遠方を眺めてゐる。おぼろげなもの、微かなものに永い年月を見、彼の心は年月の波とともに動いてゐる。彼は實に我々に取つて宗敎のやうな、物の喜びを有つて迫つてゐる。

## 挨拶

自分が若し芭蕉に途中で邂逅つたとしても、自分は知らずに行過ぎるであらう。それほど彼は別に何人とも變つたところの無い人物にちがひない。

併し自分と芭蕉とが電車の中で對き合ふてゐたら、自分は芭蕉だといふことに氣が付くやうになるかも知れぬ。能く見れば變つてゐる多くのものを持つてゐる人に違ひないからだ。そして自分は心の內で平常からの尊敬の念を有つやうになるであらう、芭蕉も思ひ詰めてゐるやうな自分の眼付につひ注意せずに居られなくなり、何となく柔らかい表情を一段と優しく增すであらう、自分は挨拶のかはりに微笑つて見るやうになるかも知れぬ。微笑はときに尊敬に對する手厚い挨拶でもあるからだ。或は芭蕉もその時に微笑つて答へるかも知れぬ。何となく自分を好いてゐる男だと思ふであらうし、さういふ人には好意をもつ人であるから、他に人さへ居なければ話し合ふやうになるかも知れない。

野とか山とかの小徑で行き逢つたら私と彼とは十年の知己のやうに可懷しげに話を交はすであらう、怜悧らしい自分は謙遜して彼の發句などは褒めないで

野や山の景色を目立たぬ程度で靜に物語るであらう、彼もまた發句の話などが出ない心安さにつひ穩やかな話を話し出すだらう、彼の方から發句のことを言ひ出すかも分らない、なぜかと言へば彼は彼の心の向いた時に默つて居られない人だからだ。何時も默つて暮してゐる人間は口を開いて話し出すと、平常から貯めてゐることを可成大切なことまでを話し出すものだ。言葉をもたない人間はそれ自身一つの思想をもつてゐるからだ。

## 發句道

芭蕉は發句を一生の仕事として平常も何時もそればかり考へてゐたであらうか。彼の生きてゐる間の仕事は發句以外には道が無いと考へてゐたであらうか。

發句が藝術の極北で精髓だと思ふてゐたであらうか。それは彼の發句論や連句の話や、遺語集を見てゐても解り過ぎる程、發句に身を委ねてゐるのだ。それにも拘らず芭蕉は一生の仕事として何時も平常も發句のことばかり考へてゐたであらうか。

自分は彼が晩年近くなつてから此の心が正確に彼に割り込んだものと思ふてゐる。自分は決して世の識者等の言ふやうな芭蕉を說きたくない、彼は文學小說に心をひそめてゐたことは、決して見遁してはならぬことだと思ふてゐる。

## 天の貢物

彼は發句道精進の傍、それらの子弟に依つて米塩を得てゐることを恥ぢてゐ

たらうか、自分はこの事だけは彼は大膽に天からの貢物を受領するやうな氣でゐたらうと思ふただから彼は餘り品物を貰ふても感謝の情を述べてゐない、その心の一方は大きくひらいて、天からの貢物を入れるために優しい微笑みを漏すくらゐであつたらう。さういふ芭蕉は生きてゐるのだ。どういふ藝術家の心にでも生きてゐる理解である。藝術の士はそれによる收穫については何時も天の貢物を受領する氣持でゐることには時代の變化はないやうである。

## 次郎兵衛について

自分が若し芭蕉に仕へるとして見ても、次郎兵衛の如く忠實ではない、去來丈草の如く恭愼の徒でもないやうである。自分は或は路通の心を心としてゐた

かも分らぬ。今もなほ芭蕉に稿を起して市にひさいでゐることを思へば、路通のしたことぐらゐは許さるべきことである。

## 女

獨身で通した彼の一生に、彼がどれだけ清淨な獨身であつたかどうかは分らぬ。奥の細道の旅にしても彼は全然清潔であつたかどうかは分らぬ。唯ひそかに思ふのは彼もまた枕紙のさわめく音に目ざめて、人生の獨身を嘆くために一夜妻を求めた彼であらねばならぬといふことである。誰も知らぬ間に彼は彼の寂しい現身をまかした女の一人や二人はゐたであらう、それを思ふとき、我々は芭蕉に一脈の勇敢を感じるのである。彼もまた我々のごときだつたかと恭む

氣にさへなるのである。決して輕卑の念を毛頭感じない。我俳聖はかくあらねばならぬからである。

若し彼が一夜を何處かで明したとしたら、彼は世にも悲しい顏附をして坐つてゐたであらう、恥と悲しみ、慾みと卑しみとで彼は一杯になり、自分の發句道さへ潰れたやうに思ふたであらう、正直な人々は皆さうであるやうに彼は人目に立たぬやうに歸つて行つたであらう、併し乍ら斯樣な芭蕉の中に私は得も言はれぬ誠の俳聖を感じるのだ。一生を淸い獨身で送つた彼よりも、斯樣な挿話をも相擁いてゐる芭蕉の現身は、我々には懷しくも愛慕の念さへ起させて來るのである。

芭蕉と女、斯樣な悲しい文字は少ない、彼を遂に木石のごとく言傳へることは、彼を益々烈しい寂しさへ追ひ遣るやうなものである。生きるに物憂く寂し

かつた彼を故なく一層孤獨に書き傳へることは、追從者の寧ろあさましい理想にすぎない。芭蕉は墓下で上目皺のある額を擡げ乍ら言ふであらう。「おれを此の上どうしようとするのだ。」

## 句作

「一宿一飯の主もおろそかにおもふべからず、さりやとて又媚諂ふことなかれ、斯の如きの人は世の奴なり、此道に入るものは此道の人に交るべし。」

「夕を思ひ旦をおもふべし……しばしばすれば疎ぜらるゝの意を思ふべし…。」

―― 行脚の掟 ――

芭蕉もまた一介の放浪者である。延寶元年頃から江戸に流浪し始めてから、

五十一歳の秋まで深川に四度庵室を造り、最後に石山寺に住むまで眼まぐるしく東に下り京洛に上り、此間に幾度となく故郷伊賀を往反してゐる。元祿二年の奥羽行脚の百五十餘日はその生涯の行脚の最長期のものであるが、殆その生涯に落着いてゐる暇もないくらゐ、小行脚に次ぐに小旅行を以て終始してゐる。彼自身「旅を思ふこと」は、「そゞろ神の物に憑きて、心を狂はせ」と言ひ、「予も何れの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず……」と記してゐる程である。西行の心を慕ひ宗祇を思ふの彼は、それより先に先天的に漂泊者の魂が根を張つてゐたらしく思はれる。旅といふものはよくよく富めるものでなければ、よくよくの貧しい者の行ふものである。彼の落着きを以てしても、胸の酸ゆくなる思ひで苦しい工面を重ねて行脚にでかけることを思へば、彼もよくよくの旅藝人らしい悲しい氣もちを持つてゐたらしく思はれる。彼は行脚

をもつて詩情に一味の幽暗を加へることは明記してゐるけれど、恐らく人情の新鮮、山河の變移などに心打たれて行くところの、やはりさびしがりの性分から旅を企てたものであらう。

彼ほどの人物が色々の土地で樣々な人々に逢ふことに珍しがつてゐたこと、新しい山河の姿に喜び驚き乍ら四顧してゐたこと、なほ彼が一代の俳匠たる隱れなき大名を負ふてゐるところなぞ、彼が存外澁い枯淡の中に大名を爲した人間らしい姿を持つてゐたやうに思はれる。口をひらけば戲談の裡に諷刺の相を帶び、笑ひの中に人を壓するものを持つてゐたやうである。彼が奧の細道の旅を終へてから始めて人に會ふことを厭ふてゐる。五十一年の生涯に彼が人を厭ふたことは晩年の暮しだけであつた。奧羽行脚の疲れ、人と物語ることに疲れてゆく老年期にさすがの親切な翁も、やつと門を閉してゐる。「人生七十を稀な

りとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢の如し……」と言ひ、「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業をさまたぐるもうし。……」と辛辣に皮肉めいて言つてゐる。人來れば無用の辯ありと言ふ彼が、朝暮の訪客に惱まされ乍らゐたことが解るではないか、此處に苦虫を嚙み潰した芭蕉翁が居る。どうにかしなければ身と心との靜さを護ることができぬ、さういふ考へをもつ彼には、漸く放浪者の魂がしづまつて行く境に行き着いてゐるやうである。殆落着を知らない旅人としての彼も、やつと渉獵した山河水色の寂びが心に寂びつき、宿りを深うした時に達してゐる。旅は旅の最中よりも後の心を淸う洗ひ滌ぐものだ。彼の漂泊もやつと鏡にうつる山河の寂しい姿のやうに、彼の心に落着いて春花秋情を重うしてゐる。彼が閉關說を書いた心は、旅に居て世俗の煩を忘れるよりも、もつと深く切なる老來の閑

寂にあこがれてゐる心を映し出してゐるものであらう。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣　芭蕉

彼ほど作句に苦しんだものはない。彼の苦吟は長きは數年に亘つてゐる。一見、玲瓏玉の如き作句は恰も澱なくすらりと詠まれたやうに見える、併し其底を覗くと苦吟のありさまが韻律の合間に或は苦しげに漂ふてゐる。材料で苦しんでゐる彼は、或るものは捨て、捨てたものを又拾ひ上げて眺めたりして、念々の苦吟は彼の中から一道の雲氣を吐いてゐる位である。結局、彼の幽遠寂情と雖も、彼の心魂からぱたりと音して落ちるものに外ならぬ。彼は刀鍛冶の鎚の味を知り、弓矢の道を心得、草木山川の何物であるかを識つてゐる。「發句のすがたは青柳の小雨に垂れたる如くして……」と言ふ彼の素直さは、時にその全然反對の枯木參差の情をもつてゐることも又同樣である。彼が考へながら寂

然と坐つてゐる姿を思へば、しづかさそのもの丶俤であり、俳諧其のもの丶眞實であるかとさへ思はれる。彼の苦吟の體は斯樣な靜さの中に生れ、句に入る時苦しむ彼も句に形を終へたときは、廣やかにさらりと凉しい姿で表はれてゐる。

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉
鶯の笠おとしたる椿かな　同
一日〳〵麥あからみて啼雲雀　同
何の木の花とはしらず匂哉　同

「翁曰、發句は頭よりすらすらと云下して來るを上品とす。翁洒堂に敎へて曰、發句は汝がごとく物二三取集る物にあらず、こがねを打ちのべたるごとく有べし。」と平常敎へ且つ語つてゐる。彼は心で苦吟し讀み上げる時の玲瓏を期待し

てゐるのである。

彼は一句の面の上に何かしら新しい言葉を惹くことや、また作語することに巧みな事、上へ上へと登る言葉に平常も苦心してゐる。何度も置き換えて見て、又捨てることは珍らしくない。彼が作意ある言葉の美しさ新しさを見ると、彼の苦心のあとが歷々と解るのだ。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく　芭蕉
草枕犬も時雨るゝかよるのこゑ　同
こがらしや竹にかくれてしづまりぬ　同
髮生て容顏青し五月雨　同
起あがる菊ほのか也水のあと　同
枯芝ややゝかげろふの一二寸　同

行春にわかの浦にて追付たり　同
四方より花吹き入れてにほの波　同
日の道や葵傾く五月雨　同
初霜や菊冷初る腰の綿　同
八九間空で雨ふる柳かな　同
風色やしどろに植る夜の萩　同

これらはその嶄新な造語であり馳句であつたに違ひない。今見ても何かの新しさが立句ふてゐる。容顏青しの凄みの寂寞、追付たりの思ひ切つて迫る調子、四方よりと切五文字から出た高びしやなまでの放膽、それを花吹き入れてと靜かに受け流してゐるところ、菊冷初るの美しい透明さ、風色やの新しい語彙、——これらが元祿の昔に彼によつて詠まれてゐることは、全く驚くより外はな

い。彼が文字に就いての深い心づかひと異常な神經とは、どういふ場合にでも落着いた効果を出してゐる。文字が彼のやさしい睨みにすくみ上り、彫られたまゝで凝乎として動かないでゐる。四方よりや、八九間や、一二寸などといふ文字は落着きの惡い文字づらであるが、彼によつて締めつけられると、押花のやうに平つたくなつて終ふのだ。彼の締め方が類外れて強くされてゐることは、句のなりや姿が整ふてゐるのを見ても解るのだ。彼のさびしをりの締手、その心も、こゝまで來ると色々な彼の役目の重きを負ふてゐるのが解るではないか。

彼はこの世を諸行無常だとは思ふてゐない。彼はこの世をさびしいものだといふ風に考へ耽つてゐても、無常だといふことに片づけてゐないのである。この世の中で彼の必要なものは「靜さ」であり「しめやかさ」であり「さびしを

り」ではあつた。しかし此の世を詰らないとか無常だとかは思ふてゐない。まゝならぬが故にさびしくは觀てゐるのである。彼の壯大も嚴肅さもみな彼のさびしい中から彼の嗅ぎあて搜り當てたものである。彼は自分で自分の寂寞を搊り食べてゐる何者かである。酒のむものは酒を友とし、悲しめるものは悲しみを友とする彼である。彼こそは生活に面しても逃げも隱れもせぬ男であつた。寂しさを友とするものは何ものよりも勁い、彼の勁剛さの鍛へられたのも彼のさびしをりの信條があるからだ。それ故、彼の地盤はいつもゆるぎもしないでゐる。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥　（嵯峨日記）

彼の此の呼びかけてゐる氣もちの底は、しつかりと張り詰めて氷のやうに澄んでゐる。正面に心を向け己のさびしさを呼び出してくるのを待つてゐるとこ

ろに、幅と深さと用意とがある。「うき我を」と言ふ彼は、己のやうに物憂い何時も何か考へてゐるやうな人間、――物の美しさばかりを見てゐられぬ人間、――を指してゐるのである。

ほれ柴や斯と見るより蝶の殼　（泊　船）

年〳〵やさくらをこやす花の塵　（芭蕉翁全傳）

生きながら一つに氷る海鼠かな　（木曾の旅）

彼の人生觀といふものが、これらの形になつて現はれてゐる時に、さすがの彼も失敗してゐる。しかし「骨柴や」の場合は、斯と見るよりと急きこんでゐるところに、むしろ寫生的な味ひが出てゐる。併し乍らその根柢に脱けきらない人生の向きが露骨に沁み出てゐる。生きながらは何か烈しい悲哀を、此句の寫生の奥に控へてゐる。しかも表にあらはれてゐないのは、彼の用意の深いと

ころであらう。

## 花屋日記を評す

花屋日記は文曉の僞作で、文曉の作としてのみ後世を問ふべきであらう。去來支考等の合作では毛頭無い。師の病床に合作の日記を附けるほど彼らは職業的文筆の徒ではない、やうやく連坐の句作を以てする位の人々である。花屋日記が芭蕉屬纊の目安を以て、日を趁ふて記されてゐるのは何よりも後年の作であることを證左してゐる。

併し不思議なことは花屋日記の中にある或詩情ある嚴肅さだけは、何人もその當時の病臥の芭蕉とその周圍を髣髴するに足りることである。文曉の遺業と

して後代に殘るものであることは歴然としてゐる。それ故、花屋日記は一卷の蟲くひ本としての値、木板書籍としての稀覯本としての値は、確に持つてゐる——印刷本よりも木版本として讀んだ方が、あの中にある初しぐれの降る日や、元祿諸家の入亂れて集るさまや、京へ上る伏見船が沁々として讀まれる。それに花屋日記は一篇の小說的な値さへある。自分は此の蟲くひ本に時ならぬ時雨も感じてゐるくらゐ興味を有つてゐる。

肥後七代の僧文曉の作としての文章、及びその一人づつの性格範圍に稍々近づいた描寫には、油斷ならない文章のよいところがあつた。しかも此一篇は樂しみ乍ら書いたあとが偲ばれてよい。一夜づくりで書かれたものでなく經机に靠れたまま、靜かに翁の臨終を念ひながら筆を運ばせたもののやうである。それに自分だけの考へではあるが、時雨といふものの侘しさをこれほどまで、し

みじみと書いた文章は古來すくないと言つてよい。翁の臨終を前にした去來丈草支考等も取りまぜた病床記の中に、雨の降るありさまが述べられてゐるのである。

「十日初時雨せり夜の明がたより度數しれずひとしほ惱みたまへり。……」

「十一日朝また〳〵時雨す、おもひがけなく東武の其角きたる。……」

芭蕉屬纊の前後は、平常懇しい門葉等の手厚い看護に守られてゐたのである。自ら野晒の果を夢見てゐた彼が子弟の間に、靜に大往生を遂げたのは、昔律儀の門人等であつたとは云へ、今の世にも稀に見る美談である。

病中のあまりすゝるや冬籠　去來

おもひよる夜伽もしたし冬籠　正秀

うづくまる藥の下の寒さかな　丈草

しかられて次の間に立寒かな　支考

この病牀十日間の師を思ふの情、師、子弟を念ふの心は、芭蕉生涯中の樂しい十日間であつた。又、これほど門葉の心を沁々と感じたことも生涯を通じて少かつたに違ひない。醫師である木節を信じて、他の方醫を招くと言ふ木節を退けて言つてゐる。「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず、たゞねがはくば、老子（木節を指す。）が藥にて最期までの唇をぬらし候と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し香を燒て後安臥してものいはず。」（「笈日記」）と飽迄木節の醫藥に身を托してゐたところは、死に近づいても芭蕉は芭蕉たる所以のものを有つてゐた。今の世にこんな人は無からう。この子弟の情の深いことは後代に徴しても稀有のことではないか？――

落つきやから手水して神集め　木節

木がらしの空見なをすや鶴の聲　去來

足がろに竹の林やみそさゞい　惟然

初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀

神のるす頼み力や松のかぜ　之通

居上ていさみつきけり鷹の顔　伽番

起さろゝ聲も嬉しき湯婆かな　支考

水仙や使につれて床離れ　吞舟

峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈草

日にまして見ます顔也霜の菊　乙州

吹井より鶴を招かん時雨かな　普子

門葉一同の賀會祈禱の句を見ても、師の病の平癒を念々に祈つて止まぬ至誠

が現はれてゐる。芭蕉といへども斯くまでに深い心遣りには莞爾として死に就くことができたであらう。「十二日の申の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れる……」と其角の「枯尾花」にあるやうに、まことに睡るやうに芭蕉は眼を閉ぢたのである。「日にまして見ます顔也霜の菊」の祈も容れられなかつたのである。

芭蕉は病の中途で死を覺悟してゐたらしく思はれるのは、あれだけの人物であるだけに一層死に對する從容たる心が見えて來るのだ。遺言をと望まれて俳句は一句一句遺言のやうなものだと云ふあたりは、その言葉よりも左う云ふ事を言ふ彼の氣質には感心させられる。事實に於て彼の晩年の作二十句ばかりを見ると、人間の終る時らしい俤と重みとを有つてゐる。「夢は枯野」の句のあとに尙彼の句があるとは思へない。しかも「夢は枯野」で終つてゐるところに、物の終る姿があつた。「此道や行く人なしに秋の暮」にせよ、「秋近き隣は何をす

る人ぞ」の大きな陰影にせよ、それらは遂にやはり彼が最終の陰影でもあつた。しかも一文の金も持たない彼が平和な、普通人にも望めない幸福な死を疊の上に選んだことも、誰がしたといふこともない自然さで手厚い情愛の間に行はれてゐた。その手當には彼もほとほとに喜んで謝してゐる。自分自身の心の溫さが軈て彼自身に還つたものとしか思はれない門葉の看護は、芭蕉の死に面する心を澄んだ沼のやうに靜ならしめたであらう。蕪村や一茶、西行や宗祇にしても、芭蕉の如き穩かさの中に死んだ譯ではない。何よりも靜さが死の前にあることは、この世で一番托むべきものである。「先づたのむ椎の木」どころではない。彼の大往生は花や音樂よりも、人間の一番大切な人情の中に遂げられたのであつた。何人も斯る至倖の死を死んだものは無いやうである。

# 大凡兆に就いて

芭蕉は千數百吟の發句を後代に遺した。そして一茶は一萬句を越える發句を殘した。蕪村も子規もその句作に於ては芭蕉を迥かに越えてゐた。併し乍ら我が凡兆は僅かに七十數句を殘したのみであつた。しかも凡兆が大凡兆の城壁の上に輝いてゐる所以のものは、僅かに七十數句の發句に據つただけである。「木のまたのあでやかなりし柳かな」の古今に絕した光彩は、實に迥かに一萬句を後世に委ねるよりも、一層大凡兆の所以を爲すところのものである。凡兆は天明の召波や明治の子規の比ではない。彼は元祿から明治へかけての芭蕉を除いた外では、大作家の巨鱗を實に千古に輝かしたものであつた。杳たる一凡

兆は遂に今日に臻つては、再び我々の接しがたい大作家であつた。

## 季節の約定

けふは終日の雨である。

幹は濡れ草は花季を終へ起き上つてゐる。季節の約定が次第に開けて行くやうである。自分はかういふ穩やかな日に芭蕉を感ぜずに居られない。漂茫たる二百年の雨の中に彼がなほ濡れながら漂ふてゐることを感じてゐる。彼は我々に取つては一つの清い季節の感じの中にも存在してゐるやうに思はれる。芭蕉その人は最早單なる芭蕉ではなく、一つの漂茫を織りなすところの冴えであり靈感であつた。尠くとも彼は我々の視野に實に微妙な諸々の姿をもつて

現はれてゐる季節の約定の一端であつた。彼自身は既に靈感そのものに我々に映ずるやうになつた。

## 風流

芭蕉は風流人であつたらうか？――自分は彼が風流人であつたとは思はない。彼は自分で謂ふところの風流は厭ふてゐたに違ひない。彼の場合、風流は彼の氣質の中に在つたもので、後の人々がこの厭な文字の「風流」を冠せたものである。彼にはこの「風流」の說明は要らなかつた筈であつた。若し强ひてその風流を彼のために無理に押し立てようとするならば、風流の一寸前のもので、風流とはもつと純粹なものだつたに違ひない。芭蕉を風流の代表者とした

のはよい加減の文人が筆の序にさう風流人と書いてしまつたのである。

風流は俗物と壁一重のもので、紛れ易いがために一層潔い或物である。風流の變遷は遂に予の見るところでは、今や清濁併せたものであつて淸きに過ぎず、また濁るに永うせざるものゝ謂ひである。併し乍ら芭蕉の氣質の中に此の濁りの無かつたことは實際であつた。濁れぬ氣質であつたと云ふより、濁つてはならぬやうにされてゐたと言つた方がよい。門人は彼を模範とする前に彼は彼の持前の淸い氣質を一層門葉の信頼からも磨き上げたと言つてよい。彼を永く逆境に置いたとしても濁らぬ人であつたらう、併し彼をあゝまで淸純の人として絕世に殘したかどうかは分らない。彼らは知らず識らずの內に己を叩き上げてゐたのである。敎へる者の敎へられる渾然さは彼と門葉の間にこそ瞭らかに考へられるのである。

彼は米塩の資に事缺いても直ぐ心の荒むやうな人ではなかつた。彼はさういふ事すらしみじみと心に應へてゐた人である。さういふ生活の不如意のことさへ、彼の心へ何時も何物かを加へつゝあつたこと、それが彼を育てゝゐたことは疑はれない。貧乏人でよい素質を有つた人間の素直さは、何とも云へず美しいものである。八方に開いてゐる心のゆとりを見せてゐるものだ。ぬけ口を樂に持つてゐる彼らには鬱屈してもその度合が違ふのである。小金のある輩は必らず一方のぬけ口しか持つてゐない。彼の鬱屈は面眉を曇らせる鬱屈である。芭蕉はぬけ口を持ち合せてゐた人である。

「先日は立寄さま〴〵御馳走殊にわらじまで貰ひ忝存候翌日倶利加羅を越、金澤に着申候、因縁も候はゞ再御目にかゝり可申候以上。」わらじはわらじ錢のことである。しかも玲瓏として快い響をもつて聞かれるではないか。しかもかう

いふ芭蕉でありながら同じ北越行脚で生駒萬子からの獻金二倆を斷つたりしてゐるところを見ると、彼は彼だけ使ふ分を持てばあとは何時も斷つてゐたらしく思はれるのである。左ういふ心の正しさを自分で期してゐるところは、何者の清廉よりも一層清雅である。放浪人の性根にはこの一面の清徹が無かつたら、遂に漂泊者たる雅人の資格を缺いてゐる譯である。

「伊三郎殿庭にて的御座候由見物致と御申越、弓見物さらひに御座候間參り不申候以上。」

これは風流とは反對のものを斷つてゐる彼である。溫和な彼が弓矢の興を覺えなかつたのは一理あるが、實際に於て武張つたものは餘り好まなかつたらしい。彼は彼の道さへ辿ればよいといふ考へを最後まで失はなかつた人である。彼の口譯掟によると、草木や鳥蟲の生命を容易にあやめてはならぬと言ひ、門

葉をいましめてゐる。實にさういふ一面もあつたらしいが、「草庵鼠多く候間今夜猫おかし可被下候長助御申付なされ」云々の書簡を見ると、かれも鼠の生命はあやめてよいものと考へてゐたらしい。草木鳥蟲に心を配る彼が、なほ鼠の憎むべきことを知つてゐる。魚の生命の場合でもそれが爲方の無い場合はよいと言ふてゐる。彼もまた自分を信じすぎた時は、人間らしく大見榮を切つたことも無いでもないらしい。鳥蟲をあやめることの不可をいましめる氣稟の中に、可成に思ひ上つた芭蕉が髣髴してゐるやうである。

しかも彼の性質の中に曾つて深い憎惡のあつたことを私は知らない。彼は憎みの情を超えて憐む心になつてゐるらしく思はれる。對手を憎むといふ強い心でなしに、さういふ氣もちを通り越した或もの、つまり哀憐で終始されてゐることが解る。路通の場合もさうである。彼は餘りに苦勞人であつたゝめに何も

彼も己の中に、凝乎とおし靜めた人ではなかつたか？――そのために爲人としての彼があれほどまでに大成されたのかも知れぬ。貧乏人は自分の中に世間をおし靜める氣質を稀に持つてゐるものである。又、世間の問題を自分のものとして慨する輩もある。彼の場合は何事も沈めて置く優秀な本質から、憎み悲しみすら己のものとしたに違ひないと思ふてゐる。

結局風流といふものも予の如き小量の人間に取つては、世間へのかくれ蓑だとしか思へない。その中にあれば靜さがあり世間の騷音を拒絕できるからである。何事もそこには自分をいたはる心ばかりがある。他の何ものもが無い。自分はさういふ隱れ蓑の中にゐることを願ふてゐる。こゝから自分を引きずり出す者はない。さういふ者がゐても自分は出ないであらう。併し芭蕉はかくれ蓑を着てゐなかつたのだ。彼はその點では何の用意もない清朗の心でゐたらしく

思はれる。予の如きは自ら立ち籠るところがあるが、かれは自然に自分の行くところに行つてゐる。すこしの濁りも見せずに。――其處は自分の如きは到底至らないところだと殘念乍ら思ふのだ。あれほど、すらりと行くにはその本質がどれほど善いものであつたかといふ事を感嘆させて來るのである。素直だとか、清純だとか、さういふ言葉では云へないものがあつたのだ。二百年の間にかういふ人物が再び得られなかつた程、かれは稀な現れであつた。これを思ふと何とも云へない快い氣もちになるのだ。

## 路通の俳號について

芭蕉は果して路通に俳號を與へたのであらうか、路上の一餓人に對して此の

路通といふ命名は、芭蕉の愼しみ深い性質から推して、殆眞實とは思はれないくらゐである。乞食の俳號を路通といふのは、路通自身には輕蔑されてゐると同樣である。しかも永久に輕蔑されてゐるやうなものである。

これは路通自身が芭蕉に會ふ前から持つてゐた俳號であらう、路通は芭蕉に邂逅する前から歌俳諧を路上にひさいでゐた風流歌人の輩であつたらうから、その路通の俳號を持つてゐたことは事實であらう、自分は芭蕉が命名したとはどうしても思へない。

## 大新人

芭蕉が元祿を壓してゐた所以のものは、殆比類なきその時代の一大新人であ

つたからであらう。新人中の新人、殆何人も此の新しさには惹き付けられ驚かされたのであらう。今から想像して見ても國木田獨歩の出現や、子規の時代の新しさではなかつた。前代未聞の新しさであつたに違ひない。

## 選料

芭蕉の生活費は句卷の選料であつた。貞徳が一倆を取つてゐたことは傳說であるとしても、芭蕉の選料は相應に收入があつたものに思へる。しかもそれには額の多少もあつたらうが、彼の生活費の大部分はこの選から出たものであることを忘れてはならぬ。

# 短册

芭蕉の短册や書簡が比較的殘つてゐるのも、無理强ひに書かされたためもあらうが、彼の在世時分からして相應の市價があり、歿後その市價が勃然として上騰したゝめ、所藏家が大切に秘めてゐたからであらう。今は短册一葉にすら數百金を抛たねばならぬ。しかも僞筆に至つては天下に枚擧の暇も無いくらゐである。

蕉門の徒の短册に至つては、殘つてゐるものは稀である。路通の如きは殆絕對に無いかも知れぬ。以後今までに家藏されてゐたものの發表されないかぎり、絕對に吾々の眼に入らないと言つてよい。この絕對に吾々の接することのでき

ない蕉門諸家の眞蹟を念ふことは、限りない敢果ない氣もちであり又同時に幽遠でないこともない。

## 「かぴたん」の句

延寳年間、芭蕉三十五六歳頃の句に、「かぴたんもつくばはせけり君が春」といふのがある。かぴたんは當時のオランダ商館の主事のことを言つたものであるが、これほど芭蕉の句の中で俗流の匂ひ烈しい句は無いやうである。つくばはせけり等と言ひ、將軍家を君が春などと言ひ、一代の寂びを慕ふた彼らしくも無い風俗の情に走り、媚び諂ふた下賤の心でゐる彼を見ることができる。自分は彼のやうな人物にもかういふ作句を考へさせた時代的な習俗に同情はない

ではないが、併し何たる不愉快な發句であらう。

當時かびたん輩が貢物を贈つて將軍に下坐したことは實際であるが、芭蕉までがその優越感を持つてゐたことは爲方がないとしても、作句の上にまでその氣持を殘してゐることは、後代の吾々を不愉快にするものである。彼と雖も遺憾なき人物の完成されたものではない。併し此の發句の上に現はれたものは吾々の信ずる芭蕉として受取りがたいくらゐの、最も彼の彼らしくない凡俗の彼を代表したものである。併し乍ら此發句に據つて元祿時代のかびたん趣味がいかに流行してゐたかゞ分るやうである。

# 理解

芭蕉を理解することは總ゆる元祿の文獻を獵ることではない、彼の氣質に近い人間が自然に彼に惹かれてゆく心を言ふのであらう、もう一言いへば彼を理解する前に己の分を知らねばならぬ。己の分を知るものは、芭蕉の中に這入ることが出來よう、單なる彼の發句の解釋は文字通りの解釋となる前に、自分等の心の向きと彼の心の向きとの、秀が揃はねばならぬことだ。

人間ができてから芭蕉を理解せよといふのは、少くとも十夕を秤るものはそれだけの品物を持たねばならぬ謂ひでもあるのだ。秤にかけられぬものを持ち合せてゐても、それは叶はぬことではないか。

# 鶯の句

芭蕉の句の中には、最う一步あとへ退いたら千例の月並の谷間へ墜ち込むやうな危い句がある。彼の高雅と幽遠との砦を守るべき句の中には、僅かな微妙なつながりを有つてゐるだけに、一步は月並の陳腐へ、一步は高雅幽遠の城廓に引つかゝつてゐる句がある。それでゐて月並へ墜ちないで立派なつながりを見せてゐる。

鶯や雀よけ行枝うつり　芭蕉

此の句の精神、動きの危なさは、心なきものをして鶯の高雅はその心に雀を避けるやうに考へ至るであらう、そして陳腐だといふかも知れぬ。しかし此場

合の鶯の枝移りしてゆくありさまには、雀とは全で違ふた素質の上からの枝移りである。微妙な鋭さ、當然別途に就くべきものの小氣味よい優越された氣持が、鮮に目前にある。併しながら斯様に高雅な句であるにかゝはらず危なさをも一層伴ふてゐる。

芭蕉のうまさや高さ奥深さは、實に斯様なところで何時も美事に完成されてゐるのである。名人の心はかういふ危さの上に確つかりと坐つてゐて動かないのだ。土俵ぎはで持ち應へる力である。假りに自分らが此の材料をこなすとしても、かういふ危い表現はしないで、安らかに詠んでしまふ。少しも月並の臭ひや憂ひのないものに作つてしまふだらう。併し乍らこれだけの表現のうまみを殘すことができない。

この句は寫生から這入つて行つてゐるやうであるが、その動きの幽さ美しさ

は春寒のまだ芽のない楓か何かの、鋭い枝の間に動いて見える鶯である。觀念の句も多いが此の句には何等の意圖がなく、からりとしてゐて氣もちの高い張りをも句の裏に窺はせてゐるやうである。

## 竹植ゑる日

此間からあとさき三度ばかり庭に竹を植ゑさせたが、三度とも晝深く夕方に近いころに風が出て來て、竹植ゑると風が出るのが我庭の歲時季のやうに思はれた。自分は芭蕉の竹植ゑる日の文を思ひ起した。

「ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉」の如きは、その氣持の細かさは解るのであるが、芭蕉としての心のしをりの沁み出てゐない句である。かれの失敗には

ぬけ道はあるが、「かぴたん」の句のやうに、千古の惡句となることが無いでもない。

## 「一つ家に」の句について

奥の細道の句、「一つ家に遊女もねたり萩と月」は、小說的な哀愁のある句である。遊女が隣の間にゐて一と晩ぢう老いたる附添の女と物語つてゐる有樣に、眼冴えて眠られないでゐる芭蕉は、同じ心でゐる同行の曾良を顧みて、自分の力では女をどうも救へないことを嘆いたであらう。

女が芭蕉に身のありさまを搔き口說いたのは、行脚姿の芭蕉を僧都だと思ふたにちがひない。普通の旅行者と見てゐたら幾ら遊女になる女でも、容易には

身の上を話すものではなからう。片雲に身を委す僧と見るのは當り前のことである。彼の姿とその顏容、または物の言ひ振りの閑かさは、我々がその當時見てゐても僧の外のものではない。

芭蕉がこの女を振り切つて去つたのは、女が美人で無かつたのに原因するかも知れないが、それよりも肝心なことは、情に惹かれても身の及ばざることを知つてゐたゝめであらう。彼の經濟的生活には女を救ふだけのものがない、彼はよく自分を知つてゐるものであつたらう。進んで宜い加減なことを言はないで去つたのは、やはり情に惹かれてもその情に沈まない確さを持つてゐたことが分る。

# 擬芭蕉手簡

杉風宛

先夜失禮致候其の節の忘れ物唯今次郞兵衞に屆致させ候間落手被下度、乍序夜來の春雨の爲め少々雨漏難澁致候、此前雨漏候ひしより何の加減にや久しく其事無之候ひしが、昨夜來急の事とて手の付よう無、屋根方丈八に言上願上候、乍序先般の羽織の御禮內室に言上被下度右まで以上。　ばせを

北枝宛

御手簡辱く拜受、その節の御禮申上べきところ歸庵早々の疲勞にて諸方御無

音に打過御許被下度候、御地風光まだ眼前に有之、野田山の松籟、蟬の啼音も今に忘難く存じ候、殊に野田產の茸お送被下、丈草諸共珍重致候、丈草も又御地一遊の有心と申居候へ共、此儀披露下さるまじく候、

末筆乍、牧童、句空雅丈へ宜傳申可被下候、萬子よりも先日音信有之、風流祝着に存居り候。　ばせを

去來宛

貴墨恭拜受、後頃より參上可致候、御內室に宜敷申傳被下度候。　ばせを

萬子宛

先日一笑より水鷄笛贈越し殊の外興多く存申候、貴樣御手翰に據ば河鹿笛な

るもの御地に有之候由、鳩笛と又同様の物ならんと存ぜられ申候。
お示しの發句三誦致候、風雅のしをり靜かならんもの殊の外喜入候。

# 芭蕉の一面

# 金澤行脚と生駒萬子

## 「奥の細道」一考

一

元祿二年三月の下浣に江戸を出廬した芭蕉は、奥羽行脚を終へ、越後から越中の海べりを通り、倶利迦羅を踰え、加賀金澤の大樋口へ着いたのは稍々秋風のそよぎを稻田に見られる七月の中頃であつた。同行の河合曾良と共に長途の旅寢の露に顏容いとゞ疲勞してゐたが、奥羽山川を跋渉した芭蕉は自ら何物かを、その容貌に加へられてゐた。山川を獵るものゝ絕え間なき新鮮な幽情が芭蕉の

面を眉壓してゐたことは當然であらう。

早稻の香やわけ入右は有磯海　芭蕉

越中黒部の吟詠であらうと思ふが、前書には加賀にてとある。「有磯海」「卯辰集」には越中の吟懷になつてゐる。越中から加賀に踰えるには倶利迦羅峠がある。ともあれ荒磯づたひに加賀近い平原に入つた氣持は明かである。

當時金澤には、秋の坊、牧童、北枝、萬子、小春などが主になつて芭蕉歡迎の宴を開いた。餘程數寄な凝つた料理を饗應したものらしい。今でも金澤の料理には儔昔の俤を傳へる凝つた獻立が町家にさへ殘つてゐる。森八などと云ふ菓子屋は二百年來の製菓の記録を藏してゐるやうに、料理も大藩の奢と習風を有つてゐるのである。伊賀を故郷に持ち江戸の陋居に貧しい暮しをしてゐた芭蕉は、鴨の燒物や犀麻の鮎、卯辰山の柴茸やあぶら鮴のお汁、河豚の塩漬や胡

桃の煮付などの數々の料理には、有繋の芭蕉も驚いたことであらう。北枝兄弟の熱心な調理振り、信長を先祖に有つ生駒萬子の肝煎、加ふるに宮竹小春の主振りの斡旋には、芭蕉も人の好意と自分の心のあるところが添はないまでに、暫くは物も言へないで坐つてゐたであらう。溫和な人である故にすぐにはその斡旋を斷りにくかつたが、併し酒肴一巡の後に芭蕉は斯う言つてゐる。

「今宵の馳走のもてなし大名方の高膳の如く重々し。我をもてなさんには一椀の粗菜と一膳の飯にてこと足れり。何ぞ珍味を選び山海の魚菜を望まんや。後の日の會にはかかる心づかひと無益の費ひは必ず仕給ふな。」

それ故後の吟會には粗菜をあしらふた茶漬料理を出したのであつた。芭蕉はこれこそ我望むものなれと言ひ、懇しげに加賀の油揚を喜んで食べ、秋茄子の鴫燒に舌づゝみを打つたのであつた。

芭蕉は油あげや豆腐、就中、蒟蒻の類が嗜きであつた。梅石（此人物の存在は餘り信じない。）宛の書簡の中にも、「昨日は御法事相濟一段候其節之油あげ殊外好味わすれかね候、御座候はゞ少々もらひ申度候以上。」と油あげを重ねて懇望してゐる。又、「今晩でんがく被致候よしかたく御やき賴入候、出來次第御遣可被下候。」又、「とうふ汁よろしく候間今晩は賴入候出來次第遣可被下候。」その他「まんぢう七つあぶら上げ五つからし三文御こし賴入候。」庄八宛。「以上翁反故。」それ故、金澤の常場物料理は特に氣に入つたのであらう。恐らく油あげや蒟蒻の類も膳の上に竝べられた樣に思はれる。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花　（小文庫）
蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉　（若　菜）
蒟蒻と柿とうれしき草の庵　（もとの水）

句による蒟蒻には一道の風雅な味を含んでゐる。芭蕉の食物好みの中にも、何やら優しい粗食の中に風色を帶びたものが感じられる。食物の好みとその人がらの心の容子とは、結び合せて眺めると自ら釋然とするところがあるものである。

「諸禮停止は風雅の舊制也、何の謝する事やあらん、みな〳〵近う圓座し給へとて、茶漬一二椀さらさらと打したゝめ、風雅は斯くこそあらまほしけれ、すべて酒食の奢に隙を費して、俳諧の味を忘るは、遊里、戯場の物ずきにして、風雅の席には無下なり」（遺語）

芭蕉はもう四十六歳を數へてゐる。猿蓑集完成の二年前で、一見、その風格の中に廻かな皖みが、晩年近い故か、冴えて人の面を打つたらしい。溫厚の中にも得も言はれぬ氣高いところがあつたと去來が絶えず口にしてゐたことも眞

實であつたらしい。當時金澤俳人の眼からは或は神の如く見えたかも知れないのである。萬子がその折に書いて貰つた「南無當來佛」の五文字軸を朝夕に拜してゐたさうであつた。「干網集」にも芭蕉を夢見て神の樣に書いてある。――殊に田舍の謙遜の心を持つ秋の坊や北枝、小春の徒が、平常から尊崇の的にしてゐた芭蕉と對坐する時に異常に敬遠してゐたことも思はれる。「みな〳〵近う圓座し給へ。」と芭蕉が改めて挨拶する程、かれらは疊を隔てゝ遠坐してゐたものらしかつた。師弟の間には嚴格な人であつたが、(これは故意としてゐる譯でなく、自然に彼等門人が作つた雰圍氣ではなかつたか、芭蕉自身の中にも曲つた事、正直ならぬ事、禮節を外にした事等を嫌ふた德があつたためであらう。芭蕉庵の壁紙に句作の折に柱に靠れぬ事、人の煙草を喫まぬ事、他人と話を交へ句作の邪魔にならぬ事等が記されてゐて、出入りの人々は自然にこれを守つてゐ

たさうである。）それでゐて或る程度までの温柔を保ち乍ら、却々その底が分らない或る一點の深さをも持ち合せた人であつたらう。丈草去來、嵐雪其角の輩をはじめ、鬼貫一徒、そして全元祿の年代を擧げて誰一人として芭蕉を誹る者がゐなかつた程の晩年に、人望と徳と畏敬の的であつたのも、その心がけの眞摯さ温かさ嚴格さに人々の心を惹きつけたものであらう、武人に之を求めても徳川の如きものではない、己が門をつくると云ふこともなく、また他門をそしり侮ることもしなかつた。貞徳宗因の諍ひをも芭蕉は靜かに眺めてゐただけである。宗因なくば今日の俳諧なしとまで彼は言つてゐる。

## 二

ともあれ彼の如く子弟の間に厚く念はれ敬はれたものは、殆ど較べるものも

持たぬと言つてよい。今の世の師弟の道廢れ世態人情の澆薄さにくらべると、皓然たる鏡の如きものがあつた。昔の人の律儀さを思ふ前にあの人の徳を知りたいのである。

芭蕉は金澤俳人の中に既に小杉一笑が亡くなつたことを知り、一笑の兄と追善の一卷を殘した。

塚も動け我が泣く聲は秋の風　　芭蕉

一笑は芭蕉と交通があり一笑も芭蕉に會ふために樂しんだが、芭蕉がまだ行脚の一年前に一笑は亡くなつてゐたのである。

「加州金澤の一笑はことに俳諧にふけりし者也、翁行脚の程、お宿申さんとて遠く心ざしをはこびけるに、年有て重勞の床にうち臥しければ、命のきわもおもひとりたるに、父の十三回にあたりて、歌仙の俳諧を十三卷、孝養にと

て思ひ立けるを、人々とどめて、息もさだまらず、此願のみちぬべき程には、その身いかゞあらんと氣づかひけるに、死すとも悔なかるべしとて、五歌仙出來ぬれば、早筆とるもかなはず成にけるを、呼（かたいき）に成ても猶やまず、八巻ことなく滿し足りて、これを我肌にかけてこそ、さらに思ひ殘せることなしと、悦びの眉重くふさがりて、

心から雪うつくしや西の雲　一笑

臨終正念と聞えけり、翌年の秋、翁も越の白根をはるかにへて、ノ（べつ）松が家に其餘哀をとぶらひ申されけるよし。（其角、雜談集）

一笑を旅に追善する芭蕉の深切な心は當時の加賀俳人の心に美しい餘映をあたへた。その他、秋の坊と北枝の間が何時も口爭ひの絶えなかつたのを、同好同門の睦びを解いて永い間の犬猿の仲を和らげたことも、遺語集に揭げられて

ゐる。

併しその時代に屢々あつたやうに、金澤俳人の中に唯一人、貞門を固守して芭蕉來錫の折にも會はなかつた男があつた。山茶花友琴といふ人で、頑固に門を閉ぢて芭蕉と交遊しなかつた。芭蕉はその事を聞いて友琴の心あるところ、人その門に隨ふことの淸節を愛したさうであつた。一代の芭蕉を向ふに廻しての友琴の押しの强さもさることであるが、性格的に金澤人には左ういふ頑なところがあつた。自分は友琴のその心を嗤ふことはしないつもりである。何故と云へば當時北越の俳雅の士は皆一堂に參集つて、厤の川の畔で親しく天下の芭蕉と談を交へたからである。秋雨のそぼ降る草庵に坐り乍ら辭して俳席に列ならなかつたことを思へば、友琴もまた淋しく切ない男であつた。（友琴死後、その追悼句集「艶賀の松」の中に北枝の句が載つてゐるところを見ると、北枝も友

琴死後にその追悼の句に吝でなかつた事、芭蕉來錫の折に出席しなかつた事などの不愉快を解いたものである事、いかにも北枝らしい恬淡な氣質で交友してゐたことなどが解る。）――北枝は行を同じうした曾良と、芭蕉が金澤を辭し去つた時も、越前丸岡まで同行して別れを惜んだ。金澤では芭蕉と野田山に一遊して、松籟と茸狩の半日を送つたが、北枝は蚊やつり草とはどういふ草なりやと芭蕉に尋ねた。芭蕉はあたりの雜草から黄葉の雜つた蚊やつり草を尋ねあて、北枝に示したさうであつた。（遺語集）北枝は「翁にぞ蚊やつり草を習ひける」と即吟を殘した。芭蕉の北枝を愛したことは、山中の桃妖に劣らなかつた。北枝も師叟を慕ふこと深かつた。

丸岡にて翁に別れ侍りし時扇に書き給はる

物書て扇引さくわかれかな　芭蕉

咲うて霧にきほひ出ばや　北枝

秋涼し手ごとにむけや瓜茄子　芭蕉

句選年考によると、西の雲集に松其庵樂會即興と有、殘暑しばしとある。韵塞に訪草庵と前書がある。花の故事集に小幻庵にて「殘暑暫し手毎にれうれ瓜茄子、」とある。おくの細道にはある草庵にてとある、――此の一句でも解るが、殆金澤の名物は大半食べてゐるやうである。此の瓜茄子と芭蕉との比較は金澤の光景らしく興深く思ふた。

翁を一夜とゞめて

宿るまでの名殘なりけり秋の蜩　小春

あたら月夜の庇さしぎる　芭蕉

初嵐山ある方のはげしくて　曾良

江ぷちのりこす水のさゝ魚　北枝

此連句を見ても、小春の庵か或は野田の東雲寺かに芭蕉が泊つたことが判る。「初嵐山ある方のはげしくて」は今の野田山のことであらう。

金澤を辭し去り野々市の里から松任の村落に入らうとした芭蕉は、途上の見送りに遲れた生駒萬子が、裸馬で松並木のある往還を馳けて來るのを見た。萬子は千石の祿を載きお馬廻りをしてゐたので、馬を縱横にこなすことが出來たのである。そして加賀絹一反と、金子三兩を惜餞の贈物として芭蕉に捧げたが彼はそれを受取らなかつた。一簞一瓢の樂しみを說いた芭蕉は、自分の生活に餘裕を置くことを嫌ふたらしかつた。萬子も枉げてと言はず芭蕉の心のあるところを心とした。（生駒萬子、世祿千石を襲ふ、馬廻組、芭蕉行脚の元祿二年に

は三十六才、享保三年北枝が歿した翌年六十六才で死去してゐる。）萬子の年代を擧げて見ると、鬱然たる元祿の大家の死生往來が分る。

承應三年　生駒萬子生る。服部嵐雪、宮崎友禪生る。
明暦三年　森川許六生る。
萬治元年　前田利常卒去。
萬治三年　榎本其角生る。
寛文五年　渡邊支考生る。
寛文十二年　僧浪化上人生る。
延寶元年　世祿千石を襲ふ。貞言歿す。
元祿元年　小杉一笑歿す。
元祿二年七月中の五日、芭蕉來錫。

元祿七年　芭蕉卒す。

元祿十五年　千代女生る。

元祿十六年　浪化上人歿す。

寶永元年　去來歿す、丈草卒す。

寶永元年　支考、金澤に來る。

寶永二年　季吟歿す。

寶永四年　寶井其角卒す。服部嵐雪歿す。

寶永五年　支考來北。

寶永七年　惟然卒す。

正德五年　許六歿す。

享保三年　北枝卒す。

享保四年　萬子歿す。（時に六十六歳。）

萬子はそれ故「翁は諸國に門人みちみちて其道の融通は事たりぬべし、我は方外の友と成て、あまねく俳諧を守護すべし」（一葉集）と云ひ、騷人詩客を暗にねぎらうてゐる。秋の坊、北枝に助成したこと、一つは芭蕉の心に感じたからもあらうが、餘財自ら事足りたからであつた。芭蕉は金錢に恬淡であつたことは、恬淡でなければならぬ事情があり、特に金錢を得るに道も無かつたからである。

三

芭蕉庵の柱には一つの瓢が吊されてあつて門人等はその中へ勝手に米を入れては去つたものと云はれてゐるが、之は實際の事であつたらう。杉風や許六の心づくしもある。併し芭蕉は貧窮一錢も得ないで机上幾帖かの料紙を用意した

り、時折々の着衣の好みも衣裳の上に現はれてゐるのは、恐らく平常金錢の事を口にしない人であつたからで、心ある人は自然に喜捨したものであらう。着物は茶がつた澁い色を好み、食物は凝らぬ野菜を友としてゐたやうである。そして寢るには薄い布團が一枚、枕一つあれば事足りる人であつた。又俳諧に身と魂とを預けた芭蕉は當然貧乏を心得てゐたので、人から見る程苦しくはなかつたのであらう。却つて彼こそは一顆の冬瓜を得て夜寒の部屋で沁々と樂しみ眺め、そして明日も明後日も安閑とそれを食べることを思ひ、その日の俳道をいそしんだ人であらう。明日を分らぬ暮しであつた爲め勢ひ金錢に拘はらず、その事は不自由ながら杉風その他の門人等がして呉れたのであらう。それすら芭蕉の氣もちに入つてゐても、芭蕉は默つて受納してゐたに違ひない。貧故に謹しみ、貧故に物貨の欲をあらはさず、貧故にこそ一生食べられた幸福の眞髓

を舐めた人であつた。併し彼が日夜の窮乏は彼ならでは知る事の出來ぬものがあつたらう、人知れず己の貧乏に姿を亂すことは無かつたらうが、心、辯屈したことは屢々であつたであらう、併し俳諧はその辯屈を正したことは實際であつた。市に草稿を賣る文學修業時の貧窮も、屢々その作をつくる時に可成の慰めを得る様に、彼もその一途にあつた事が首肯れるやうである。彼の羈旅の費用は杉風や許六、丈草なぞから出てゐる事、また史錄に現はれぬ篤志家の獻金による生活の事等を思へば、江戶へ出てから何一つ世間的仕事（水道工事のことは問題ではない。）をしない芭蕉が、よし代は元祿の昔であつたにしても不思議なくらゐの太平の逸民であると言つてよい。併し金錢の上から芭蕉が世上俗流の批難を一つも受けてゐないところから見れば、その人がらの中に世情人心の口を塞ぐやうな高潔と清純を併せ有つてゐたことが、今から考へても自ら首

背かれるのであつた。常にどういふ意味からも人々を感嘆させるやうなところ、常にとうてい及ばない人格の何物かを有つてゐるところ、常にあまりに物事にこだはらぬところ、人のものをも自らの物をも區別しないやうな生活、それでゐながら俳道の事は一歩もゆづらぬところ、心の問題は常に燈明のやうに胸に持つてゐたところ、凡夫にさへ何かの意味に於ても偉さを刺し徹してゐたところ、時として近づき易く又時として近づき難い畏敬を窃かに人の心に起させたところ、柔和と端嚴と交へてゐる物靜かさ。さういふ數限りない一切のものを有ち併せてゐる人格であるらしかつた。一寸見には親しみ易く二度目には氣難しく、次第に親しむごとに一枚づゝ殆無際限に己の心の皮を剝いで見せるといふ人がらででもあつたらうか？　――路通を破門し乍ら又彼を再び愛し慈しんだ心は、徒らな溫厚を賣物にした人でないことが解る。

萬子の餞別を辭した芭蕉であつても、金澤逗留の費用は金澤俳人が持ち寄つて負擔してゐる、それは當然の事であらうが、さういふ氣持も交つて斷つたのであらう。旅中多端の芭蕉が恬淡にその事を斷つてゐるのは、彼の氣質が、どういふ時にも弛まないでゐたことを證據立てゝゐる。どういふ時にも隙間のない批難のない言行動勢をしてゐたのは、自らを謹んでゐた以外、多くは彼の本質がさう常に彼を行動せしめたものである。氣質に靜寂を、行爲に淸閑を、友愛に端嚴を、師道に眞實を、恩愛には優柔を兼ねてゐたところの、純日本人風の代表的な氣持をあれほどまでに完成した人は古來少數ない。利久の淸閑には覇氣と凜才とがあつた。秀吉をさへピリッとさせる苦蟲を胸底に持つてゐた。併しその人がらに何故か風流人としての止み難い型があつた。西行の歌の拙いのはその心の貧しさ拙さに依るものとして見られぬが、何よりも西行を思慕し

乍ら西行を超えた芭蕉が遙かに立勝れてゐることは、その西行を踏臺にしてゐることでも解る。

何の木の花とは知らす匂ひ哉　芭蕉

雲折々人を休むる月見かな　同

その他西行を踏んだものが多い。宗祇や杜甫に淑した彼が、何時の間にかずんずん先へ伸びたことは、芭蕉の中のものが立勝れてゐたからであらう。芭蕉は人の句、人の歌の心を盜むことに於て大膽不敵であり、そして盜まれたものよりもずつと上にゐるのは、彼が絶世の詩人であつた所以であらう。凡庸の徒は人の作を踏み且つ盜むことをすら知らない、——

# 芭蕉と詩に就いて

元祿時代にもなほ新體詩といふ今の詩の一形式が存在してゐたら、あるひは芭蕉は新體詩をも書いてゐたに違ひない。今の世に彼が一青年として存命生活してゐたら恐らく第一流の作家でなければ、古今を絶した大詩人の面影を持つたであらう。幸か不幸か彼は元祿の大作家だつたから、特に彼を現世の文學者として數へる必要はないが、彼の新鮮無双の大器は現世の文學に存在してゐたら、どれだけ我々を驚かせる大作を書いてゐたかも知れないのである。

彼の英才と今ある文明との存在は、恐らく曾て我々をして舌を卷かせた元祿時代の彼をして、一層新鮮無適な表出を以て迫るであらう。何人も彼の前に跪

座せしむべき一大壓迫としての顯れを見るであらう。

彼をして飛行機や自動車の今の世を墓下から垣間見させたら、彼は温籍の微笑を浮べていふであらう。「わしもそれは考へたこともあるが、人々は笑ふであらうと思ふていはなんだ。」

そして我々は「この秋や何で年とる雲に鳥」の幽遠を思ふ時は、飛行機などの發展は實に遲れてゐるとしか思へない。

何人も芭蕉を有名なる作家とせずに、既成的な大作家としないで、もう一度朝暮の我々の讀物として愛誦したら、彼を一層愛することができよう。あらゆる芭蕉的文献の歎賞の前に一個人づゝが、ひそかにこの作家を個的に樂しみながら讀むことは、決して無益なことではない。——

假りに彼から枯淡を抜き、風流を去り、さびやしをりを掃き出し、吾々は新

文學としての彼の存在や、彼の意氣や、新鮮や、雲霧を睨むところをもう一度見直して見るのも、決して我々の親密を過つものではない、――そして我々の始めて氣付くことは、實に彼が新文學の要素を驚くほど豐富に我々に感じさせることにおいて、我々は彼を見直したことの徒事でなかつたことに心づくであらう。

芭蕉は誠の發句を開祖した。それよりも以前、彼は人間の心にあるもので、あれほど永い間隱れてゐた靜さを、あれほど永い間かゝつて現し盡した。

自分は神を信じることができないが、芭蕉を信じることができる。かう言つても自分は別にこの「信じ」方について、誇大だとは思はない、一つは神がどれほども自分に働きかけないけれど、芭蕉の働きかける力が大きいことを證據立てるに外ならぬ。神はいふであらう。

「あの男にはおれより芭蕉が偉く見えるなら勝手にさう思はしておけ。今に目が覺めるだらう。」

自分には今に目が覺める時があらうとは思へない。一日づゝ彼が好きになる外、一日づゝ彼に深まる一方であらう。

# 蕉門の人々

# 凡兆論

## 一

凡兆は常に大凡兆であらねばならぬ。蕉門中の英才であり、同時に元祿の作者としては凡兆を超えるものは稀である。遂に丈草と雖もこの作者としての凡兆の次に位すべきものではなからうか。才幹の鮮鋭、結構の新整、焦點の狂ひなき非凡の逸品は、蕉門の誰人も一席を讓るべきであらう。猿蓑集の選をあづかつた彼が自分の作品を多く出句してゐる手強い自信には、芭蕉も言葉を挿むことを控へてゐるくらゐ、彼の句柄は秀れ纒つてゐる。單に秀れてゐるばかり

ではない、蕉門のあとさきを通じて彼のやうな作者は稀にも皆無と言つてよい。

凡兆の見たものにくるひの無いことは、その性根の坐り方の確實さを感じさせる。大作者といふものは常に粒の揃つた微塵もゆるがない或物を持つてゐるものである。我が凡兆は總ての大作者の面影であるところの、一句として粗末な姿を持つてゐるものは無く、それぞれの鋭い風情の中に數少ない此の作者の世界を引提げて立つてゐる。猿蓑集以前の作はともかく集中のものは悉く逸品で、稍々ともすれば作者としては芭蕉の右肩に聳える一高峯であつた。去來支考又は嵐雪の逸品を以てしても、凡兆を拔くことはできないと言つてよい。極言して我が日本の俳道は元祿に盡きてゐると言へるなら、芭蕉が最高の山嶽であるとしたら、凡兆は鋭峻なほそみのある高峯をもつて、絕えざる千古の風雪

を戴いてゐたらうと思へるのである。彼は何よりも新しい生々した力を持つてゐる。芭蕉の新しさは同時に百年の古さを以つてゐることに深い枯寂があつたが、彼の新しさは唯その新しさばかりの生一本で通つてゐるから驚くのだ。しかも萎えることのない新しい鋭さで、今、枝から下した花實のやうに水々しい。斯樣な新しさは蕉門のみばかりではなく、遠く天明へまでも其の翼を擴げて羽ばたいてゐる。何人もこの翼の下にあることは決して偶然ではない、しかも作句の數の少數い彼が、斯くまでに凡兆が大凡兆の名を傳へるまでに至つたのは、その句作の腹が巍然として定つてゐたからであつた。

　も一つ見究められぬ膽の太さが句の中を打ち貫いてゐることに氣づく、しかもそれらは彼の作句を重厚無類ならしめた所以であつた。蕉門中彼の如く重さのある句を齎したものはゐない。芭蕉と雖も彼に見るやうな重さを稀に缺いて

ゐた。これを風韻孤寂の丈草法師に較べたら、彼の寂しく幽かなるにくらべ、凡兆の力ある生々しさに今さらながら氣が惹かれる。丈草は高く雲をいたゞいて聳えて逈かではあるが、凡兆の峯の秀は晴れて殘雪を棚引かすところの鋭さを以つてゐる。一つは高遠で彼は峻嶮であるが如く見える。

二

せり上けて蒼をこぼす葵かな　凡兆
木のまたのあでやかなりし柳かな　同
捨舟のうちそとこほる入江かな　同
古寺の簀の子も靑し冬がまへ　同

これらの中にある凡兆の新しさは、打透つてゐて濁らぬ新しさが走つてゐる。

「せり上げて」の旺盛可憐、「木のまたの」の幽清細緻、ともに彼が眼光の凡ならざる底を示してゐる。「捨舟の」の畫趣、「古寺の」の鋭い簀の子を見た彼は、漸くその句の丈に師翁の俤を漂はしてゐる。「せり上げて」の世界は天明の蕪村のねらひどころであつたに違ひない。しかも「木のまたの」のに至つては近代アララギ派歌人も舌を卷くところの新鮮である。彼の心にある熊手の打ちかけ方は此等の句の上にさへ確乎と引かけられ、最う動かないところを暗示してゐる。

灰捨て白梅うるむ垣根かな　凡兆

骨柴のかられながらも木の芽かな　同

明ぼのやすみれかたぶく土龍　同

山陰やいつから長き蕗の薹　同

すゝしさや朝草門に荷ひ込　　同
灰汁桶の雫やみけりきり〲す　　同
しくるゝや黒木積む屋の窓明り　　同

柴田笥浦氏の凡兆句集に據ると凡兆は元祿二年以前は加生といふ俳號を用ゐたことになつてゐる。予の生國加賀金澤の生れであるが、早くから京都に出て醫業を開いてゐる。何かの取卷きにされて下獄したが、「骨柴の刈られながらも木の芽かな」の句はその折の作とされてゐるが、例に依つて俳句傳說の一つであらう。出獄後は諸書に見えてゐるやうに行衞不明とされてゐて、芭蕉臨終にさへもその名が見えなかつた。正德四年に變死したやうに云はれてゐるが、或は眞實かも知れぬ。ともあれ一代の大凡兆の句生涯は猿蓑を中心として風の過ぎ行くやうに消え終つてゐるのも、何か此の鬼才ある俳魂の最後として相應し

い。端正な蕉門の子弟の中で彼の如き最後を爲したものは、尾張の杜國と二人だけである。彼の作品に見える逸才は彼の社會的生涯を誤つたものとして考へて見ても、首肯できる或物を持つてゐる。或は彼の逸才を以つてしても、發句など大したものでないくらゐの、異常な才能を持つた人ではなかつたらうか？——醫を業としてゐたので或は存外な罪科に問はれたのかも知れない。

彼には透明な靜さが何時も一抹の雲霧を曳いてゐるが、その新鮮さの澄んだ美しさの中に、他のものの入ることの出來ない彼の住む世界が出てゐる。「灰捨て白梅うるむ垣根かな」の素直な、玲瓏玉のごとき句境は、丈草の如きさびはないが、さびは過ぎて新しくなつた一面もないでもない淸さである。「山陰や」や「明ぼのや」の情景に彼はいつも心を凝らしてゐる。實に眼前の景に心を奪はれる人ではなく、永い間それを見凝めてゐる丹念鏤刻の人であることも分る。

彼には不用意なことや、一寸した情熱に動く事や、輕はずみなどを押し凝らしてゐるところがあるのは、遠く他の門葉の迥かに及ばないところであらう。「すゞしさや朝草門に荷ひ込」などは、さながらの青々しい籠の内のものが眼に見えるやうで、彼の心の生きの善さが思ひ遣られるやうである。彼の句もよき特徵を持つた世界であらう。しかも奈何なる素材でも彼の前では、その時間的なものでも手强く詠まれてゐる。「灰汁桶の」の雫のごときは、また彼の心に程よく調和された「時間」の表現である。

三

芭蕉はどういふ風に凡兆を見てゐたかは、猿蓑集の選をあづけた一事でも判明するが、それよりも彼の鬼才は芭蕉の心を驚かしてゐたことは實際である。

下獄の後、芭蕉も世の常人のごとく凡兆のことは口にしないやうであるが、或ひは芭蕉歿後の下獄ではなからうか。さうでないと彼れ程、愛の深つた芭蕉が彼のことを念はない筈がない、しかも蕉門の大立物である彼の行衞不明が芭蕉在世の時であつたら、芭蕉は必らず彼のことを朝暮に口の端に上らせ惜んだであらうに。——或は芭蕉病褥に就く前に下獄してゐたのかも知れない。それ故「花屋日記」にも凡兆のことが書いてないことで解る。しかも彼は門葉諸子とも晩年（變死前）には往復しないでゐたものらしく、淋しい鬼才あるものゝみが辿る、孤寂の境にゐたものらしい。その妻の羽紅も女流として聲名があり、仄かにも可憐な春秋の作者であつた。妻に俳諧を許し其の才能を認めた凡兆は一つの情の深い、やさしい男であつたらう。

春雨のあがるや軒になく雀　　羽紅

お隣の愛宕みやげや鬼柑子　同

「春雨の」の女性らしい弱い句がらに、羽紅らしいよいところが軒雀の聲に色を出してゐる。夫亡き後は羽紅尼と言つて剃髮したらしく、柴田氏の凡兆句集後記によると、元祿十五年上木の太田白雪の「三河小町」になゝゝには羽紅として出句してゐると書いてゐる。その頃なほ俳道に親しんでゐたものらしいことが解る。

片手わざに負ふ子あぶなき覆盆子哉　羽紅

迷子の親の心やすゝき原　同

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　同

「わか身よわく病がちなりければ髮けつらむも、むつかしと此春さまをかへて」と前書して「笄も櫛もむかしやちる椿」と詠んでゐるのを見ると病弱瘠身の女

であつたらしいが、「片手わざに」「迷子の」の句を見ると子供があつたやうにも想ひ描かれる。分けて「霜やけの手を吹てやる雪まろげ」は母親の愛情の外のものではなく、子供がなくては此句境の眞實が生れない譯である。彼女もまた加賀松任の千代尼のやうに子供のあつた女ではなからうか？――　そして凡兆の生國が金澤であれば或は金澤の女であるかも知れない。予は此次の歸省には金澤出身の元祿俳人の事蹟を徹底的に調べたいと思ふてゐる。若し凡兆が金澤を發つて京都へ赴いた時に妻があつたとしたら疑ひもなく羽紅であらう。羽紅だとしたらその時代に俳諧に親しむ程度の文字が讀めるものとしたら、彼女は武士の娘であるに違ひない。

呼かへす鮒賣見えぬあられ哉　　凡兆

藪蔭の足輕町や殘る雪　　同

市中は物の匂ひや夏の月　同

砂川や夕がほのある屋れの上　同

凡兆の故郷である即ち予が故郷の金澤の風色が、最もよく凡兆に沁みついて表現されてゐる。凡兆ばかりではなく作者と故郷の風物の關係は却々に深い根を持つてゐるものである。「呼かへす鮒賣見えぬあられ哉」は宛然に冬の日の金澤風景詩である。城北の潟からの鮒賣は冬になると賣りに出て來るが、急霰にまぎれて呼んでも聞えないで鮒賣が去つてしまふ情景がよく出てゐる。この地方の鮒賣りは大概磯濱の女らの冬の商ひである。予は此句に據つて今なほ潟から出てくる鮒賣女が、二百年前にも城下へ商ひに出てゐたことを知つたのである。郷土の作者といふものは或史實的考證に的確な例證を與へるものであることは、ひとり凡兆の場合ばかりではないが、自分にはこの句に依つて二百年前

に逆戻りして思ふことができる便宜を感じた。

「藪蔭の足輕町や殘る雪」の藪も足輕町も今なほ町を形づくり、小路となつて殘つてゐる。わが凡兆も郷閭の風致の中にゐたかと思ふと、新しさは一倍する。――氣のせいか凡兆の作句は京都へ出たあとからも、なほ郷土を詠んだものが多いやうに思はれる。「市中は物の匂ひや夏の月」の幽かさ、何となく生活を沁みさせてゐる此の境地も、金澤であると云へば云へる光景である。「砂川や夕かほのある屋ねの上」と雖も、故郷らしい風趣が窺へるではないか。

凡兆があれほど新鮮な句作を爲し得たのは、何と言つても幼年時代を金澤のやうな自然風物に親しみ得る土地にゐた爲であらう。然も幼年時に見た草木風物はその人の生涯を通して、其人の中に何時までも新しく青々とそよいでゐるものである。凡兆が何者よりも新しく細かい觀察を以つて一代を爲したのは、

穏やかな山河の中に擁かれ育つた爲に外ならぬ。

## 北枝の家

芭蕉が元祿二年七月(おくの細道)金澤へ唫錫を駐めた前後は、加賀俳人の史錄の中でも最も秀れた作者を出した時代である。殆、それ以後蒼虬、梅室に至るまで餘り有名の人は少數ない。一つは蕉風が行き亘つてゐたためで全國的に言つても元祿は俳句の最も旺んな時代であつたからであらう。金澤を中心にして野澤凡兆、その妻の羽紅、立花北枝、その兄の牧童、柳陰軒句空、秋の坊、山中温泉の和泉屋桃妖、木藥屋の宮竹小春、生駒萬子、村井塵生等がゐた。しかし凡兆北枝は群鶴を拔いでゐたことは勿論である。生駒萬子の如きは蕉翁三

友中の一人であつたと傳へられてゐる。和泉屋桃妖は少年時代（おくの細道）に芭蕉を泊めて相識つてゐる。凡兆は勿論、北枝は性來酒癖を持つてゐたに拘はらず芭蕉に愛せられてゐた。北枝もそれを德として金澤大火の節芭蕉から手紙を貰つてゐる。芭蕉も當時（貞享元年）大災に會ふて甲斐に暫らく後塵を避けてゐたゝめ、なほ身に沁みて火難の憂ひを知つたのであらう。

「池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさま〳〵の苦勞いたし候へば御難儀の程察し申候されども燒にけりの御秀作斯る時に望み大丈夫感心、去來丈草も御作驚き申ばかりに候名歌を命にかへたる古人も候へばかゝる名句に御替被成候へばさのみをしかるまじくと存候知音たれ〳〵此度の難にまぬかれずや連中たしかなること不承候間短紙も不遺美能御傳達可下候以上。

北枝の手紙の句は「燒にけりされども花は散すまじ」の作である。まだ「お

くの細道」へ三四年も間のあることであるが、もう北枝やその他の俳友とも親簡を遣り取りしてゐたものと見える。一面から云へば芭蕉は手づから凡兆北枝小春の徒を掘り出したと言つていいのである。殆、桃妖のごときは別けてその感が深いやうである。北枝は遠隔の地にあつたに拘はらず蕉門十指に數へられてゐたのも、餘程蕉翁の知遇を得たものであつたらう。山中溫泉に芭蕉と一溶を試みたときも、北枝の飄逸ではあるが人慕はしい情はよく芭蕉を信じしめたに違ひない。

凡兆は中年後京洛に去つたが、北枝は殆その生涯を生國である加賀金澤で暮した。職は研師だつたが刀劍の研工であつたことは勿論である。今こそ少數いが、金澤は城下だけに研師の職が多かつた。北枝の隣は酒屋であつたために飲酒家の彼がともすると杯を手離さなかつたことが首肯かれる。凡兆、萬子、千

代尼、闌更などにも金澤を中心にした自然人情を詠んでゐるが、北枝は懶怠で風體などは構なかつたところ、城下を彷徨して童子の笑ひを買つたところなど、他の俳人とは違つた逸話が多かつた。ことに金澤の風物に入つてそれを己れの志としたことは、懶北枝の場合、なぜか沁々とした素大な風流を感じさせるのである。

金澤は昔から武家ばかりの町家だつた故、自然俠客のやうな人物がゐない。佛敎の早く行き亘つたところだけ敵打のやうな殺伐な口碑さへ一つ二つしか遺つてゐないやうである。町家の妻女までが何となく鹿爪らしい行儀を見習ふてゐる。さういふ町家を俳奇行者としての北枝の彷徨は、元より風采のよからう筈がない。町家の人人から後指を差されて一幅の笑物になつてゐたことも肯かれることである。

北枝は昔は武家町の、いまの彦三一番丁に住んでゐたらしい。その家は現に今も殘存つてゐるが高臺で川を距てて夢香山を見晴らせる位置にある。いまは幾代かのあとの遺族が、古い俳書や、闌更、芭蕉、北枝の幅を藏しながら暮してゐる。家の作りもいいが果して北枝の住んだ家かどうか分らない。研師の座敷としては建具の結構など立派すぎるくらゐである。或ひは其處の地內に研場があつたのかも知れない、さう見た方が此の家の通りから引き込んだ構へから考へて見て、甚だ自然のやうである。兒の牧童も句作はあつたが、北枝の方が句技遒に秀れてゐたやうである。

鷄鳴いて秋の日よはき疊かな　　牧童
小家つゞき垣根〳〵の黃菊かな　　同
寢るまでの名殘なりけり秋の蚋　　塵生

ふり初て日半〳〵の時雨かな　句空
栗いける砂の折敷にあられかな　同
小夜時雨身は何ゆゑにあたゝまる　秋の坊
思へども雜の歌かく扇かな　萬子

「うぐひすや谷の景色を庭の面」この北枝の句の風致や、兒の牧童の「小家つゝき垣根〳〵の黄菊かな」の情景も何となく古い地理を物語つてゐる。去來、丈草は勿論、田舍でくらした淡々、浪花上人、あるひは蕪村、一茶の句作の中にはその田舍の風景風俗の激しい新鮮さが流れてゐるのも、やはり物佗しい田舍に住みなれて、それが氣もちを綴つて出たものであらう。いまさら事新しく書くまでもないが、作者と田舍の關係は殆、根本的な心もちであると言つてよい。一茶の「次の間の灯で膳につく夜さむかな」蕪村の『きりぎりす自在をのぼる

夜さむかな」浪花上人の「間引菜の隣は菊の匂哉」なぞ一つとして田舎の景色ならぬものはない。その間にあつて一茶のごときは境遇や人情の上から最も深酷に骨身に沁みて感じた人であつたらう。

世の中に鶺鴒の尾のひまもなし　凡兆

須磨にて

川水や汐つき戻すほとゝぎす　同

五月雨に家ふり捨てなめくじり　同

「五月雨に……」の如きは故郷の廢屋の感じが出てゐて餘薀がない、世の中は、――の句は何となく心惹れる句で、今も昔も左うあつたであらう生活の忙しさ慌しさが、一羽の鶺鴒の尾にあらはれてゐて興がある。

さむしろやぬかご煮る夜のきりぎりす　北枝

末枯や茶粕こぼるゝ草の垣　同

此の二面の風景と人情とは、二百年後とは思へぬ程の、いまも殘る故郷の風色である。さむしろのの句の物寂しさ、秋闌けた壁の冷たいありさま、末枯の身にしみる侘しさ、それに茶粕のこぼれた情景には、幽かな人情の温かみが漂ふてゐて懷しい句である。鍋の中にことことと豆類獨特の相觸れ合ふ音を立てて、ぬかごの煮えるのは思ふても心侘しい。大方、牧童と二人で煮たものであらうか、それとも牧童の妻女が里がへりにでも出て行つたあとで、煮炊の仕ごとをしたものでもあらうか、一説に牧童といふ人は絕えず寢てばかりゐた人ださうである。朝寢、朝から午後まで一と寢み、ひる寢に宵寢といふ風だから自然北枝が煮炊することがあつたかも知れない。兄が左ういふふうであるから、弟の北枝も城下の名物俳人のやうに唄はれてゐたのも、强ち故無きに非ずである。

よく似た兄弟である。同じ故郷の風色をよんでゐる闌更も、矢張り夜長の私に故郷を思はせるに充分な懇しさをもつてゐる。

魚釣りの刀さしけり荻の聲　闌更
七月や小草がくれに灯のともれ　同
大津繪の鬼もよごれつ榾明り　同

これらの景情は悉く加賀地方の風俗でないものはない。足輕の魚釣り、町端の夜の家々、榾火にほのめく大津繪の怪磊、わけて魚釣りの句が生きてゐる。

蝙蝠に手もともくらし油賣　北枝

此の句は廂の深い北國らしい町の樣子と、日暮れの迫つた油賣りが、たらりと垂らす油が夕明りに一筋に光る有樣までが眼に見えるやうである。私がまだ少年時代まで油賣が夕方に早いころに、鈴を鳴らし乍ら呼び歩きしたものであ

つたが、いまは油の需要も無くなり呼び歩きしないらしい、――私の記憶によると油賣といふものは夜を思はせ、淋しい心を喚るものである。わけても昔は丹塗の櫃のやうな入れものを擔ふた油賣りは、妙に氣淋しいものであつたに違ひない。蚊喰鳥がすぢかひに町をよぎるのも、夏の夕ぐれらしい光景である。

池の星またはらはらとしぐれかな　北枝
根雪かと見ればおそろし風の音　同
何の實ぞたまたま見出す雪の門　同

根雪の句のごときは北國に住んだものゝ何人も忘れることのできない風の音を思ひ起させるに充分である。山も家も鳴る底深い風がどこからともなく起つて來て、むしろ靜に皓々と照るやうに鳴るのを聽くと、或る沈んだ冬に對ふてゐる心が憎えて來る。冷たく搏してくる心もちである。身うごきのできない

やうな氣もちだ。私もさういふ冬を二十幾年かを故郷で送つたものである。根雪といふのは、積つた雪の上に雪が新しく降りつもつたそれを言ふので、下積みほど凍えて石のやうに凝固してゐるのである。年を越えるのを云ふてゐる。「何の實ぞたまたま見出す雪の門」はいまも町の裏通りに赤い實のほのめく有様を云ふのである。梅擬、南天、野茨、からす瓜などあるが、この句では一寸見つけない稀らしい實のことで、何の蔓か木かよく分らない實である。實際國の方には冬も赤い實のついてゐる木や蔓が多く、これはどこでも北國によくある遲い木の實である。菊いたゞきなどといふ小鳥や、黒つぐみ、目白が人家の庭さきに下りて來るのも斯ういふ赤い實に呼ばれてくるのである。そして雪の上にその實を啄んで殼を零してゐる。北枝のころもさうであつたかと、昔懷しい郷色の幾片かを手の上に眺めるやうな氣もちである。

芭蕉は北枝によく手紙を書いて、附合の注意などに、「附合十七體別紙に記進候初心には見せ被申まじく候術の叶ぬうちに此味を付んといたし却つて一句も調ず附意もしれぬ事に成るものに候又むづかしきものなり」と言つてゐる。又次ぎの便りには「其許同行においては十人にもまさり力おぼえ候事に候」と言ひ、萬子、牧童、秋の坊、句空、小春などの英雄へも能々御遠したのみ存候」と、旅に北枝を誘ひ乍ら北枝への信頼をあらはしてゐる。

此の一通の手紙を見ても北枝を始め加賀の俳人が芭蕉の心の中に、重い存在を置いてゐたことが肯かれる。兄牧童へも元祿三年七月に手紙を書いてゐる。

隱士秋の坊閑居御訪珍しく得芳意大慶仕候（略）大火の跡いまだ萬々御心も靜なるまじく候（略）拙者儀山廓秋至候ては雲雪に痛候而病氣に障り候故近日出庵いたし名月過には何方へなりとも風にまかせ可申と存候。

近日出庵とは石山の奥の幻住庵で此處には四月から九月まで芭蕉がゐたもので「世の中から離れたい」望みを心に食ひ入らした時代である。芭蕉は四十七歳になつてゐたが牧童も同年くらゐであつたらう、北枝は四十歳を出たか出ないところであらう。五十一歳で屬纊についた芭翁の晩年に近く「雲雪に痛候而病氣に障り……」云々の手簡は、その心のいたみまであらはしてゐる。

北枝と秋の坊とは絶えず句論爭ひをしてゐたが、芭蕉が元祿二年に來たとき二人は仲たがひを中止したさうである。秋の坊が幻住庵に一二泊をした時に風流の隱者だと言ひ、その道のことを話して、

やがて死ぬ氣しきは見えず蟬の聲　　芭蕉

の一句を示してゐる。

柳陰軒句空の庵で泊つた芭蕉は、句空の蕉翁を思ふこと去來に劣らざるを見

てむつまじく物語つたさうである。

ちる柳あるじも我も鐘を聞　芭蕉

藤咲て庵のやうになかりけり　句空

芭蕉を中心にした加賀俳人の擡頭は、その以前からであつたらうが、「奥のほそ道」が鬱然たる力を爲してゐることは爭へない、それ以後特に記すに足るべき俳人を數へることのできぬのを見ても解るやうである。

池の星またはらはらとしぐれかな　北枝

この句は恰もしぐれの季節である郷土の景色を餘さず寫してゐる。その閑かさに鋭い冬が淵のやうな池水にうつる星の明りに見出されてゐる。恐らく北枝の句の中でも秀れてゐる句である。私は郷里にゐるときに能くかういふ光景に接したが、頭に殘るすごみを持つてゐる句である。手法に象徴的な深みもある、

名物俳人であつた北枝とは云へ、心の底に沈んだ考へを有つて絶えず四季の移り變りに心を向けてゐたことが解る。凡兆のねらふたところも矢張り北枝と同じい北國人のねらひであつたのだ。加賀俳人の双璧は何と言つてもこの二人であつたらう。

追　記

この稿を終えてから金澤の俳友桂井未翁氏から「加賀の松」といふ故俳書を得たことを知らして來たが、之れは貞門の山茶花友琴といふ人の追悼句集で、友琴は芭蕉來錫の時に貞門を固守して會はなかつたらしい、その中に、

かまきりの虚空をにらむ殘暑かな　北枝

といふ句がある。友琴と北枝と交遊があつたかどうか分らないが、北枝の句として珍らしい發見であらう、恰度折よく北枝のことを書いてゐた矢さきであ

るから附け加へて置く。

## 丈草と去來

### 一

凡兆の手固い健實な作句は蕉門の逸品であるが、何と言つても蕉門の双璧は丈草と去來の二人であらう。僧丈草の風貌は蕉門の中でも逈かに秀でゝゐる。之加も蕉門を代表する練え、門葉中の老實な厚みのある唯一人であると云つてよい。芭蕉は丈草を評して「此僧此道にすゝみ學ばゞ人の上にたゝんこと月をこゆべからず。」と言つてゐるのも、よく蒼古の丈草を知るものゝ言葉である。

丈草は單に蕉風を受け繼いでゐるばかりではない、芭蕉の風格の中から割れて出たほど、諸々の芭蕉のさびしをりを受けてゐる。芭蕉も心ひそかに丈草には慇懃な或る尊敬さへも有つてゐたやうである。臨終の芭蕉が丈草出來されたりと言つて「うづくまる藥の下の夜寒かな」の句を賞めてゐるが、事實はどうあらうと句技の秀でゝゐる彼の、常に芭蕉から受けてゐた挨拶でもあつた。

丈草の沈潜な枯淡は去來にはない、芭蕉を信じる事神の如くであつた去來は、その歴代の父祖に武士の血統を引いてゐる彼だけに、忠愛の道に傍見もふらないところは、一味の情熱家であるとは云へ蕉門屈指の士である。いづれが芭蕉の右手か左手か知らない、しかし此二人は人間としても、また作者としても芭蕉の心に賴まれてゐた人物であり、彼らもまた師翁の心に熱い信賴を得てゐるものであつた。

寡默な丈草の面影には尾張犬山時代の武士の風貌を有つてゐて、一見、その心の確さが表情づけられてゐた。「涼風にきゆるを雲のやどりかな」の一句を殘して飄然と弟に家を讓り故鄕犬山を去つて佛乘に歸した禪客としての丈草の前生涯に、どういふ蹉跌があつたかは自分は知らないが、そのさびと言ひ、たちの善さと言ひ、作品の上では去來の敵ではない、老練と云ふよりも心の坐り方が何時も定つてゐる。

雪曇身の上をなく烏かな　丈草

此の句境の一端にも、蕉風を後代に讓り渡すだけの、後繼者の資質と老實を以つてゐる。或意味で丈草去來ほど蕉風を濁らさずにゐたものは少數ない。凡兆北枝も左うであつたが、彼等はひたすらに師翁の心を心として生活してゐたからである。芭蕉歿後は一石一字の法華經を淨寫して己が心の保養としてゐた

ことも、此僧の場合は單なる逸話ではない、湖南粟津龍ヶ岡に見すぼらしい茅庵の垣を結んで、自ら佛幻庵と云ひ、師翁を念ふの日の多かつた彼は、何處までも僧丈草としての俤を有つてゐた。その心は蕉門の何者よりも芭蕉に近く、また何者よりも温雅親切であつた。芭蕉の信じ方の强いだけ彼は芭蕉自らの血統を流し込んだと言つてよい程である。芭蕉は安心してその蕉門の砦を丈草法師に委せたと言つてよからう。

片屋根の梅ひらきけり畑出し　丈草

芭蕉翁の墳にまふでゝ我病身をおもふ

かげらふや塚より外に住ばかり　同

時鳥啼や湖水のさゝ濁り　同

稲妻のわれて落るや山のうへ　同

行秋や梢にかゝる鉋屑　同

芭蕉翁の七日々々もうつり行哀さ無名庵に偶して心地さへすぐれず去來が許へ申遣る。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　同

水底の岩に落つく木の葉かな　同

二

丈草の道は芭蕉の際立つた新鮮をも求めなければ、試みをこゝろむ危さも經驗しないで、ひと色の靜寂さで徹つてゐる。野心や危氣や衒氣も見ることができないかはり、和やかな落着きと、常に落莫たろ風情を述べてゐる。「片屋根の梅ひらきけり烟出し」の情景には穩かさに徹してゐる客觀の句がらがある。かれに客觀の句の多いのは彼の心の住む世界の靜さが類の無いためであらう。

「かげらふや塚より外に住むばかり」の人生觀には諦め切つた一面の人生が物おごそかに無表情なまでに現はれてゐる。此の無表情の表情の數奇に至つては彼が幽玄の限りをつくしたと言つた方が適當である。芭蕉を思ふの情、師翁への答へられない淋しい會釋がつゝましく出てゐて、何とも云へず幽邃ではないか。

丈草の嚥み込む自然なり自然裡の大景であるところのものは、彼の吐き出しとなると締つた句境になり、どういふ大景と雖も把握されて壓しちゞめられて纏つてゐる。「時鳥啼くや湖水のさゝ濁り」でも「稲妻のわれて落つるや山のうへ」などゝ、美事な嚥み込み方である。しかも「さゝ濁り」の利き方に至つては、遂に蕉門の一冠の長たるものを嚴かに持つてゐる。寫實を重んじた芭蕉の心もやはり此の一點にあつたことは言ふまでもない。其角や嵐雪が作句と子弟

の養成に江戸で蕉風後期の旗上げをしてゐる間に、丈草は默然として佛門にその日を暮してゐたのである。彼には蕉風の爲に天下の人氣を得る野心などあらう筈がなく、また求めて旗上げを芭蕉のためにする必要もなかつたのである。

芭蕉歿後の天下は亂れてゐたことは當然である。支考の空論、其角の豪奢等は漸く一城の主の死を追々に心あるものに嘆かせてゐた。許六が去來に宛て、師翁死後の俳壇を以つて芭蕉道を瀆するものとして憤慨久しくしたのも無理もないことであつた。唯一人、丈草の默々として師翁の心を汲んでゐる姿は、去來の淸境温籍の性質と相俟つて最も芭蕉道をあやまらなかつたものであらう。生前たのみにしてゐた芭蕉もその淸い心根には、地下にあつて微笑みを漏らしたことであつたらう。

「水底の岩に落つく木の葉かな」の沈潜の句境は、僧丈草の全生涯のしをりであり、閑かな心意氣であつたに違ひない。彼の心は常も一葉の落ちつく水底のやうに靜寂で、何物にも觸れないで澄み透つてゐた。「まづ和歌の德たる事、誰か仰がざらん、上つ代より傳へ來りて人の心を種とする言葉、その誠よりせめらるれば、鬼もあら男も項をたるゝ正直なり。」と「詩歌俳諧辯」に言つてゐる。何かを道破してゐる氣慨を持つてゐる。「寢ころび草」には「すでにかく生れ來て、ものうき世の中に、いかで此身の心まかせならんや。」と言ひ、世に處する己れの諦念を消息してゐる。かれの諦念は、元々その佛道からと、そのさびしい心根からと、も一つ俳道の中で鍛へた幽寂からとの三調子を持つて固まり渾一されてゐたのである。

ほかほかと朝日さし込む炬燵かな　　丈草

彼は病弱であつたゝめに飽迄俳諧道の戰ひをしなかつたのではない、彼は左ういふ派手なことが嫌ひだつた。

「當冬は持病氣指出候事もなく、もはや此身の程も急にやり可申とも存ぜざるほどの事よと、居住の事もますます落付、之迄の庵地買切りて一たん餘りの所にて候、先は所の住人となり申候、此身は一定不住の覺悟ながら、病身さうもならず……」と、內藤常右衞門あてに手簡を殘してゐる。己の住居の中に己を守る彼は、孤獨に住むために世間との交渉をも經てゐる苦勞をしてゐる。「一定不住」の覺悟はしてゐても、元祿の昔にもさうは行かなかつたのである。ここに生活の纜が結ばれてゐるではないか。病身さうもならざる彼が心の用意おさおさ怠り無かつたことを思へば、丈草もまた一人となる前に人生の何頁かを諳んじてゐた樣である。また諳んじてゐなければならなかつたのである。

## 三

應々といへど敲くや雪の門　去來

丈草は評して、この句不易にして流行の正中を得たりと言つてゐる。自分はこの流行の調の中にある句を好んでゐない。丈草の評は當時正確を得たものであるかも知れぬが、正鵠の批評ではない。丈草凡兆北枝嵐雪其角と數へ來ても、その孰れの作者にも去來は特に際立つて秀でゝゐないやうである。彼の作句の光榮が、何故あれほど貧弱な萎びたものであつたか、それにも拘はらず丈草と並び稱されてゐたのであつたか、その大名は實力と添はなかつたことは何故であつたか、自分はそれらに永い間疑ひを持つてゐる。彼は名門の出ではあり風貌堂々としてゐたこと、温雅端正であつたことなどが、作句の外に或人格を持

つてゐたのではないか？　温厚な人格はそれ自身で魅力を放つてゐるものだからだ。向井去來の重きを爲した所以は、その作句ではなからう。その一暼人に與へる重厚の面影、武士だつた彼の巖丈な資質の中にあるもので、人々を尊敬させずに置かぬ或物を持つてゐたゝめではなからうか。許六も評してその人格端正を賞してゐる。芭蕉は彼を尠らず依怙贔負したに違ひない。

芭蕉は丈草を以てする時は尊敬を加味した友情であつた。併し乍ら去來には度外れに愛してゐたやうである。北枝の場合よりも最つと敬愛してゐた。何よりも芭蕉は彼を信じ彼は師翁を敬ふてゐた事、それらの二つの感情は何時も人間的に結ばれてゐた事などが、芭蕉をしてより深い愛情を呼び起した所以のものであらう。それに彼は何よりも忠實そのものであつた。芭蕉は作句から子弟の間に入つて行くのが例であつたが、彼の場合は作句よりも直ぐさま友情恩愛の

道を辿つたらしく思はれるのである。

秋はまづ眼に立つ菊の蕾かな　去來

鳶の羽もかいつくろいぬ初しぐれ　同

こがらしの地にも落さぬしぐれかな　同

「嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり、五とせ六とせ經ぬれど、このみも持來らず……」と書き「みづから落柿舍の去來と書きはじめたり。」と記してある。落柿舍は茶室を持つて來て建てたもので相當風雅なものであつたらしかつた。芭蕉は嵯峨日記に記して、その庵舍のありさまをつたへてゐる。

「予は猶しばらくとゞむべきよしにて、障子つゞくり、葎引かなぐり舍中一間なる所伏處とさだむ……」と記し、別れに際して「明日は落柿舍を出んと名

殘をしかりければ、奥口の一間々々を見めぐりして……」と名殘を惜んでゐる。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡　芭蕉

去來はその落柿舍に誓言して、「一、我家の俳諧に遊ぶべし、世の理屈をいふべからず。二、朝夕かたく精進を思ふべく、魚鳥を忌にはあらず。三、速かに灰吹きをなすべし。煙草を嫌ふにはあらず。四、隣の据膳を待つべし。火の用心にはあらず。」と書いてゐるところを見ると、芭蕉の何物かを傳へてゐるところがある。これは芭蕉の或種類の氣もちをそつくり模倣たと言つてもよい程である。併し乍ら彼の端正さは此壁上の數語に失笑させるやうなところが無かつた。

彼と丈草とはその氣風を相通じるものを持つてゐたゝめ、風雅の道ばかりで

はなく人間同士としても深い友情があつた。

作句に秀逸の少ない彼の中でも、友情を思ふほとほとの風情が現はれてゐるよい句である。晩年丈草の死に行き逢ふた彼は、その同じい年の秋にあえなく病歿してゐる。よほど丈草の死が心と體とに應へたものらしい。仲の善いものの片方が亡くなると、あとに殘るものも月日を急いで亡くなる場合が多いものである。

懷二僧丈草一

寒き夜や思ひつゞける山の上　去來

丈草を哭す。凡十年の笑は三年の恨に化し、その恨は百年の悲を生ず、惜しみても猶名殘おしく、此一句を手向て、來しかた行すゑを語り侍るのみ。

なきかたや春や三とせの生別　去來

と、哭き悲しんでゐる。去來を識るものは芭蕉を除いては、丈草一人と言つてよいくらゐであつた。丈草もまた去來を信じ翁亡き後の唯一の友垣であつた。しかも丈草も相當生活に事缺くこと尠く、去來もまた相應の餘裕があつた。これらの世間並の生活の禮儀が行はれてゐることが、一層彼らの友情を深く德のあるものに固めたのである。去來を思へば丈草を思ひ、丈草を呼ぶに及んで去來を念ふのも理りであつた。しかも丈草が何事にあれ去來の兄分であつたこと去來自らも然う考へてゐたことも實際であつた。

　丈草は芭蕉を偲ぶにさへ沈着であつたが、去來は萬腔の情熱を動かしてゐたと言つてよい。それは何よりも彼が論客であつた證據である。許六との俳諧問答に「師教月々に疎く、我意日々に生ず、たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、かへつてその血脈をうしなふものあらん。しかれども今の世にあたつても、秀

逸をさだむる人誰ぞや……」と激越してゐる。また「蕉門の諸生萬人、老をもつて論ずるときは、老師にこえたるもの多し、いまださびしをりを得たるもの一人をきかず、多くはこれを思はざるの人也。」と言つてゐる。彼の脈々たる情熱は蕉門に較べる者がゐないくらゐである。

柿ぬしや木ずえはちかきあらし山　去來
放すかさ問はるゝ家や冬ごもり　同
おとゝひはあの山越えつ花さかり　同

「柿ぬしや」は落柿舍の吟詠であらう。「放すかと問はるゝ家や冬ごもり」は、落柿舍が人の口の端にかゝり、賣り家のやうに思はれる心もちを出したもので物佗しさが出てゐる。去來には妹の千子といふのがゐた。芭蕉もこれを愛してゐたが、去來の妹を愛してゐたことは伊勢紀行に詳しい。温籍の人、去來が妹

を愛したことは不思議ではないが、彼らの落莫として情事に疎遠な生活を念ふと、優しい妹千子の人情愛を感じるのである。

彼が興じ乍ら妹をかへり見ると、千子もまた一吟を物するのであつた。

秋の夜も寝ならふ旅のやどりかな　去來

長き夜も旅草臥に寝られけり　千子

と、兄妹いたはり合ふところや、世の辛酸の外にゐるところは、秋夜に背中する温かさである。

伊勢までのよき道づれよ今朝の雁　千子

辰巳のかたに明る月影　去來

と、興じながら行く、質素な去來の旅の股引姿を描いて見ると、兄思ひの千子が寄りそふて頸をかたげ乍ら、何か問ねながらゐる姿も自ら眼に見えるやう

である。凡兆の妻の羽紅も發句に名のあるものであるが、去來の場合は何かさびしく淸い感じである。嵐雪の妻は猫が好きで嵐雪はきらひであつた。妻が猫を愛することを嫌ふ嵐雪を最後に好かせるやうにした妻の心づくしが美しく思ひ出される。去來と妹の場合は蕉門の逸話としても一點の汚れもない美しさである。丈草にしても去來にしても芭蕉と同じい女性に緣の無いさぶしい生活であつた。(一說に去來に妻あり子供が二人あつたといふ)その中に去來の千子がゐたことは、しの竹のしげみに梅擬の紅綴る枝を見るやうに奥床しい感じであつた。彼らの孤獨は餘りにいたいたしく、又た餘りにその點では超人間的であつたやうである。併し彼らのその苦行こそ後代にその心と身とを重からしめた所以でもあるのだ。

その伊勢紀行では去來には珍らしい「白川の屋根に石置く秋の風」の秀逸の

作句を殘してゐる。かういふ些かの情愛の道草ではあるが、彼を思ふ時は自ら妹千子を思はねばならぬ。

　支考の「葛の松原」に「おとゝひはあの山越えつ花ざかり」の句を「この句三四年も早かるべしと阿叟の申され侍るよし、今は四とせばかりにもなりぬらむ、なつかしき君子もあれや、吁」と悼んで書いてゐる。そして芭蕉がこの句は一兩年早いやうである。今は聞く人もないだらうと言つた。後に芭蕉は杜國と吉野行脚に出かけては日々吟じながら、この句を思ひ出したさうである。師弟の情また盡されたりと言ふべしである。彼は去來抄に記して「その後此の句を語り、人もうけとりけり。」と言つてゐた。

　丈草去來の双璧を蕉門から取除くことは、假りにさうすることさへ出來ない巍峩たる砦である。彼らは芭蕉の地ならしをしたり後片附をしてゐるものであ

る。芭蕉がよき門葉を集めることを得たのは、自ら彼の徳の致すところに違ひはなかつたが、それよりも人を處するに自ら心定つてゐたゝめ、又愛情を以つて人々を惹きつけたゝめであらう。も一つ言へば彼の膝下に集つたものは、すくなくとも彼に近い英才を持つてゐることに據り、芭蕉を選び得たのであらう。

## 嵐雪

何時か京橋の或る賣立に行つたときに、嵐雪の短册が一枚出てゐた。銀扇の女持ちのも出てゐたが、大方座興にでも書いたものであらうと思ふた。短册の句は

蔀あけてくゝたち買ん朝まだき　　嵐雪

といふのだつた。

くくたちは莖立のことで、冬も春に近いころの菜の葉莖の薹の立つたのを言ふたのであらう。わたくしの國でくきたちと言ひ、その薹の立つたのは硬いので、湯で茹でて青草屋で賣つてゐる。しかし此場合のくくたちは茹でてないのを言ふたらしく、朝まだきがそれを證據立てゝゐる。蔀は門口で素人やの、上の方へあげる板戸のことであらう。その板戸には潜り戸がついて、一間入口に二枚の戸が上から卸すことになつてゐる。大方、朝早くおみおつけの中に放つためにでも、門前を呼び歩くのを呼び込む景色で、どうも春さきに近いころのやうに思はれる。朝まだきと言ふたところに何かしら温さがこもつて見える。すがすがしい鶯のこゑも聞えさうな朝まだきである。

まつ風の里は籾するしぐれかな　嵐雪

この句は嵐雪の中でも好きな句である。
まつ風、籾、しぐれ、さういふ道具立は眼につくが、しかし棄てがたく、すぐにその景色に心をうつさせるに充分である。

あかあかと日はつれなくも秋の風　芭蕉
晩稲の筧ほそう聞ゆる　光清

籾をするのも雨では廣い農家の土間で、うす暗い中に二三人のひとが働いてゐる。山べに近いと斷ずることはできぬが、松林のところどころにあるやうな氣がする。そして「あかあかと日はつれなくも」の句とは、ちやうど一ト月半くらゐ遲れた季節で、その季節の別れ目がかうして見ると瞭然と分るやうである。嵐雪は蕉門でも何か絶えず新しく出直す氣をもつてゐた。そのため句に或

る硬さが見出される。「うまず女の雛かしづくぞ哀なる」のごときは、あまりに説明的で、一句のうちに潜むものがない。芭蕉の句には一つ〳〵何かが表現の片陰にひそんで、匂ふてゐる。一派の野心をひそかに抱いてゐたかれを自分は壯とはしてゐるが、そのためかれの句がよくなつたとは言はれない。芭蕉死後のかれ、前後のかれ、自分は江戸座の其角と仲のよいかれを何となく丈草去來にくらべ、その心に入つて見てもかれらに感じた枯寂を感じない。おそらく芭蕉もその心には何か微かに感じてゐたであらう。

黄菊白菊その外の名はなくもがな　嵐雪

其角はこの句を讃嘆して、自分が生涯かかつてもこの秀詠を得ることができない、さう言つて若し菊の句を乞ふものがあつたときには師翁の

園女家にて

白菊の目に立てて見る塵もなし　芭蕉

の一句と、嵐雪の此の「黄菊白菊その外の名はなくもがな」しか書かなかつたさうである。其角らしい言草であるが、しかし當時にあつては有名の句であつたらしい。いまでも有名の句であらうが、まつかぜの里は籾するしぐれかなにくらべたら、一片修辭の小才より外に取り立てて言ふほどのものではない。「或時集」に序して「花に對して信なくんば花うらみあらん、句は是に習ふべし、花に問は花かたることあり、姿はそれにしたかうへしと或時教ゆ。」と題してゐる。去來が許六に手簡した俳諧問答はあまりに烈しすぎるが、去來の鋭鋒は嵐雪を突いてゐることは言ふまでもない。「翁遷化の時東武の其角嵐雪桃隣等東山に於て追悼の會を爲す、かれ蕉翁の門人の數に加はりて着座す、今書をつくりて、翁をあざむける、最も憎むべきのはなはだしきや。かれが心操をかへ

りみるに、翁いますときは、先師を賣ておのれが浮世のたよりとし、先師歿し給ひては、また先師を賣て、初心のともがらを、今は先師に勝りたりと欺き……」と罵り「我これがため、辟耳を切て、邪口を裂かんと欲す。」とまで激昂してゐる。嵐雪其角は默々として師の意表に出るやうな暮しや作風の轉期を劃したことは實際である。師思ひで盲目的だと言つていい去來の怒るのも無理はない。しかし、「花に對して信なくば花うらみあらん。」と言ふ嵐雪の心は、去來が邪道視したるにも拘はらず可憐にあらはれてゐる句が多い。

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し　嵐雪

鴨おりて水まで歩む氷かな　同

なき名のみ辰の市とはさわげどもいさまた人を賣るよしもなし　人丸

鶯の宿とこそ見れ小摺鉢　嵐雪
きりぎりす鼠の巣にて鳴終りぬ　同
秋風のこころうごきぬ縄簾　同
筍や児の餓のうつくしき　同
蕎麥うちて鬢髭白し年の暮　同

「鶯の」句は溫さが菫の匂ひのやうに仄かにしてゐる。いまの時間で言へば午前の十時すぎくらゐで、朝の間の餌を摺り忘れた鉢であらう、青みを交ぜた芳ぐはしい鰕の香のする餌のあとも偲ばれる。「蕎麥打つて」の句はたけの高い、りんとしたやうな姿である。「鈴鴨の」やうに何か氣質に嚴霜の氣もちに近いものを窺はせてゐるのは、さすがである。すこしのたるみなく一と聲に詠じたところもよい。さういふところは何か別派新途のにらみを心に横へたわざもののの

氣質が出てゐる。たとへ芭蕉をしのぐことはできなくとも、さういふ氣質に心を置いてゐたことは認めなければならぬ。去來丈草の徒はもとより師表を出ようとはしなかつたが、それに心のあつたことは嵐雪の場合には認めなければならぬ。藝道のことで師表に出た者は古來少ない、曉臺が蕪村を超ゆることができなかつたことも當り前である。しかし其角だけは芭蕉のそとにゐたことは肯かれる。嵐雪に至つては遂に氣質を句にとどめたくらゐであらう。「蕎麥打つて鬚髭白し年の暮」は堂々たる幅のある句である。

# 芭蕉句解

# 元禄の春宵

一

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅　芭蕉

元祿元年の春宵、初瀨の觀音に芭蕉は前の十八日の緣日に拔けた參詣を、あとの平の日に詣でた。

春も半ばの程で、心も落着く温かい宵の口であつた。芭蕉は社寺に詣ることが好きなのは、性來の物珍らしさに就く心でもあつた。境內の櫻も仄暗い中に立つてゐる、——內陣に二對あるぼんぼりも柔らかい藍色の闇を白う浮かして

ゐる、芭蕉はかういふ景色にいつも單調を發見してゐた。彼の新しい物の見方は稍々ともすると平凡な幽遠にそむいた心でゐたが、今夜はそれにも拘はらず或物優しい親しみを感じた。

それは堂の隅の上敷の上に先刻から物音も立てないお籠りの人を見出したからであつた。御明しはお籠りの人へ漸つと到いてゐるくらゐの暗さだつた。女人である證據は髮に一層の黑みを帶び、橫顏の白うたよやかな有樣でも解るのであつた。彼女は低い殆聞き取れない程の小聲で、詠歌のやうな誦經を絕えず口の上にのぼらせ、時々頭を垂れては禮を致してゐた。物淑かさは靜さの中に乳を齅ぐやうな一種の物惱ましさをも放つてゐた。芭蕉は却つて平日の日に詣つたことを仕合に思つた。

彼は境內に暫く佇んで、更けゆく春宵の音に耳を澄してゐた。先刻から氣が

付かなかつたのであるが、堂の前の樹の根の上にも、お籠りの人がもう一人ゐることとを見出した。そこは全くの深い闇であつた。それにも紛れない女人の生白い容顏の在りかは、さういふところへばかり到く星明りの中に却つて瞭らかに浮き上つてゐた。芭蕉は或る恭愼の情と遠慮の心とを併せて感じた。彼は物靜な足どりで境内をそとに向いて歩き出した。彼の心は嚴しい程でもない物優しい壓迫を感じ、一刻も早くこれらのお籠りの人々のさまたげをしてはならぬと思ふのであつた。

彼は物ゆかしさを感じたのであつた。女人の性情の外に或る幽遠に隈取られた美しさを、それが彼の心に永年働きかけてゐた人と未來への考へを結び付けた。彼は左ういふ考への中に自身の沈潛を思ふことは、常に否まれぬ歡びであつた。何を祈り何を女人が願ふてゐたかは知らない、唯、彼の見たものはゆか

しさの底にある美しい姿であつた。人間の心がなびいてゆくところの淸らしさで、それが宵のほどであるのに有明（しののめ）のやうに新しく映つてくるのである。

芭蕉は香氣の高い春宵の路上へ出て、灯の更ける初瀨通りを眺めた。

## 二

春の夜は櫻に明てしまひけり　芭蕉

「いもやすく寢られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ」（躬恒）「新古今」

花時の明るさは夜も罩められる明るさである。何となく氣候のせいか寢られぬ床の中に彼は居た。そして彼の思ふことは寢床の中の何時もの埒もない空想事であつた。四十八歲の芭蕉の心を往來するものは、天下の俳諧道でもなければ又己れの大成を思慕するのでもない、——唯、彼にもやうやく人を厭ひ他の

情を思ふことに疲れるばかりであつた。自ら老い、自ら年とることに生きる物憂い心が、次第に彼の夜々の思ひに加はり惱ましてくるのだつた。彼はそれを自ら解かうとしながら何時の間にかうとうととするのだつた。

世は春でカラリと晴れ明けた空には、却つて秋夏の靜さ以上のものがあつた。明け方の中にこの古い櫻のたゝずまひを縁取り、この櫻の明るさが誘ふあかりは、一さう淸く穩かに心に殘るのであつた。

## 三

草臥て宿かるころや藤の花　　芭蕉

大和丹波市の里に近づいたころは、旅好きの芭蕉もほとほとに疲れてゐた。村里にはまだまだ灯は入らないが、晩春の大和路には烈しい木の芽時の空氣に

強い刺戟さへ鼻ぎ當てられるほどだつた。暖かい雜草と埃とに蒸された草鞋の底はいきれで熱かつた。

「丹波市の泊りにしやうか？」

芭蕉は尾張から伴ふた杜國をかへり見た。美青年の俤ある杜國は芭蕉よりも先きに草臥れ、右足を引摺つてゐたくらゐであつた。

「わたくしもすつかり疲れました。」

路上に奥大和からの駄馬が落して行つた糞さへ、乾いて埃白いほど蒸しあたたかい日であつた。

宿は往來から入り込んだ茶店も兼ねてゐる旅籠屋であつた。馬の草鞋に駄菓子を鬻ぐ店の間も埃だらけだつた。洗足に立つた芭蕉は、堀井戸の冷たい水に足を浸しながら、手を額のあたりに動かし旅の具の始末をして居る杜國を差し

招いた。

格子型に編んだ竹の棚から垂れた藤の花が、虻と蜂の唸り聲の中から美事に咲き揃ふてゐた。

「だいぶ老木らしいぢやないか。」

根の幹は太く嚴丈だつた。芭蕉はその明るい花の下に立つた。

「水も好い水ですね。」

杜國は冷たい水で草鞋を濯いだ。芭蕉は何時でもその日の旅の草鞋は洗つて木にかけて乾かすのが習慣であつた。杜國は師の次の枝に、草鞋をかけた。「かうして早めに宿をとるのも落着いてよいものだ。」芭蕉は花の下を去らずにゐた。

宿の女が手拭を持つて來たが、二人が濯ぎを濟したあとなので笑つて引き返

した。

二人は部屋へ通つたが、垣の前に無雜作に束ねられて此處にも藤の花が美しく咲き垂れてゐた。まだ灯に早く倂し宵の程に近い、蒼みを含んだ薄煙が庭樹の間に漂ふてゐた。

頭陀物語に、「或人翁に物語りけるは、貴坊は宗祇のあとを追ひ雲に別れ水に伴ひいづちを宿と定め給はず、行脚いづれの日かをかしかりし。翁ほゝ笑み給ひて、旅せぬ人はさこそ思はめ、行脚は苦樂を翼とす、」……と答へたり。

笈の小文に、「よし野行脚の時の句にして、その紀行の文に曰く、旅の具多きは道のさはりなりとて物皆拂ひすてたれども、夜の料にと紙衣一つ合羽やうのもの硯筆紙藥に晝笥なんど物に包んでうしろに背負ひたれど、いとど脛弱く力なき身のあと樣にひかふるやうにて道なほ進まず、只ものうき事のみ多し、と

ありてこの句見えたり。」
長日の趣を詠る歌、「夕ぐれにおもへば今朝の朝がすみ世をへだてたることゝちこそすれ」有家。

四

芭蕉は江戸座の其角に誘はれて、春宵、芝居の桝の中にゐた。芭蕉は子供のやうに歡んで小屋の中の美しい空氣に悉しんだ。双柳の袖を振る女や、女を取巻く芝居小者の愛想振りにも何等の反感を有たなかつた。彼の面容に浮ぶものは絶え間もない微笑であつた。其角は心ひそかに師の心がかういふ空氣の中にゐることをも、平氣であるのに驚いたくらゐであつた。其角の最つと驚いたことは、この喧騷の中にゐる師の落着き振りと、決して調和を破らない澁い

雜閙を制してゐるやうなその表情であつた。酒席往來の烈しい普其角の心に重りかかるものは、芭蕉が喧騷の中にゐて益々靜さに透つてゐることであつた。

小屋を出て二挺の駕が深川を指して行く途すがら、芭蕉は垂れの内から、
「けふは氣苦勞をかけて濟まなんだ。」と云つた。
「師匠こそ退屈なされたでせう。」
「わしは面白かつた。」

芭蕉はこれ以上話さなかつた。駕屋の草鞋のひたつく音ばかりで、二挺の駕の垂れはお互ひに上らなかつた。其角は今日少しも芭蕉が退屈さうな容子や、故意とらしい風流人の勿體をしなかつたこと、名もない江戸座の末弟にまで手厚く挨拶を返したことなどを想ひ返したが、實際芭蕉は心から芝居を面白がつ

たのだらうかと、何か怪しまない訣に行かなかつた。ハネ前に芭蕉は酷く疲れてゐたので、其角は何度も中途で小屋を出やうかと誘ふて見たが、芭蕉はハネるまで桝を出やうとしなかつた。平常から丹念な人ゆゑ、感興を殺ぐるやうな野暮をしない要心を思ふと、其角は師翁の心を犇々と感じ入るばかりであつた。平常感じないものをも自然に加へられて來て、其角は今さら師翁の何物かに壓迫されてゐた。二挺の駕は別れた。

芭蕉はその翌朝――明方から生暖かい雨が庵のうしろの古池の涸れた乏しい水を動かしてゐるのを見て、なほ頭が草疲れてゐることを感じた。からだの弱い彼は生暖かい雨に物憂く眼を遣りながら、自分の健康があゝいふ場所柄に適し兼ねることを思ふた。其角には話さなかつたが彼はもうあゝいふ桝の中に坐ることに、甚だしく憊れることを經驗した。

併し芭蕉は今朝見る庭先の風情に、何時もとは變つた或る複雜な氣分の入り込んだ景色を見入つた。雨にぬれた枝、池のまはりの枯草に雜つた靑い草や莖、近隣の誰かゞしてゐる話し聲、それらは疎らな筧滴のひまひまに傭い或る單調さで、何時までも動かないで續いてゐた。彼は頭が疲れてゐるせいであらうかとも思ひ、生暖かい雨のせいかとも考へたのであるが、結局何も考へ當てられなかつた。唯、物憂い、ねばり氣のある風景は、刻刻に春を急ぎ、靑さを增して行くやうであつた。

春雨や蓬をのばす草の道　芭蕉

## 五

湖水眺望

唐崎の松は花より朧にて　芭蕉

「或人云、花よりは花から也、比良の高嶺の花から續きて松も朧にてよろしとの吟也と此說は其角支考が說にそむけばいぶかし」。(句選年考)

朧のかかつた宵更けたころの、松の葉の光が妙に仄白い――花時の眼をあやなす松のまぼろしかも知れなかつた。湖水は穩かな朧の中の月を溶いてゐる。松は暗いが湖水の明りの這ふてくるのと、薄月とに浮き上つて見えるのだつた。

芭蕉は堅田の千那の庵にゐた。(晋風氏說)せいの矮い垣を越えるものは、下這ふおぼろげな明りで、穩かさは百年の昔と渝らなかつた。彼の心を往來するものは、昨日と今日へ亘る輪廻ではない、片雲に身をまかすものの妙な傷みやすい心だつた。彼は垣の外へ出て步いてゐる内、いつもの空虛な心もちを發

見した。彼は何も考へてはゐなかつた。唯、茫々たる風景の内に魂のないやうな彼を發見するのであつた。

## お子良子の梅

お子良子の一と本床し梅の花　芭蕉

貞享五年の二月の或朝、芭蕉は伊勢大神宮に詣でた。梅の季節であるのに神垣のあたりにも境内の奥にも一樹の梅花をも見なかつた。芭蕉は心に梅くらゐ咲いてゐるであらうと云ふ或暖かい心を抱いてゐたのに、餘寒の土の上には松杉の枯葉等しか眼に映らなかつた。芭蕉は幣を取換へる神司に訊ねた。

「梅の樹がないやうですが、何か譯でもあるのですか。」

「何も譯なんぞは御座いません。昔からなかつたので御座います。」

神司は恁う答へながら、ふと思ひ出して云つた。

「子良の館のうしろに一本ありますが、けふあたり綻びてゐるかも知れません」

芭蕉は神司の言葉に從ふて、子良の館の方へ歩き出した。四十五歳になつてゐる芭蕉は、年齡よりも老け誰が見ても五十を越えてゐるやうに見えた。

子良の館には神事に仕へる娘——まだ破瓜期前の十か十一くらゐの童女が、中の壇の神酒棚の蔭から出て來て、芭蕉に何氣なく瞳を投げ、控への帳の內へ入つて行つた。大方朝の御水を棄て代へる頃であつたらう——芭蕉は館の裏手に廻り、神司の云つた梅を搜した。成程、梅が一本その蕾を綻びかけてゐた。樹は老いてもゐないが又若くもなかつた。埴土色の館の板とすれ〳〵な枝の走り樣には鋭い早春の凝氣があつた。その親幹の目のとゞかないところの苔の色

が、鮮かな蒼さを日影の中に研ぎ出してゐた。

芭蕉は歩を返して館の表へ出たとき、先刻の童女が神壇へ這入つてゆくところであつた。芭蕉は淨賽を投じた。

彼の心にはお子良子の清い姿と、梅の綻びた有樣とが殘つた。彼のさがした梅の香をかいだことも偶然ではあるが、お子良子の神仕へする清淨の乙女を見たことも爽々しく淸らしい感じであつた。お子良子は神に仕へる破瓜期前の少女で、それの初潮を見ると、もはや神事にたづさはることが出來ないことになつてゐた。それに神宮神司の娘に限られてゐたのである。梅の木がたゞ一樹だけ裏手に綻びかけてゐるのにも床しさは充分に籠められてあつた。しかもお子良子の小刻みな楚々たる歩み樣に可憐以上の淑かさがあつた。

芭蕉は清淨を愛することは誰でも知つてゐる。しかも愛する清淨は一滴の清

水のやうに美しい。その一滴の清水といへども、彼らしく古苔の生えた岩が根をつたふそれである。決して掘立の泉のやうな新しさではない。新しさに古い年月を持つてゐる新しさである。わざと求め捜ねる新しさでは毛頭無いやうである。

彼がお子良子の清い美しさに心を留たのは、彼の心にお子良子の清さや美しさが宿りを含んでゐたとも云へる。彼が白梅を見、純眞の少女を見たのは、彼の場合偶然で無いと云へるであらう――芭蕉は女性に對しては何時も慇懃であり、懇切であつた。その心の向き方には一方物珍らしい程、女性に物柔かであつた。「のうれんの奥物ゆかし北の梅」の園女についても、去來の妹の千子を愛し慈しんだこと、また凡兆の妻を風流に誘ひ込んだこと「一家に遊女も寝たり萩と月」の奥の細道の旅の女、その他文献に現はれぬ女性がどれだけあるか分

らない――壽貞との關係にしても恐らく世に問はれてゐない懇切さがあつたであらう、彼女の死後、杉風に書を寄せて後事を託したこと許りではない。

自分は芭蕉のやうに寂しい暮しをした人が、女性に親切であつたことが自ら解るやうな氣がする。

お子良子を清い思ひで見た彼は、不惑を五年も越えてゐる年頃である。その心は人生の父以外のものではない、單にお子良子を梅との小俳句の世界であるよりも、彼が人生へ處した紋章のやうな句がらである。

# 薦着てゐる芭蕉

誰人か薦着ています花の春　　芭蕉

芭蕉は寫實と心眼との二途をもつてゐる。或は寫實と心眼とが渾一されてゐたといつた方が適當であらう。あれほど迄に旨さを融けあふた人はない。旨さが旨さを嚴しい味で育てゝ、元のやさしさへ戻してゐる。平凡へまで遂り還してゐる。その平凡の美しさ、平凡を凝視した後の美しさは芭蕉の中に大成されてゐるものだ。

奈良に出る道のほど

春なれや名もなき山の薄霞（甲子吟行）　　芭蕉

芭蕉の腹の中にある眼は「白魚や黒き眼を明ク法の網」のやうに、くろぐろと開かれてゐる。自分はあの人の作品にはかすかながら佛といふものゝ内容を感じてゐる。

印度渡りの伽羅苦多の佛よりかどれほど佛の味ひを持つてゐることであらう。佛が佛の傳統や教祖を齎さぬ彼には、かすかながらの余の心に傳はるものは佛である。佛といふものをこの樣に手近く親密に又ときに辛辣にやつつけ得ることも佛の所以である。

佛の文字に心あやまたぬ人があれば自分と同じい芭蕉を見もし感じもするであらう。もはや彼はさういふ位置にゐてもよい。だが芭蕉は佛でなくて人間だといふところに眞實の芭蕉があるとする亞流の說があれば勝手である。余はさういふ余の好みらしい佛をつくつて見るだけである。たゞ佛といふものゝ類に

芭蕉が入るといふことくらゐ心得てゐてもよい。それほど、佛は大したものではない、芭蕉とその心や心の向き方と肩はすれ〳〵になつてゐるからである。

元祿三年の春二月、芭蕉は近江の湖畔を吟遊しながら得た句であらう。幻住庵へ四月に入つたのであるから、或は膳所のあたりの句かも知れぬ。

前年の三月深川を發つて奥の細道の旅を終えたのは九月の中旬であつた。それから三年二月までは或は伊賀の故郷に行き、近國を旅しながら殆ど落着いてゐる暇がなかつたらしかつた。幻住庵に世の俳諧の批判をさへ鎖し、自ら人に會ひたがらなかつたのも、餘りに人にあひ過ぎたゝめであらう。

誰人か薦着ています花の春といふ彼は、彼自身の姿が謙遜に織り込まれてゐる。彼が四十七歲まで登りつめた心の高揚、當然辿り着くところに居るのだ。自分はこの心の高さを見きはめたいのだ。彼についておもふことはこの一つの事

がらだけである。

一段づゝ積まれてゆく彼の城壁は、最早何人もうしろにも前にも從へないところである。奥の細道の長途に練られた赭顔蒼容の姿は、その心にひびいて音を立てゝゐる。そして彼が見るものは路傍の餓人に何やら寒巖に似た、薦を着た人の內側の魂を見ようとしてゐるのだ。花下の貴人と餓人とに何等選ぶところがないまでに、それを感じる彼の心に素直なものがあるのだ。よく噛みくだくと、一代の理想家である彼の人としての悲しみも交へられてゐる。――

何人も彼が飢と貧乏に追はれた人であることに氣がつけば、薦を着たその何人かゞ、曾て彼の心に宿つた何者かであることに氣がつくであらう。

其角は、この句は未來記であるといつてゐる。又「說叢大全」に「馬光が家書の內、素堂夜話聞書にいふ、我素隱士にこの句を問ふ、素堂答へ

て曰く、これはこれ片岡山の餓人なり、十二月に太子の對面ありし、歳旦にも程なければ、橋のもとの乞食を見るにつけて、何となく思ひ出して吟ぜし由、翁もさいつ頃物語りなりき」(句選年考)

其袋集に「薦を着て誰人います花の春」になつてゐる。說の是非は行はれてゐるが、自分は誰人か薦着ています花の春を取る。

芭蕉は實際餓人を見たものに違ひなからう。それは花の下であるかどうかは分らないが、いつか彼の心を通り過ぎたものだ。これを貴人だとか西行流の聖人が薦着てゐるとかいふのは、あやかり過ぎるのだ。芭蕉がその餓人の心に入り交つてゐるやうな氣がするのである。寫實から自分の心境にまでいつも食ひ込ませる彼は、一ト息に「誰人か薦着ています花の春」と幾らか派手に詠み込んだ背丈の高さは、その氣質から打つて出たところのものであらう。高びしや

なところに彼の高揚と膽の太さと、それまでに叩き上げられた芭蕉がある。

## 嵯峨の竹

竹は葉の色や、そよぐ景色、幹の青さは得もいはれぬ涼しいものである。葉の細かい孟宗竹はやさしい葉ずれを出すが、矢竹や篠竹は粗い音を風の間に間に吹かれてゐる。どちらにしても竹の涼しさ清らかさは、自分のやうな荒唐無稽な人間にも、暫らくは耳を洗ふてくれるやうである。

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹　芭蕉

平凡な讀んだだけの句であるが、竹林の多い嵯峨の景色が思ひ出される繪のやうな句である。芭蕉の句としては拙い作にちがひない。深みも寂も罩められ

てゐないが、嵯峨日記の「竹の子や稚き時の繪のすさみ」を思ひあてると、何かゞ心に殘つてくるやうである。元祿七年彼が五十一歳の夏の句で、秋に病歿してゐる。

さゞれ蟹足はひのぼる清水哉　芭蕉

さゞれ蟹といふのは小さい鉈豆くらゐの甲羅をした、紫と赭と黑い色をしてゐる鋏の赤い清水蟹のことであらう。崖ぎはに滴り集つた清水がある、誰でも、そこで足を洗ふたり又冷たい水を掬んだりするのだ。崖の上からは雜草が頭にすれ〳〵に下つてゐて、野苺の卵黄いろの實が葉がくれに美しく覗いてゐるのが見える……

夏のことで熱する足を清水に滌すと頭まで瞭乎として來る、いゝ氣持だ。彼はそこで手を伸ばして野苺の蔓を引いてその實を幾つも摘んでは食べて見る、野

に生えるもの〻甘い温かい味ひがして來る、彼は一寸の間自分を忘れて苺の實をたべてゐるのだ、そして氣がつくと脛のところがむづ痒い感じがする、何氣なく見ると一疋の小さい蟹がいつの間にか脛を這ひ上つてゐる。彼は微笑みがひとりで上つてくることを感じ、擽ぐつたい感じはするがすぐに拂ひ落す氣にはなれぬ。この一場面の寂寞は天下の寂寞である、搔き亂すことは彼の厭ふところである。さういふ間にも蟹は段々に這ひ上つて來る、得もいへぬ哀愁の情が優しい彼の情操をつくり上げてくるのだ。彼は間もなくその蟹に手を觸れて見ると、蟹はおどろいて水の上に落ちて、脚迅く小石や齒朶の葉かげの間にかくれてしまふ、天地の寂寞は端なく破れたのである。

彼は苺の實をたべるかはりに今度はそこらの、小石や草蔭や小さい穴などに氣を付けて見ると、あちこちに泡を吹いたさゞれ蟹が小石や穴に半分からだを

匿しながら、半分外側にあらはして夏の永い日あしを遠く山のうしろに感じてゐる、穏かな涼しい又靜な光景である。彼はそれらの盥にさはらずに足を洗ひ、その指をまで丁寧に拭きながら淸水を去るのである。彼の心を領するものは「穏かな夏」であつた。そして得もいはれぬ可憐な愛情であつたのだ。

すゞしさやほの三日月の羽黑山　芭蕉

元祿二年六月三日、芭蕉は奥の細道の旅中、奥羽羽黑山に登攀した。羽黑山月山、湯殿山を五日間に滯り、別當代會覺阿闍梨の需によつて三山巡禮の句を短册に書き殘したのであつた。

月山

雲の峰幾つくづれて月の山　芭蕉

湯殿山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな　同

そしてすゞしさやの句は羽黒山の句である。自分は羽黒山を見たことがない。併し自分は山澗の黝ずんだ峰に三日月がほのかに、美しい凄みさへ見せて、非常な靜さで浮き出てゐる景色に接したことがあつた。

自分は郷里の市街から四里ばかり距れた鶴來といふ町で、旅行の折に泊つたことがあつた。まだ私は十六くらゐであつたらう。大人に連れられて行つたのであるが、家を離れて泊つたことが始めだといつてよかつた。町は大河をうしろに負ひ、前に嶮しい白山連峰の秀を控へてゐた。晩、そとへ出ると山の峰の方に樹々の姿が闇より一層濃い塊になり、山全體が炭のやうに黝ずんで見えた。物凄いといふよりも何か壓迫的な寂寞であつた。その山の上に三日月がかかつてゐて、冷然と澄んでゐた。自分はあれほど冷たい風景を見仰いだことがなか

つた。

床に這入つてからも、すぐ頭の上に暗い山が重りかかつてゐるほどだつた。爾來二十幾年、今この羽黒山の句を見てゐると、あのときの山の感じが久しぶりで思ひ出された。羽黒山の感じも何かそれに似てゐはしないだらうか？　ほのかに懸つてゐる三日月の姿も山のもつ暗い夜の風情も、この場合涼しさ以上の或嚴しい清涼を感じさせてくるやうである。ほのと詠んだところに芭蕉らしい丹念な技巧が表はれてゐて、確かりと三日月をつかまへてゐる。羽黒山といふ名前も此夜の三日月や涼しさを一層深く重々しく落着かせてゐる。下にこの羽黒山と置いた芭蕉も、この山の名前のひびきや落着きを用意して置いたものであらう。芭蕉はさういふ處に心を止めることが得意でもあつた。

夏の夜や崩れて明し冷し物　　芭蕉

曲水亭にてといふ前書がある。

曲水亭は近江の膳所にあつた。惟然、臥亭、支考の外に主人と芭蕉とが一座になり小吟を催した。その折の句である。

「芭蕉俳句研究」の幸田露伴氏の料理の說がよいと思ふた。涼しい、そして崩れやすい味の變る物であらう、そのうちに豆腐もあつたらうと思ふた。短い夏の夜の更けて行くのに、鉢の中の冷し物が崩れかけて、さすがに夜冷えを感じるくらゐである。何かの果敢ない氣もちも織り込まれてゐる。豆腐のやうなものもあつたかも知れない。無いとはいへない、唯、彼の言はうとしたところは、崩れてゐるところに時を示してゐるのである。

夏の夜は秋の夜々にくらべて何か果敢なく寂しいものである。彼の心もかういふところに無かつたか？　單なる冷し物はこの場合味が淺いやうに思はれて

ならぬ。

閑かさや岩にしみ入蟬の聲　芭蕉

奥の細道の句である。

彼の心の透るところがこれほど深くしみ出てゐる句はない。すこしのよどみも濁りもなく、玉のやうに透つてゐる。寂寞を此處まで摑へて見れば、寂しさの姿を見ることができる。文學の中にこれほどの「閑けさ」を摑へたものは古今に通じて稀である。

その涼しさに徹したところには汗冷える思ひがする。この句をよむごとに自分は全く彼の前に降參してしまふ。確かりと少しのたるみもなく張つてゐる。水氣をふくんだ岩の皺や襞の幽けさ、それに目をとゞめてゐる彼の姿も、もはや「閑けさ」の生きて呼吸する姿といつていゝであらう。

# 芭蕉句解

## 一、晝寢

ひやひやと壁をふまへて晝寢かな　芭蕉

前書に「粟津の庵にて殘暑の心を」とある。元祿七年七月粟津無名庵の吟である。大津の木節亭で芭蕉は、支考に問ねてこの句はどうかと云つた。

「是は只殘暑とこそ承り候へ。必らず蚊蝱のつり手など手にからまりながら思ふべきことを思ひ居る人ならん。」

「思ふところ解けたり。」

芭蕉は微笑ひながら支考に恁う答へた。

句の意味はこれ以上釋く必要もない。唯、殘暑の頃で壁をふまへてとあつても、さう永い間蹠を壁にあてゝゐた訣でもなく、ふとした途端に蹠が壁に障つたくらゐの程度であらう。そして奈何にも冷々と快適な氣もちだつたことを云つてゐるに過ぎない、——粟津の無名庵は曲水木節その他の門人等が絶えず修繕して、芭蕉の泊るに委せてゐたものである。此年の秋には芭蕉は死んでゐる。その死を考へ併せると此の「ひやひやと壁をふまへて晝寢かな」の句の奥の方に、何者かの枯寂な姿が髣髴しないではない、ひやひやとは、單なる冷爽の意味以外に何者かの響や聲を有つてゐると云つてよい。

芭蕉は寫實の本體から何時も句作を建てゝゐることはいふまでもないが、こ

れらのじだらくな晝寢のありさまも、壁をふまへてと云つたところにじだらく以上の、物思ひや抒情がある。支考の云ふやうに壁に足をさはりながら、何かうつら〳〵と考へ耽つてゐるといふ意味は生きてゐる。人間は退屈な時には足や手を無心に動かしながら、(或は足で何かをふみ、手に何かを無感覺的に弄くりながら)一つ事を往反しながら思ひつゞける時が屢々あるものである。

芭蕉は當時五十一歳になつてゐる。

彼ほどの人物が絶えずやはり死の事に思ひを走らせてゐなかつたとは云へない。天衣無縫の彼ではあるが自分の身體のことに氣をつかつてゐることは、彼が旅行に出る時は必らず門人を伴にした一事でも分るやうである。然し又一面には彼ほど健康に無頓着な大食家はなかつたやうである。何時も好物があると胃の惡い癖に飽食をして、門人に止められて漸つと氣付くやうであつた。恐ら

く芭蕉のこの物思ひは「この秋は何で年よる雲に鳥」や「此道や行人なしに秋の暮」「松風や軒をめぐつて秋くれぬ」の境を彷徨してゐたものであらう。あゝいふ人が一人でゐる時の退屈さうで平凡な姿の中に、何者がその彼の心を全きまでに領してゐるかと思ふだけでも、一寸想像外のものがあらう。恐らく百年の微風が徐に彼の身邊をそよ吹いてゐるのかも知れない、——

## 二、白　菊

白菊の目に立て見る塵もなし　芭蕉

元祿七年九月二十七日に園女亭で（岡西一有の妻。）芭蕉をはじめ園女の夫の滑川、支考、惟然、洒堂、舍羅、何中と一席の俳筵を催した。當時典雅で淸やかな美貌と淑かな物腰とで、諸俳人間の交友の心を和めてゐた園女が、特に芭

蕉の爲めに晩秋の名殘を惜んだ一會を卷いたのである。

園女の馳走振りはその庭の手入れにまで及んで、靜な秋夜の凉爽を擅にした芭蕉は、先づ園女の清雅を詠じたものである。「白菊の目に立て見る塵もなし」の句境は、清純を讃へた以外のものとは思はれぬ。――或は當夜、庭か緣側の一隅に白菊の一鉢が置いてあつたのかも知れぬ。白菊があつたと見る方が穩當であらう。芭蕉はその白菊に事寄せて、その女の美しさを詠んだものであらう。

會の果てた頃、芭蕉は稍々蒼ざめた顏付で、緣側へ出てその腹に手をあてゝ見せた。そして腹が痛むことを園女に告げた。併し間もなく園女の藥で小康を得たのであつた。

「何か惡いものがございましたでせうか。」

さういふ園女は、曾つて芭蕉が與へた「のうれんの奥もの床し北の梅」の園女の物優しさだつた。芭蕉は他の門人らにも心配してはくれるなと云ひ、大したことのないことを告げた。

併しその翌日から下痢が續き、日を追ふて激しくなる一方だつた。芭蕉は園女の饗應の中に茸の吸物のあつたことを知つてゐたが、他の人々に異狀がなく芭蕉だけが中毒つたことを知つてゐた。併し温和な彼は十月十二日にその生涯を終るまで此事は言はなかつた。「白菊の目に立て見る塵もなし」といふ彼も所詮自らの生涯を證據立てゐるに外ならぬ。ともあれ彼が園女を愛したことは清雅の道草であるとは云へ、彼の心には何やら優しいものを園女から感じてゐたものであらう。人間は戀愛の外のもので、戀愛よりもつときめの細い或る好しい感情になることがあるものである。異性への友情はこの好ましさの現はれで

あるかも知れぬ。

笈日記に「是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一會を生前の名殘ともおもへば、その日の面影を見るやうに思はるゝ也。」と著して憶草の便としてゐる。當夜の歌仙白菊の句脇は、「紅葉に流す朝月。」その女「冷々と鯛のかた身を折わけて。」等である。

ともあれ、「白菊の目に立て見る塵もなし」は、その凡化の風情の中にある得も言はれぬ淸さには、全く打たれざるを得ない。斯くまでに率直に喰ひ入ることとは、凡庸なざれ事では近寄ることさへ出來ない手法である。

## 三、秋の風

身にしみて大根からし秋の風　芭蕉

若し發句道に味覺の悟達がありとすれば、此の句の捜つてゐるところに、秋風の身に沁みる有樣が斯くまでしみ〴〵出てゐるものは少數い。此場合の大根はおろしにしたものを食したのを詠んだもので、姨捨山の故事に倣ふて世相を交へたせち辛さを詠じ加へたものであらう。

貞享五年更科紀行の句で、姨捨山に錫を引いた所の口吟みである。「高くもあらず、かどかどしき岩なども見えず、只あはれ深き山のすがたなり（略）何故にか老たる人を捨てたらんと思ふに、いとど涙も落そひければ。」と言ひ、更科紀行にその山を叙してゐる。

## 四、野ざらし

野ざらしを心に風のしむ身かな　　芭蕉

前書に曰く、「貞享甲子秋八月江上の破屋を出づるほど風の聲そゞろ寒げなり。」とある。

山家集に「鳥邊野を心のうちに分け行けばいまきの露に袖ぞそぼつる。」といふ類歌がある。

貞享元年芭蕉四十一歳の時、殆十年振りで親しい郷土に歸省した。秋十とせ却て江戸を指す古郷」とゝふのはその折の句である。八月江戸深川を發ち、東海の驛鈴に枕を重ね、伊勢を經て郷里伊賀に歸り、大和吉野を巡つて貞享二年の春四月深川の草庵に戻つた。その旅立の秋近く朝早いそゞろ寒の日の、彼の心を野ざらしに稱へた句である。

片雲を友とする彼は自然風物を感じるに、餘りに弱々しい勝れた初々しい心をもつてゐたやうである。「野ざらしを心に」する彼は、長旅の憂き目を心に象

徹して早傷みやすくなつてゐる。草庵を出て何となく沁む風に既う彼の心は打たれてゐる。彼のいたみ易い心は何時も鋭く聰い感應に張り切つてゐることを思ふと、弱々しいのではなく却つて根勁いのかも知れない。尠くとも彼ほど透明な心をもつてゐるものは、稀れとしか思はれぬ。

しかも野ざらしを心に風のしむ身かなの「心に」と云ひて感じを締め付け、感じを一層深めたところに彼が持つ幽遠の技巧が輝いてゐる。その上「風のしむ身かな」と靜に受けて結んだところは、彼の用意の潤澤を思はせるに十分である。

## 五、秋の霜

手に取らば消えん涙ぞあつき秋の霜　　芭蕉

野ざらし紀行の故郷での吟詠である。

哀傷と情熱とで高く呼びかけてゐる發句である。彼が絶大の熱情をあれらの靜な温容の間に抱いてゐたことは、この破調で一口に詠み上げてゐることでも分る。何人も故郷では心がいたみ易いものである。彼は殆十年伊賀の懷しい土を踏まなかつた。彼の目の前にある風物の姿は見る影もなく移り變つて、彼の心に常に宿りかけてゐる歳月の砦の上にも、さびしい暮雨は蕭々と降り注いでゐた。

紀行に、「長月の初古郷に歸りて北堂も霜枯れ果て、今は跡だに無し、何事も昔に變りて、はらからの鬢白く眉寄て、たゞ命有てとのみいひて、言葉は無きに、このかみの守袋をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島が、子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたり、としばらく泣きて……」記して嘆いて、故郷のありさまを

描いてゐる。

自分はこの句を口誦んで見ると、自分もまた都に遊行して空しく憊れて郷里へかへつた時や、その折に書いた詩の幾章かを思ひ出すのが常であつた。感懐が盛り上つて何らかの形で撥き出ようとしてゐる氣持である。秋霖は花の如く涙はなほ凍えて、二百年後の自分に響を打つて來る句である。

## 六、秋の暮

此の道や行く人なしに秋の暮　芭蕉

人聲や此の道かへる秋の暮　同

芭蕉は晩年は或人の訊ねに答へてから云ふてゐる。

「我が發句は一つ／＼辭世のやうなものだ。」

「それ故自分には辭世の句を殘す要はない。」

彼の晩年の心は此の句の精髓に顯れてゐると云つてよい。「此道や行人なしに秋の暮」といふ心の澄み方輝き樣又それらの道を見展いた事は何と云つても或る靜なところに行き着いて、そこから又自分へ戻りかけてゐる經驗を持つてゐた。その或るところは我々にも解る或るところである。辿るに音のない無際限なやうなところである。彼が此句に前書をして「所思」としたのも故ある譯である。人通りのない坦々たる一本の道の行き極まるそれのやうに解してもよい。だが彼の本意は心の問題として發句であらう。何か深さに據らなければ說き盡せないものが、後に自身をして玆へ追ひ着かしめたものであらう。彼はこの句を得て彼自身すら一層思ふところを深めたであらう。

自分は彼を或論文の中に人生の記述者であると述べ此句を索引した。自分の

言ふところは今もそれと變らぬ。彼は飽迄人生の記述者でありそれを彼の風物に記號したことは實際だつた。之加も彼の持するところのものは永年剝脫しなかつた。我々は人通りのない道路を見たことがあり、その寂しい道路に我々の生活の影も見ない寥境に氣附くことがある。彼芭蕉の「此道や」はこれらの寥境が云はゞ餘程高められて彼の心に宿つてゐたものらしい。

芭蕉は元祿七年七月廿六日清水の或る茶店に連衆十二人と遊吟した。その折彼は二句を物して、この內いづれを守るやと人々をかへり見た。

人聲や此道かへる秋の暮　芭蕉

此道や行く人なしに秋の暮　同

「此道や行く人なしに獨步したるところ誰か其後へ隨ひ候はん。」と人々は後者を選んだ。芭蕉もそれに隨ふた。芭蕉は一句を物するに他に一二句をも用意し

て、子弟の説を聽いたことは再三ではない。彼の如き大家でも其底に信じたところがあつても、人の説を聞くに吝でなかつたのは、その寛容にも據るが一つには彼自身も迷はないとは云へない。自分は彼の此の迷ひに却つて美しい氣質と率直とを感じるものである。

「評林に此句の評に曰く「空山下見人」といへる詩の心にやあらん。」とある。

## 七、栗

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の栗　芭蕉

新宅の賀吟ではあるがその前書がなくとも、その朗かな或朝の凉しい秋を偲ぶに餘りある句である。「雀よろこぶ」でその聲や姿、背戸に朝しめりのある

落着いた光景が叙されてゐる。彼の性質にある朗かさは此種の句に高雅な品と豊さをよき繪のやうに描き出してゐる。

知足は尾州鳴海の酒造家で、富んでゐる人である。一家みな門人になつてゐるが、他門によらないで、遂に鳴海一風をきたえあげて後世に名を留めてゐた。

## 八、しぐれ

秋もはやはらつく雨に月の形　芭蕉

「句選年考」に曰く「此句先に『昨日からちよつ〳〵と秋の時雨哉』といふ句なりけるに如何に思はれん、月の形にはなしかへされし。廿一日二日の夜は雨そぼ降りて靜かなれば……」とある。

古今集に「惜しむらく人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにける」とい

ふのがある。

或宵の程、所在なさに外へ出て見ると、頬に冷たいものを感じる。夜露がこぼれたのかと思ひ、樹をはなれて空を見ると、月は形鋭どく尖りを見せてゐるが、雲にぼやけて折々見えるだけである。雲はよく見ると脚早に北方に向いて流れて歇まぬ。けふはまだ九月廿日ころであるのに、時雨には早く秋雨にしてはその降り様に落着きがない。「秋もはやはらつく……」とあつさりと之加も寂しさを包んで詠んだところに逾に芭蕉の眼光が行到いてゐる。しかし「月の形」とあるは彼の常套的な下五文字の置方である。

その「はらつく時雨」をこれまでに幽に詠じた彼は、西行を學んだ人としては當然の收穫であらう。後世時雨に就ての百の惡文を逈かに超えてゐることは勿論である。

## 九、いとゞ

海郎の家は小海老にまじるいとど哉　芭蕉

海べりの漁師町のとある網干場に、海老や雜魚を干してある蓆がある。夕方それを軒端の雨具や櫓櫂を立掛けたところに取り込んで置いたが、何時の間にかいとどが來て啼いてゐる。氣を付けて見ると海老や雜魚の間にかゞんで秋の宵をほしいまゝにすだいてゐるのである。道は濱べに續いて星あかりが白い砂に漂ふて、薄い月夜になつてゐる。海岸のことで家も道も網干場も斜面にあるので傾いてゐる。僅に漏れるのは堀立小屋のやうな漁師の家々の燈火くらゐで、夜漁に男は皆出たあとらしい靜な無人の家々である。凪續きで海の音も極めて穩かな宵である。白い犬が一疋すたすたと磯の方へ行く。

「雙鑪輪（ワクカセ）に、いとど、（竈馬）カウロギ、一物二名　筑紫ではキヽゴといふ。其形蛬（キリギリス）の如くにして首尖りて鋭なり、足鬚共に長し。」（句選年考）

いとゞは黑鼈甲のやうにつやのある肌をしてゐるコホロギだと自分は思ふてゐる。秋晩くまで可憐に啼きすだく蟲で、やや寒くなると竈の下や板じきや蓄への冬瓜や南瓜の下に來ても啼く。秋をおもふことはいとゞ哀れをも併せて思ふことに近い。芭蕉のねらふたところは取材も新しく、あはれも一入で佳い傑れた句である。四十八歳の句。

## 十、蜻　蛉

蜻蛉や取つきかねし草のうへ　　芭　蕉

此句を讀んで見つめてゐると、その草のそよぎの細な震へまで眼に映つて來

る。斯くまでにありのまゝの景色を寫し出すことは、もはや文字が文字の域を脱け、神韻を帶びてゐる程度にまで、殆ど悠々と押展いて行つてゐる。

「句選年考」には行脚の時宿を求めかねたる句としてゐるが、それほどの意味を付ける必要はない。ありのまゝの句の意味で澤山とおもふのだ。四十六の折の句。

## 十一、秋隣

秋深き隣は何をする人ぞ　芭蕉

元祿七年九月二十六日、「白菊の目に立て見る塵もなし」の吟のある園女亭興行の前晚、芝栢亭での句吟である。「句選年考」では「或行脚の僧云芝栢亭は人家立込みたる所にて此吟有りけり。」とある。普通何かひつそりした町の隣家の

やうな景色のやうに思はれるが、事實はさうでは無かつたらしい。實際はどうあらうと此句の精神には變りのある筈がないのである。

晩年の句らしい響と冴えとが出てゐる。彼が晩年の句は一粒選りといふより一句づゝの歩みが何らかの方向へ近づき進んでゐる。

白菊の目に立て見る塵もなし　芭蕉

此秋は何で年よる雲に鳥　同

秋ふかき隣は何をする人ぞ　同

松風や軒をめぐつて秋くれぬ　同

此道や行人なしに秋の暮　同

人聲や此道かへる秋の暮　同

秋もはやはらつく雨に月の形　同

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　芭蕉

これらの發句の凡ては十月病歿した前の九月の作である。彼の歩みが決して俳三昧の境にのみ留つてゐなかつた事、人が死に就く前の道程がその足跡を殘し、後人に自らなる深い考へを喚び起さずには措かぬ。彼はどういふ隣を見たか知れないが、これが普通の隣家であるといふ考へ以外に、彼の心を捜つて見ずには居られないのである。彼の句に妙なコジツケの枯寂を味ふといふことは、あらゆる芭蕉研究者の好意でなければ思ひ上りであらう、しかも此句を表現のまゝ味讀して素通りすることが、彼の心を汲み分けることを知らぬ者だと言つてよい。彼の心を搔きさぐることに依り、此句の精神が欝然として我々を打つもののあることをも感じるのである。

一方から言へば芭蕉はこれらの發句の奧で行き詰り、底を洗ひつくしたと云

つてよいのである。もはや餘すところ無きまでに彼は彼の道に行き着いてゐるのだ。これらの句を見るとその後は生きてゐる譯がないのである。呼吸の長い辭世のやうなものを彼は晩年の句に刺し貫いて見せてゐた。脈々としてそれらは自分に單なる一個の芭蕉をでなく、一人の人の死期を考へさせて來るやうである。これらの句の作の後になほ彼が十年の餘生があらうとはどうしても思へない。或意味での人力の大半が燃えつくし餘燈は煌々として照らしてゐるからである。假に彼がこれ以上生きてゐたとしても擔ひ切れる「人生」ではないのだ。彼より三倍も才能のある作家なればなほこれらの藝術境から起き上り、再び濶歩してあらゆる門扉を蹶散らして行くであらう、併し我々は彼の場合これ以上のものを望んではゐない。彼の靜すぎる之等の境致では、やはり三嘆して彼の彼らしいところに心を向け眼を放つだけである。

## 十二、秋の風

桃の木に其葉ちらすな秋の風　　芭蕉

奥の細道の旅で加賀山中溫泉に一浴した。「山中や菊は手折らぬ湯のにほひ」の吟もその折である。

山中溫泉では泉屋といふのに長旅の草鞋の紐を解いたが、主人は俳諧の道に知られ貞室が山中へ來たころからの風雅の士である。當主条之助も芭蕉滯在中色々身邊の雜事に隨ふたゝめ、芭蕉はこれを深く愛し、桃妖といふ號を與へ一門の契ひを許した。或は詩經周南に桃の夭々其葉蓁々、之子于歸宜其家人に依つたのかも知れない。

泉屋桃妖の事を書きたいと思ふが、後日を期して唯彼が加賀俳人の內でも相

應重さを爲してゐたことを特記して置きたい。「桃の木に其葉ちらすな秋の風」も自ら彼への愛情と親密の顯れで、句の表よりも中身の人情が生きてゐる句である。芭蕉の此種の句は、その身邊的な記述から說ないかぎり解りにくい處がある。

## 十三、芭　蕉

ばせを野分して盥に雨を聞く夜哉　　芭　蕉

天和二年芭蕉三十九の折の句である。

芭蕉庵は今の深川西元町にあり當時は鯉屋杉風の別墅であつた。別墅であるといふよりも鮒や鯉の生簀を浮したことのある堀井戸のあつた鯉屋の物置部屋を修繕して、芭蕉の膝を入れるに足りる庵室としたものであらう。杉風の肝煎

であることは云ふまでもないが、僅か勝手の間と加へて二間くらゐであつた。後に幾度も災火に遭ふたが兎もあれ彼の落着き先はこの侘しい庵室だつた。

軒に近くの一株の芭蕉を植えてあつたことも實際で、野分の頃その敗荷の屋根廂を打つ夜半もあつたであらう、不時の雨漏りなぞして、盥を出してそれを防いでゐたこともあらう。

一説にはこの盥が軒下に置いてあつたといふが、芭蕉が盥を出し放しにしたりした人ではなく、又句の意味からも部屋の中に置いてあることが明らかである。內と外との雨に野分の音なぞも加へ、比較的壯年の作で十分に侘びた心が出てはゐないが、却つて風物の中に潑剌とした眼を向けてゐるところが窺はれる句である。「櫓の聲浪を打つて膓氷る夜は涙」などの破調と同樣で、芭蕉も時々破調を試みたものである。

此句の前書に「茅舍の感」とある。

芭蕉を初めて植えた年は恐らく天和元年であらう。樋口攻氏は「芭蕉研究」に入庵を三十七歳の折と定めてゐる。ともあれ芭蕉を好いた彼の芭蕉の句は可成にある。

芭蕉葉を柱にかけん庵の月　芭蕉
ばせを植えて先づにくむ荻の二葉かな　同
帆となり帆となる風の芭蕉かな　同
この寺は庭一杯の芭蕉かな　同
鶺鴒くやその脾に芭蕉やれぬべし　同

## 十四、蘭

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひかな　　芭蕉

豪邁の風情に優しい高雅を匂はせてゐる句である。蘇鐵の葉の逞しい繁りを配してゐるところに、特に蘇鐵と蘭の比較の上の無理をも感じないで、穩かに感懐のできる寧ろ素直な句である。門に入ればと言ひ切つたところに其穩かさの中にある鋭い高雅の品が生きてゐる。

守榮院は伊勢山田棒の路といふ所に有り寺は淨土宗である。名高い蘇鐵があつたのである。恐らく即吟の句であらう。

## 十五、菊の花

朝茶のむ僧しづかなり菊の花　芭蕉

堅田祥瑞寺の句である。

僧と朝茶とが如何にも物靜な爽な氣持を出してゐる。菊の花は或は作らぬ亂れた菊かも知れぬ。特に意味を籠らしたやうなところもなく涼爽の秋の朝がすつきりと出てゐる句である。

元祿四年四十八歲の折の句である。「朝な〳〵手習すゝむきりぎりす」「水清くなりて柳の散る日かな」などと同斷の清い美しさをもつた句である。手習の句は勝峯氏は芭蕉の句であるか否かに疑義を挿んでゐるが、自分は芭蕉の句であらうと思ふてゐる。彼の筆蹟は手習を本式に習つた手蹟で、この一見幼稚な句を物した所以ではないかと思ふのである。彼の手蹟は柔かい速力の落着いた味のあるものである。美事なものではないが彼の穩かな氣質が泌み出てゐて懷

しい手蹟である。

## 十六、秋の風

秋風や桐にうごいてつたの霜　芭蕉

葉はとうに散り果て桐は裸になつてゐる。風のあるとき漸く二三枚になつた葉もうごくくらゐである。秋も終りに近づいた霜は枯木に纏ふた蔦の葉を赤く染め出してゐる。桐の幹の灰白色のさびしい色に蔦を點じたところは、大して珍らしくはないが、霜のきびしい調子が引纒めてゐる。

玲瓏として流れてゐるものはないが、ふしぎに寂寞の情が横溢してゐる。それも桐の幹の色に見る寂寞の情である。作句は恰も初心者のやうな幼稚な素材の積み立てをしてゐるのも、却つて味ひがあるやうである。それにも拘らず彼

の圓熟期を通りすぎた四十八歳の句であることを念ふと、枯淡過ぎてゐる故で素朴な句になつたのかも知れぬ。

## 十七、茸

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

五十一歳の時の句である。

句の意味は解くまでもない日常我々の見る情景である。何等こだはるところもなく、此處まで情景を惹き入れることは一見易々した手法のやうではあるが實際は決してさうではない。情景は天下の山川草木にあふれてゐるが、睨みの透らない情景は唯いつも死か眠りの中に我々から忘却されてゐるだけである。彼は睨むことの達人だつた。同時に睨みの着かない處のない無類の名人だつ

た。彼の眼光は巨石の間に刺しつらぬき、離々たる雑草を起したことはいふまでもないことである。それに此句はまだ露のまゝの「新しさ」を持つてゐる。この新しさは「朝露によごれて涼し瓜の泥」と一般で彼の並々でない獨特の境致を示してゐるものである。五十一歳にして此新しさに眼を着けることは並大抵のことでは無いのである。

## 十八、菊

きくの花さくや石屋が石の間　芭蕉

八丁堀にてといふ前書がある。

石屋といふは土臺石を商ふ庭石もある店であらう。庭石を商ふ家なれば幾らかの風流を取交ぜた店といふ風に解釋してもよい。その石をならべた間に黄か

白かの雜然とした一株の花が咲いてゐる。これは每年咲くので石屋ゟ其處を空けて置く心をも見なければならぬ。取材に面白味はあるが、芭蕉の句として惡い方であらう。しかし取捨に可成に嚴格な彼がその儘後世に殘してゐるところを見ると、彼にも何らかの自信があつたのであらう。――自分は此程度の句なれば何も芭蕉を俟つまでもないと思ふ。そして此の句は相應に月並と陳腐の間に引つかゝつてゐるやうである。名吟をのみ彼に引くよりも此程度の句を示すことが、彼の句作の道しるべともなるであらうと思ひ、玆に錄した譯である。

## 十九、木がらし

木がらしや頰はれいたむ人の顏　　芭蕉

木がらしに岩吹き尖る杉間かな　　同

木枯しの鋭い寒さに頬はれを配したのは、人事に喰ひ入りて餘すところのない句である。

自分は子供の折に「頬はれ」といふ文字通り頬が蒼くふくれる病氣の人を見たことがあるが、近年餘り見ない。齒痛とは別な病氣らしい。「句選年考」には、「東垣が蘭室祕藏に蝦蟆瘟の病名始めて見えたり、夫より醫學正博にも出づ、近世の俗江戶挾箱といへる病なり、左右の頬はれいたむ、片頬腫るゝもあり。」と記してある。何となく見るからに不愉快でツラ相な病氣で、女に多いやうに思はれる。此句も女ではないかと思はせる節がある。微か乍ら同情の心も加はつて見える。句の表現はすらりと一口に吟み下してゐるところに、鋭く何ものかを抉つたあとがある。「木がらしに岩吹き尖る杉間哉」と同極端を示してゐる。後者は自然の肺腑をつかみ出して吟み下してゐて、これ又無類の鮮鋭を研

ぎ出してゐる。行くとして可ならざるなきは芭蕉である。「岩吹き尖る」と云ひ「杉間かな」といふ彼は、少しの隙もない緊張と締付とを以つて迫つてゐる。自分は却つて「岩吹き尖る」の方を採る、「頰はれいたむ」に飽きを感じさせられるが、「岩吹き尖る」は慣れるに從ふて句の深みへ這入ることができるが、頰はれいたむの境致はそれほど入り込めないやうである。

## 二十、しぐれ

草枕犬もしぐるゝか夜の聲　　芭蕉

甲子吟行に「名護屋に入、道の程吟す」とある。

この句の「哀れ」は遠來の詩情ばかりを愬へたのではない、――何處かの棄犬の主たづねる聲か、親慕ふ聲であらう、犬もしぐるゝかといふ情は、彼の技

巧が美しい哀憐を形取つてゐる。一篇の詩の外のものではない。新古今集秋の下家隆の歌に「下もみぢかつ散る山の夕時雨濡れてや鹿のひとり啼くらん」といふ歌がある。或はこれに踏へたのかも知れぬが、句の形姿に既に幽遠をもつてゐる。文字の輪廓の幽遠を彼自らも知つてゐて試みたものであらう。

芭蕉は内容の幽遠枯寂を慕ふたことは論を俟たないが、形式と輪廓調子の流れからも入つてゐたことも勿論である。同時に彼ほど調子と音律を重んじたものもすくない。近時の詩のごときものではなく、最つと彼はその音律に沈んでそれを聽き分けてゐた。そして音律の爲めに彼自身の「さび」を忘れる男ではなかつた。彼こそ凡てに等分された才分を何處までも滑らかに行き亙した男であつたであらう。彼の完成は微塵も瑕瑾なき完成であり、ゆるぎのない成就された玲瓏さであつたのである。

併し彼の完成も初めからのものではない。壯年期に入ると同時に次第に彼自身に磨きがかゝつたのである。「雲とへだつ友かや雁の生き別れ」時代にさへ、彼は彼らしい完成を窺はせる發芽をもつてゐたと言つてよいのである。

## 二十一、行秋

行秋の酒たのもしや青蜜柑　芭蕉

秋の暮、草も木も枯れ果てゝ同じい一色の褐色をおびてゐる。蕭條の風物には生色が失はれてゐて、すぐ我々の感情に或る種の運動を感じさせるのである。併し我々はさういふ風景の中で健康な黒みのある蜜柑を見出すと、何か季節にもまだ信頼のできるものを感じ、快よい愉快を感じるのである。彼のいふところも此稀らしい綠濃い色に、過ぎゆく季節をしばらく眺めるのである。

この句には樂しい俳諧趣味といふ俗間的な言葉の挿入が許される程、子供らしいものを多分に含んでゐる。青蜜柑それ自體が新鮮なところと多少季節的嚴肅さを有ち併せてゐるところのものであるからだ。

## 椎の木蔭

幻住庵記

先頼む椎の木もあり夏木立　芭蕉

椎の木の濃く嚴丈なる姿愛したるべし。「先頼む」の呼びかけしありさま心惹き入れて、頼むの心現れたり。「幻住庵記」の後に記せる句。

句選年考に「源三位頼政久しく官位の沙汰なければ椎によそへて、しひを拾

ひて世を過ごす哉と懷舊の昔も思ひやられたるなり。」とあり。石山の奧なる幻住庵にて芭蕉のこの古事を踏へたること或は然らん。されど椎の木をたのむは、彼の心にて選ばれたる寂しさのしをりならん。「椎」「しひ」の響に心をよせたる彼こそ、詩情の極致を知れるもの。元祿三年の句也。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡　芭蕉

嵯峨の落柿舍にての吟也。前書に「明日は落柿舍を出んに、名殘をしかりければ、奧口の一間〳〵を見廻りて。」と有り。

落柿舍は去來が別業なりしが、芭蕉しばらく獨り淸居の後に得たる句也。色紙へぎたるは剝ぎたる跡ならん。壁の跡そこのみ色變りて些細のことなれど、开を眺め入る獨り居の心、靜か過ぎて却つて寂しき也。笈日記に「色紙まくれり」とあり。恐らく落柿舍は風雅なれども五月雨ころの黴くさく、雨漏りなど

もありけん程の、柿の木、竹藪にかこまれたる所ならん。嵯峨日記に「五月四日宵に寢ざりける草臥に終日臥し、晝より雨降り止む。明日は落柿舍を出でんにと名殘惜しかりければ、奥の一間〳〵を見廻りて。」と見えたり。

五月雨頃の侘せき一日の芭蕉の姿、眼に入りて思ほゆ。「草臥に終日臥し……」たる芭蕉は床の中に眼を覺しつつ、うつうつとして茅舍の外の雨聲に聽き入るさま、奥深く幽遠也。

うき我を淋しがらせよかんこ鳥　芭蕉

閑古鳥は町中にて聽くことなき深山の鳥也。予信州輕井澤にありける一夏の初め、この閑古鳥啼くを聞くを得たり。その聲は方一方にひろがりて空寂言はむ方なし。その折も芭蕉の句を直ちに思ひ出しぬ。

うき我をと云へるは彼自らの姿も心もさびたるの時にして、一入己れの心を

寂しくせんに却つて樂むを得るの意ならん。隱士清魂の士は寂しき境涯にあらんには、一際心磨かれるなり。前書に曰く「獨すむほど面白きはなし。長嘯隱士の曰く。客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと、素堂此のことばを常に憐む。予も亦然か思へるなる。」と云へり。

芭蕉庵に諸國の俳人ら草鞋を脫ぎ、淸吟の敎へを乞へるもの日に次ぎて多からんは猶當時を偲ぶにあまりあり。芭蕉これらに一々應酬せんは彼の優柔なる性情よりして然らん。されどその客去り新しき客來る時は旣に疲れて、物憂き日常を送れるは必定なり。閑を選んで閑を得ざりし彼の心は悲しと言はんより恐らく人を厭ふの心增すのみ、「うき我を」は世俗の心をも取交ぜたる「嘆き」をも覗かせたる句なるべし。「嵯峨日記」に、淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは淋しさをあるじなるべし。とあり。元祿四年四十八歲の句也。

麥の穗をちからにつかむ別かな　　芭蕉

元祿七年芭蕉はその最後の旅を西國に渡り長崎に赴き、當時の珍らしき異國の言葉など聽かんとして旅に出でたる折の句也。死期の近づける芭蕉は仄かにその影を宿したるならん。川崎の驛にて見送りの門弟らと別れたる折の力なき、別れの心持あらはれたり。彼は常々愛情深き人なれば僅かの別れにも心潤へるが如し。前書に曰く「桃隣曰、戌五月八日、此度は西國にわたり長崎にしばし足をとめて、唐土舟の往來を見つ聞馴れぬ人の詞も聞かんなどと、遠き末をちかひ、首出せられけるを各品川まで送り出、二時半の餘波、別るゝ時に互にうなづきて聲をあげぬばかりなりけり。駕籠の內より離別とて扇を見れば」とありたり。

ともあれ當時にありて長崎に旅立ちを思ひ立ちたるは、芭蕉の新しきもの好

める心現れたり。その頃長崎の風俗と新聞珍奇さは何人も心ある人々の憧れとなりたるなるべし。新人中の新人なる彼の着眼も自らを語るもの也。されどその秋の終り彼はその旅途を半ばにして長逝せるなり。

短夜や驛路の鈴の耳につく　芭蕉

殆その生涯を旅に暮したる芭蕉は、しば〳〵その夢路にも鈴の音を聞きけん。短か夜のあはれに明け放たれたる旅舍の古障子の下に、物うく目ざめたる芭蕉はまた百年の夢を半ばにさまされしこと多からん。元祿四年の句、哀れに聽ゆる句也。

芭蕉の前書したる句よりも何となく詠み棄てたるが如き風情の中に、彼も知らざりし程の哀れさこもれる也。よき句にあらざるも短夜の憐れさはあるべし。

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗　芭蕉

前書、「桑門可伸は栗の木の下に庵をむすべり、傳へ聞、行基菩薩の古は西に縁ある木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや、幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。」

世の人の見つけぬ花や軒の栗　芭蕉

前書、「栗といふ文字は西の木と書きて西方淨土に便り有りと行基菩薩の一生杖にも柱にも此木をもちひ給ふとかや」

ともに栗の木の花着けし有樣、その寂しさを述べたるものなるべし。元祿二年奧の細道奧州須ヶ川の所の文に、「此宿の傍に大なる栗の木蔭を頼みて、世をいとふ僧、橡拾ふ太山もかくやと閑に覺えられてものに書き付侍る、と有りて此前書幷に此句見えたり、」芭蕉は折々同じ好みのもの二句あて作れることあり、いづれも動かし難く捨てがたき爲ならん。特に說く程の句にあらず文字の

意味それに現れ居るべし。

「かくれ家の」句はひつそりと情景顯れゐたり。予が故鄕に此のかくれ家の風致を愛するの茶人の多しと雖も、この場合かくれ家と名ぞらへる程のものにあらぬ幽なる家に生ひたる栗の木なるべし。栗の花は房をつくりて垂れるところの、味氣なき姿をもてるもの也。

又「世の人の」の句はやや理窟めきたるところあり、むしろ「かくれ家の」の句の素直さに予の心惹かるる也。「見つけぬ花や」とあるは、やや考へ深みてくどく、その味ひ素直ならざるやに考ふる也。

# 俳道雑記

# 發句

自分には發句も小説も別に變りが無い。變りがあると思ふのは發句が十七音の固定詩だといふ古い言草であらう。

發句と變りのないのは、その內容の人生が變らないといふことである。その心のにらみや構へ、凝氣の點に至つては發句の中の人生は呼吸苦しいくらゐだと言つてよい。我々がその自然や人生に立ち對ふ時、心を搔き上らせるときには、雲烟裡の人であるよりも物すごい人生の中に立ち竭してゐるやうである。我々の心の向き方で、靑い竹の幹が劃然として破れるくらゐのことは、何時も經驗してゐることである。

併乍ら俳道に入つたことのない人には、この心持ちを傳へることはできないかも知れない。或は又俳道にある人でもこの氣もちを會得しない人も尠くないであらう。要は彼らの心のにぶつてゐるか、さめてゐるかの相違だ。心のにぶつてゐる人は俳道に行き着けないと言つてよい。

自分は好きであるとか、樂しみにしてゐるとかいふ意味で一句の發句を作つたことがない。作りかけることは矢張り頭を疲らせることである。際限もなく深入りをして行き止まることを知らないのである。發句の奥の方には何時でも行きつけない、その折々の心もちで奥へ行けないこともあるのだ。すごすごと引返す自分の未だ臻らない姿を見ることは寂しいものである。自分はこの寂しい氣持を絶えず繰り返してゐる。

# 靜さ

自分は時々發句を作るが、このごろでは發句を作るよりも、その前の氣持の準備といふやうなものが非常に親しい氣がする、發句でも一つ作るかなといふ氣分ではなく、これを發句に書いたらよいなといふ氣もちである。

發句に書かうとする材料で、句にも表はされないでしまふことがある、惜いがそのまゝ忘れてしまふ、さういふ心を一度通りぬけたものが、再度と心に浮かばないでゐるくせに、やはり心殘りがしてゐる、私はさういふ心の境を喜ぶのだ、俳三昧といふものは俳句ばかり作つてゐることでなく、さういふ心が絶えず作者のからだのまはりに漂ふてゐることをいふのだらう、そのために作者

の心はいつも清い靜さをもつてゐる、それを私はいひたいのだ。

今の世に心の靜さを保つことは、何よりも仕合せなことである。騷然たる東西南北の彼方から、一脈の淸風を搔きおこすことは何といつても、その人の德の致すところであらう。往昔の俳境はこと〳〵くそれであつた。今の世の俳境は一層その靜さの必要を感じる、――蕉翁の時代の世とはちがひいまは身心の疲れる時代である。こんな世に靜さを誰よりも多く持ち得るといふことは何よりも有難いことである。

靜さは眞心のあらはれで、人間の一等よい性質がこだはるところなく、現れてゆく謂ひである。どんな詰らない人間でも靜にしてゐるときは、中々殊勝なものである。子供でも靜なときは、よけいに物事を考へてゐるといつてよい。子供の靜さは考へぬいてゐる靜さである。かれは自分で靜にしてゐながら、そ

の靜さに驚くことさへある。それは彼自身ですら豫期しない或る新しい考へに驚くからである。

自分は今のところ別に發句を作らうとはしない、むしろその空氣の中にゐることが樂しく、卑しいことから遠ざかる思ひをすることが尊いからだといつてよい、漱石は晝間小說をかいて俗塵を感じ、晩には漢詩を作つたさうである、この意味で自分の發句もまた文界の塵を離れる思ひがするからかも知れぬ。そんな意味で自分の俳境を惡ざまにあげつらふ人はなからう。——

## 淸閑

何か知ら頭に好きなことを考へさせ頭を遊ばせて置いた方がいゝと考へてゐ

る。さういふ時にわたしは發句を作る。發句は頭を遊ばせてくれるからである。頭にくすりな仕事である。

新しい古いなどは構はない。唯思ひついたまゝ書いてゐる。發句でも一つ書からうかと思ひついた時には、ちよつとした幽遠な氣もちと隣合せてゐるやうで、全くほのぼのとした心もちになるやうである。わたしのやうな粗雜短慮ものがこんな優しい心がけをこれ迄になく身にしみて思ひつくやうになつたのも、永年文筆に練れた鍛へが私にも乘り移つて來た故であらう。

この間も滯郷中の發句を蒐めて見ると、四季を通じての自分の暮しがうなづかれたので、長い小說や雜筆の必要がないやうにさへ思はれた。しかしせち辛い渡世のためには發句ばかり書いてゐられないやうな氣もした。全く發句でさへも一年間の作を併せ讀むと、その折々の暮しが振り返り見られ短い形が尊く

もありがたいものに思はれた。この發句でさへもの、さへさへこの場合つかひたくないやうな氣がする。

發句でも陶器でも、またわたし一人にとつては詩もまた幽寂より以外にあたひを感じなくなつた。寂しさの底を搔きさぐつて指にふれるものがあれば、わたし自身のものであるが、その他のものにはあまりわたしのがらにあはない。わたしは自分のがらだけを知りたいつもりで、まだ他人の嗤笑を買ふがらがあるとしても、わたしのがらさへあれば足りるのである。活動寫眞は面白いがその感銘は時とともにうすれて行き、却つて一句の發句を書いたときの季節や境遇が身に沁みて考へ殘つてゐるのも、やはりがらに合つてゐるせゐであらう。

發句は清閑の藝術である。わたしのやうに仕事のひま〳〵に一脈の清風に涼み見るやうな氣もちで作る人もたくさんにあらうが、こんなに頭にくすりな仕

事はない。十八九歳のころは發句で一流の人物になりたいといふ考へをもつてゐたが、とても二流までも行けさうもない。いろ〳〵な藝術もあるが發句をもつて寂境に達するといふことは、中々にむづかしいことらしいのである。形が短いだけに中身も純一でなければならぬ。二十年句作を勵んでも遂に寂しさの何物をも窺ひ知らないひとには、やはり一句をも世にも自分にも殘すことができないだらう。發句を書くほどの人物の文章は自ら姿はちがつても一世の名文家であるにちがひない。それを機會なくして書かずに終つても嚴然と一作の發句がこれを天下に示すことゝ一般である。單なる發句でもその背景が大きく深い文章に根をもつてゐることは、古來の俳人に比べ見ても首肯れることである。

# 俳道

自分はこの頃詩を書いて見ても段々短くなつて殆三四行のものしかできないつてしまつた。それなら發句を書いてゐたら、よさゝうなものだが、やはり時呼吸が以前のやうに永くつゞかないで、たまに書くものは發句のやうな詩にな折詩が書きたくて書いてゐる。しかし發句とは、べつに變つたところがない。自分はもう詩なんぞ書くよりも發句でも書いて、折々の閑雅の心遣りをしてゐた方が餘程よいと思ふやうになつた。そして若い人たちの詩を見るとやはり自分の書いて來たことが繰り返されてはゐるが、どこかに變つた心もちや色があらはれてゐる。

そしてわたくしに取つては詩も發句も同じいものにならうとしてゐる。詩が何となく西洋風であるに較べ發句が古雅な傳統の上に建てられてゐることも、わたくしには新鮮な詩情であつた。わたくしに取つては發句が單なる發句ではなく、詩を捨てゝこの道に入つてゆくことは、やゝ微かな悲壯の感じがしないではなかつた。詩は幼年のわたくしを育てたが、發句は青年中期のわたくしにふたゝび新しい道草をつませてくれるのである。自分は詩に飽かないうちに書きたくなくなり、發句の精神は氣質からすでにわたくしに向いてゐるやうである。それゆゑわたくしの發句は私一人にとり、中々に重要なことで、たゞの閑暇つぶしや餘技の類ではない。すくなくともわたくしの今の年齢での何も彼も籠らせたものでなければならぬ。形式は古くとも悟入の新奇さに驚き勇むこゝろは、過ぎし日の詩情をさへ捨てた壯烈さをもたなければならぬ。まして世上

一介の俳人として立つことを潔しとせぬことは無論である。

芭蕉のさびしをりを慕ふてもわたくしにはあゝいふ暮しはできない。あゝいふ暮しは芭蕉だけに亡びていゝ生活である。たゞわたくしの考へることは發句でも書いて、それに暮しを支へるやうな收入があれば、むろん私はその生活に從くだらうといふことである。だが今の世は句作でくらせる譯のものではない。蕪村でさへも繪を書いて生活の資を得て句作をしてゐた。わたくしは悟入の暮しをする前には充分に世上との應酬をもしなければならぬ。さういふことに慣れてゐるわたくしには何でもないことである。人は好きに心を馳せるためには仕事はしなければならないからである。

わたくしは古色蒼然たる一句を愛してゐる。古いほど新しい句が好きである。それゆゑ、いまある新傾向といふものに不賛成で、自分一人の意向としては蕉

門の風習を侘びることを望んでゐる。かれらのねらひはさすがに二三百年の向ふを睨んでゐた。動かない所に居たことは今日芭蕉、丈草、去來、嵐雪、または蕪村・一茶などを騈べて見れば判然とする。ともかくかれらはそれ〴〵に違つた氣もちにゐたにせよ、睨みの中に一本の道がずつと今まで續いてゐたことは、彼らの身も心もそして己々の道を磨くためには、みなさびしをりにかしづいたゝめでなければならない。にらみにさへ永い將來の遠さを見てをれば、詩も發句のあたひも矢張り持ちこたへるにちがひない。眼前會炙の粗景に輕々と心を動かすことは考へものである。

金澤に一年ゐたころに風呂に入りながら、屋上を敲くあられの音を聞いたことがあつた。風呂桶に沈み込んでゐると二粒三粒、煙突の穴から落ちて來て、仄暗い灯に冴えて見えるのが、發句めいた風景で忘れられなかつた。冬の日の

黄ろく濁つたのが障子に射す東京の我家の風呂場にくべらて、どれだけ冬らしい氣もちだつたか分らない。――

自分は前栽に一つの筧を引いて一滴の音を聽いてゐるが、水音といふものは春よりも夏秋のそれよりも、冬深く葉の落ちたところに聽いてゐると、一層の閑寂さが感じられるやうである。火桶を擁しながら賣文の埃をあび、喘ぎながらゐるときに水音を聽くのは一陣の淸風を身にあびるやうなものである。しかも今朝は池の上に氷が張り筧さへ凍りかゝつてゐるが、水音は半ば涸れながら落ちてゐる。池中の魚は姿は見えぬ。笹の葉はその縁が枯れて蕭として霜をあびてゐる。自分は俳道といふものゝ姿を見たやうな氣がして氷の融けるのを待ち佗びた。俳道の底にもこれらの一滴が落ちてゐて四方枯れた野山に通じる一本の筧があるのではないかと思はれた。筧の水は溫かく氷を上の方から融かし

てゐる。

いまから思ふと自分が國にゐて冬の涸れた川原にちよろ〳〵水の流れてゐる幽遠を考へると、まことに天下の冬を領してゐるものであつた。瘠せた山々からやつとしぼり出されたやうな流れが、果もなく續いて、白い石と石との間を縫ふてゐる。石の上にはみな雪をいたゞいてゐる。水は暗く音は寒い、――自分は俳道の底をさぐり當てた思ひで、何度もその景色を眺め讃嘆した。この幽遠をつらぬいてわたくしに何が走り過ぎたか。――わたくしは遂に何も考へないで歩いた。これらの風景は果して人間に入用なものかとさへ、わたくしは乏しい自らをかへり見た。

その時も考へたことは唯一つ俳道成りがたく、己の心至らぬことであつた。まだ、さういふ風景にしたしむには年齡が若過ぎはせぬかといふことゝ風景に

も年齢をとらぬと、入ることのできないものゝあることをも沁々思ふた。風景はすでに百歳のよはひを帶びてゐた。あるひはもつと年取つてゐるかも知れない。かりにさうだとすれば私はあまりに若すぎると思へたのである。

## 詩と發句に就て

特に職業的俳人や即興的詩人の輩に依つて區別される發句や詩の單なる形式的識別は、自分には最早問題ではない、――自分の問題とするところはそれらの根本の嚴格さを引出すことにあるのだ。

發句といへば、さびやしをりを言ふのは、例令それらの言葉の存在があるとしても、直ちにそれに依つて片附けてしまふことは間違ひである。要は嚴格な、

高い、登り詰めてゐる氣持を言ふに過ぎぬ。我々は我々の最高峰を攀ぢ登ってしまふたところで、最う一度何物かを搔きさぐらねばならぬ。詩が感情的風景の域を脱してゐることは勿論、詩はそれらの上に立つ最早雲表的な氣稟の激しさから登り詰めた何者かであらう。——

## 遺傳的孤獨

元祿の作者の中で特に選ばれた丈草や凡兆は芭蕉と共に自分らを打つのも、かれらの高峰が俗手の柢觸外に立つてゐた爲であらう。ホヰットマンやヴエルレエヌの詩風は詩風の一存在として、特に僕らの青春を襲ふて共鳴してゐたのも、最早今日の僕らをしてたはいないものとして眺め飽きたのも、僕らの成人

を意味する前に既に僕らが奈何に彼らよりも、より烈しい東洋風の孤獨とともに在ることに耐ゑる、千古不拔の遺傳的詩人であつたかが想像されるであらう。

西洋人は遺傳的に孤獨の外の人種であり、性情に孤獨の巣をもたないやうである。稀れに露西亞人にある北方的憂鬱の氣質は、トルストイやドストエフスキイの器に盛られたとしても、東洋風な、淡さりした孤獨の城を建てることを知らない、――發句が幾たびか英譯されてゐながらその十分の一すら味ひ甘み(うま)を傳へることのできぬのは、民族の遺傳的風習や生活様式の相違ばかりではない「分りかねる」ものが未來永劫にまで「分りかねる」ことであり、解らうとしてもその解るべき性質を根本から失ふてゐるからに過ぎない。

# 骨格

文章去來許六支考の徒は隱れなき文章家であるが、ひとり一茶だけは文章家の一歩前の小說家の俤を持つてゐる。風流韻事の文よりも人生のむづ痒さにふれたものに一茶の小說家としての腕が匿されてゐるやうである。韻事を遣るに家庭のいざこざに惱まされた俳境も、鶴下りて一倍さむき野菊かな、の句境をねらふた一茶であることも忘れてはならない。一茶が小說家として仲々に味をやる文章はその中身のなく〳〵しさに、かなり突き込んで書いてゐる。「……人離れたるあさら井のかたはらに、髮のつやゝかなる女の紅のたすき今樣にかけなして、さそふみづあらばとばかり打けはひつゝ、たゞひとり絲を染侍りき。

かしこに咲る杜若のたぐひ折からの風情を添へ、雲井をかける時鳥も是がために戀ひわたるかと思はれて、又なくあだ〳〵しき面さしにぞありける。……えせ法師がやけ野の雉子のぬす立足してとあるもの陰に忍びより、ひたすらそなたをかいまみけり、やがて女もうなづきつゝそこら見廻して口をむく〳〵して淡めくものを掌にはきて卯の花咲る垣の間よりさし出しぬ。法師その淡めくものをペラ〳〵舌先のあるゝばかりなめづりつゝ、日ごろのねがひかなひたるけしきして、おのれもかたのごとくさし出しぬ。女も法師が手のひらのあはをおいらかにすゝりけるうちに、主の聲のほのかにしければ、女のめくばせに法師はひそ〳〵と逃てけり。……」

現今の文章小説としても新味があり、後れたものではない。「卯の花咲る垣の間よりさし出しぬ。」などの手法は發句の手法そつくりであるが、また入念な文

章でそつがない。

次の間の灯で膳につく寒さかな、この一句を見ても一茶の骨格が既に小説的であることが解る。一脈つんざいてゐるものに暮し向きの辛酸がひゞいてゐる。一茶の句は殆ど家常茶飯に材を得て、俳味にして餘りに苦々しく皮肉で辛酸である所以である。一茶がなぜ後世をたのむ小説を書かなかつたかは兎も角、隱然たる小説家の骨格をもつてゐたことは過りないことである。

# 句解

# 再び凡光に就て

——凡兆と他の作家とを較べて

蕗の葉をへだてゝ見るや這ほたる　凡兆

蕗は廣い美しい綠の葉をもつてゐるものである。この場合は何となく蕗の畑のやうに思はれる。畑でないまでも、むかし畑であつたやうな蕗の簇生したところで、あたりは人家はありながら庭の廣い近隣つづきの裏町あたりの景色であらう。

蕗の葉には早や夕つゆが下りてゐる。そして螢のあかりが葉越しに消えたり明くなつたりするごとに、蕗の葉の綠の色さへ仄かに感じられる。どうも莖に

近い何かの雜草にゐるやうに思はれる。螢はひかり乍ら歩いてゐる。――蕗といふものは廣い葉をもちながら妙に女性的なやさしみを持つてゐて、螢との情景が一そうしつとりとあらはれてゐる。その夕つゆの冷さが掌に感じるやうである。

白雨に走り下るや竹の蟻　丈草

この句なども、夕立のありさまが、まるで眼の前に見えるやうである。蟻が驚いて走つて下るのが今の世でも左うである。凡兆の句はこの句にくらべると、一そう、はつきりと好い手法を持つてゐることが解る。

砂川や夕がほのある屋根の上　凡兆

砂川は砂の多い、乾いてゐるところは白く、濕つてゐるところは飴色の、水戸口に近いやうなところであらう。砂は淸楚な感じのするものであるが、一面

さびしい趣の深いものである。その岸に町から離れた家が土手よりも低く建つてゐる。貧しい感じよりも鄙びいた感じが深い。贅澤では建てられぬ一種の荒涼の氣はあるが、野趣と風雅に富んでゐる。その屋根も栗板か茅葺で、庭さきの夕顔が日あたりの方へ蔓を伸し、屋根を覆うてゐる。そして夕顔がぼんやりと咲いてゐる。

砂川の感じが夕顔によく似合ふてゐて、隙間がない。夏の夕涼みらしい匂ひが夕顔のやうに匂ふてゐる句である。

夕顔や白き鷄垣根より　其角

この其角の句にも野趣があり、村はづれの情景がうかがはれるが、夕顔の花の蒼白さに白い鷄を配したのは、いかにも派手な其角好みの句である。凡兆は幽遠に近い情趣をもつてゐるが其角の句は油繪のやうに淸らかな畫趣を描き出

してゐる。自分はこれらの句を比較しようとするのではないが、同じい句の心が時には斯樣に隔たりを有つてゐることを珍らしく思ふのである。其角は一讀の後にすぐ感じを取ることができるが、凡兆はさうはゆかぬ。そこに何かかすけさがあり、たゝずまひがある。さびしさは凡兆に沁みついてゐると言つた方が多い。

五月雨に家ふり捨ててなめくじり　　凡兆

これはまだ凡兆が京都へ移住しない前の金澤で詠んだ句であらう。或は故郷金澤の景色を想ひ起した句であるかも知れぬ。

雨の多い金澤の町家には、予の記憶するだけでも、住み捨てた柱朽ちた家がある。借手もなく蝸牛やなめくじりの這ふのにまかしてゐる家がある。さういふ情景を詠んだ句である。陰氣な物すごさを持つてゐて人生味のある句でもあ

る。雨がけふも昨日もふりそゝいで、板戸も飴色にぬれ濕つてゐる、家の中は仄ぐらい、誰が住みすてたものであらうと近寄つて見ると、戸の走らぬ閾の上に銀灰色のあとを引いたなめくぢが一疋、動くともなく這ふてゐる。——「家ふり捨てゝなめくじり」と一息に詠んだところに、ものすごさが誇張されずに大きな物語になつてあらはれてゐる。

なめくじりといふのは、なめくぢで、りと引くのは加賀地方の方言らしいのである。この場合、なめくじりと五字でをさめたのは効果の上で、じつくりと落着いてはまつた感じである。

洗ひ屋の藍の濁りや五月雨　許六

この許六の句には美しさを現はさうとしたところがある。洗ひ屋は紺屋であらう、その溝川の濁りが五月雨に交つて流れてゐる氣もちであるが、情景に深

みもなく淺い、そのあさあさしたところは捨てがたいが、好い句とは思はない。

ひめゆりやちよろ〳〵川の岸に咲く　凡兆

この句の素直さ優しさにくらべると、何とも云へず我等の心がそれに適かぬ日常を恥ぢるくらゐである。

草芝を出づる螢の羽音かな　丈草

さすが丈草のかそけさが出てゐる。ひめゆりが小さい流れに咲いてゐるだけである。それを淡々しい筆つきで一刷こころみたところが好い。あとに何も書かずにあるのも好い。

丈草の句は晝の螢でないかとも思はれる。羽音はすこし無理ではあるが、ねらひが羽音にあるよりも道を歩いてゐて、ふいに立つたそれを言つたのである。あるひは夜で、羽音なぞしないものと思ふてゐた螢に存外羽音のあつた小さい

幽な驚きを述べたものかも知れない。

木の下や夜の明けかかる百合の花　浪化

浪化上人は、許六の所謂「浪化者専門主一如大僧正之連枝也」である。句意の據りどころ、景のとり入れ、感じ方も佳い。凡兆の淡素にくらべると甚だ技巧的であるが、予はこの句も好きである。木の間を縫ふた夜あけのあかりに、百花の白いのが咲いて立つてゐる。すつきりと少しも汚れてゐない句で、作者の暮しや朝夕の程も偲ばれて床しい。これらの句のあとで「ひめゆりやちよろちよろ川の岸に咲く」を口ずさんで見ても、すこしもいや味がなく、すぢの正しさ、すつきりとした句がらが思ひやられるのは、凡兆の心のありどころが落着いてゐるからであらう。

せり上げて苔をこぼす葵かな　凡兆

葵の花は眞夏の暑い日に咲くもので、一本の花莖に數十の蕾をもち、下の方から咲き上るものである。かつと照り榮えた紅い花が順繰りに下からせり上げせり上げて開くものである。

せり上げて莟をこぼすと詠んだのは、その建築的な旺んな花をうたつて餘裕をもたないところである。張り切り、强さ、壯麗さをふくんでゐて一歩も引かない。發句としての背丈が一度伸びて又ぎゆつと引締まり、葵かなと結んだところは、凜乎とした風采をもつてゐる。その句作の心の張り切つたところは胸を張つた人のやうである。立派さも類ひなく美しい。凡兆の句は少ないがその少ない作のうちで、この句など新しさから言つても、今の人の句のやうである。

杉なりにせり上りたる田植かな　　丈　草

山の中の杉の木のある段々畑である。ひとむらの杉の列があるごとに、田が

一枚づつ峯の方へ高まり、高まるごとに田が狹くなつてゐる。暗い杉の木をぬふて田植の若い綠が冴えて見える。せり上りたると言つたところに句の勢ひをうかがはせてゐる。一味の陰氣さはあるが、それとは別種の明るさをもつてゐる句である。丈草のよくねらふところである。さびしく明るく、さらにさびしく現はすところは、丈草ならではと思はれる。

凡兆は大がいの場合に景物にしつかり喰ひ入つてゐることは、葵の句で解るが、その他、「山寺の簀の子も靑し冬がまへ」とか、「しぐるゝや黑木積む家の窓明り」とか、「灰捨てて白梅うるむ垣根かな」などに著しい。何とも云へぬうまみが名工の鏤刻のやうに纖く、類のないいみじさがあらはれてゐる。尋常一様の句作家に葵の句のごときものが、詠めるものではない。奧の奧、髓の髓、底の底から沁み出た清泉一滴のこころづかひである。凡手の及ぶところでは

ない。

渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆

小さい流れであらう。村落などにある小川に違ひない。――目高が列を亂して逃げたあと、さゝ濁りのした水が少しばかりの動きを見せてゐる。よく見ると青い藻の中に花が着いてゐて、その靜かさは一入である。かういふ幽雅な境致である。

渡りかけてと云つたのは、二た足三足踏み込んだ小さい橋であらうが、これは或ひは素足で渡つたのではないかと思はれる。どちらでもよい。

藻の花や小舟寄せたる門の前　蕪村

小舟をつないであるところの景で、流れはよどんでゐる。それが人家の門の前であるからには、何となく藻の花に雜つて埃や芥が捨てられてある人間の生活

に近いさまが思ひやられる。渡りかけての凡兆には、何かまだ清さが流れにあるやうに思へるのである。一たい、藻の花は迅い流れにはすくないものである。

汐引て藻の花しぼむ暑さかな　　兇竹

これは俳句の仕上りの手綺麗さが著しい。それに潮が引いて藻の花のしぼむのが、哀れである。幽なはかない思ひを催させる句である。凡兆のは眼の前にありありと眺めてゐるのだが、これは手綺麗さはあつても、机上の作の感じが鋭い。しかし仲々棄てがたい句である。唯、暑さかなが利いてゐるやうに思へば思はれるが、わざとらしいと思へば故意とらしくも思はれる。しつかりと地についてゐない感じである。

この他、凡兆の夏の句だけでも、佳い句が多い。殆ど一粒選りだと言つてもよい位である。凡兆は其素材や好みにも凝り屋であつたらしい。

日の暑さ盥の底の蟆かな　凡兆

すゞしさや朝草門に荷ひ込　同

髮剃や一夜に錆びて五月雨　同

市中に物の匂ひや夏の月　同

川上や潮つき戻すほとゝぎす　同

題去來之嵯峨落柿舍

豆植る畑も木部屋も名所かな　同

「髮剃や一夜に錆びて五月雨」の句の如きは、鬱陶しい五月雨のころが、錆のやうにありありと、懈く感じられる。その間に走る一味の凄み鋭さ、考へ方の深さが今さらに凡手でないかれの力量の程が思ひやられるのである。

去來の落柿舍に題した、「豆植る畑も木部屋も名所かな」も、短冊にでも記さ

れて殘つてゐて、それが予の手にでもあつたら、予の喜びは一通りではない、――しかし不幸にしてまだ凡兆の短冊を見たことがないことを遺憾に思ふてゐる。その妻の羽紅も、女性らしい優しい句作を殘してゐる。凡兆下獄の後も貞淑であつたらしく、羽紅尼と號して容色も千代女の如く醜くなかつたらしい。その羽紅といふ名前からして優しい女性を思はせるやうである。

## 丈草の句に就て

寢がへりの方になじむや蟋蟀　　丈草

寒けれど穴には啼かずきりぎりす　　同

ひと睡りして眼をさました。肩のところに凉しすぎるくらゐの、むしろうす

寒さを感じる、夜具を肩のところに當てゝ見たが、夜はまだそれほど更けてゐないやうである。くるつと寢がへりをして未だ油の利いてゐる行燈の方に向いた。となりの間はすぐ勝手で、枕もとの雨戸のそとは露の深い夜寒の頃である。石の下にでもゐるのか夜更けになると益々冴えるきりぎりすのすだく聲が、しきりなしに啼いては止んで別の聲まで交つてゐる、――一體何疋くらゐ鳴いてゐるのだらうと聲の變つてゐるのをあてにして讀んで見ても、入り亂れた聲は何疋だか分らぬ。あゝいゝ聲だと思つた。寢入りばなはそれほどでもなかつたのにと思ふ。

秋の夜半に誰でもこんな親しい氣もちのする晩はあるものである。そしてその事は何んでもないことではあるが、淸夜聽蟲といふやうな古風な、實にも淸淸した心の溫かい氣もちである。わたしは曾て市井の陋居にゐた頃、能くこん

な蟲の音いろをきゝ分け、社會主義的な思想を自分から追ひ出したものであつた。いまは雜念を排するに努めると云つていゝ。丈草法師のこの句は全くしみじみとしてゐる。その他「寒けれど穴には啼かずきりぎりす」の句もいゝ境致を詠んでゐる。穴のまはりには夜の明りがさそひに來て、きりぎりすは旣う宵の程に穴を出てしまつたのであらう。草の葉は夜のいろと同じい漂ひをしてゐる。しかも寒さはとくに過ぎたお彼岸のころからひと晩ごとに加はり、星や月のあかりも透つて美しく冴えてゐる。併し何となく噓をさそふ寒さがきり〳〵と離み込まれてゐるやうな夜である。わたしはこの句も仲々うまいと思つた。「穴には啼かず」と云つたところに子供らしい稚氣がある。法師の心のほども窺はれていゝ。

鷄頭の晝なうつすやぬり枕　　丈草

或る閑寂な庭に縁側のない座敷がある。庭には鷄頭が三四本立つてゐて、隣りの垣根から射す日ざしが當つてゐる。作者は晝寢からさめ一杯茶をのんで、睡り足りた氣もちで茫やりと庭を眺めてゐる。秋も一日づゝ深み増りゆくやうな穩かな日和である。かれは下駄を引つかけて庭へ出て見た。土はいゝほどにつやのない濕を帶び、ひる下りといふのに露のけはひさへ感じられた。

かれはふと座敷を見た。そこにぬり枕がうつすりと日ざしに赤い鷄頭の花を映して、何か深い趣きがこもつて見えた。先刻から睡つてゐるうちにもかうして鷄頭が映つてゐたのであらう、あまりにおあつらひ向きの景色ではないか？

——作者はしばらくしみ〲とその花に見とれてゐる。

うづくまる藥の下の寒さかな　　丈草

「芭蕉翁の病床に侍りて」といふ前書がある。

芭蕉翁の病床に侍してゐるつれ〴〵に師を慰めるため、木節、乙州、其角、支考、惟然などが句をものしたときの句である。「花屋日記」には、

「一々惟然、吟聲しければ、師、丈草が句を今一度と望みたまひて、丈草出來されたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは嗄れし聲もて讃めたまひけり。」

と書いてある。つね〴〵芭蕉も丈草にはそのさびしをりには深く心をとめてゐたものと見える。しかも芭蕉が屬曠につく四五日前のことである。小說家芥川龍之介君の「枯野抄」には丈草が芭蕉臨終の際の姿を敍して、かう書いてゐる。

羽根揚子はその後にゐた丈草の手へわたされた。日頃から老實な彼が、つゝましく伏見になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、靜かに師匠の脣を沾してゐる姿は、恐らく誰の眼にも嚴だつた

のに相違ない。……後略

……あの老實な禪客の丈草は、芭蕉の呼吸のかすかなるに従つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで來るのを感じた。悲しみは元より説明を費すまでもない、がその安らかな心もちは恰も明方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやうな、不思議に朗な心もちであろ。……後略

これは丈草を描くために丈草の心もちに入り込んだ、龍之介君の穩かな描寫である。わたしもこれと同じ心を感じるのである。恐らく蕉門ではこの人が一番落ちついてゐたであらう。

藁焚けば灰によごるゝ竈馬かな　　丈草

秋も深くなつたので障子を外して置いたのを閉め、簀戸を納屋に移した。そして一冬の藁を焚かねばならぬ。それ故、毎朝一束づゝの藁を焚いては火桶に

配ることにした。そのころのうそ寒さを慕ふて來るのか、いとゞは、竈の下や外かゞりや、そこらに積んである冬瓜の下にもぐり込んでは、夜はほろ〳〵と啼いてゐる。この二三日その聲さへ低うなつたやうに覺える。しかも今も飛び出したいとゞはからだに灰をあびてゐる。每朝藁を焚いてゐる故だなと思ふ。あはれ深い句がらである。これくらゐ幅と丈と深さとがどつしりと肉づいてゐる句は、たうてい今ごろの人には吟めない。禪僧といふものはそれらしい臭みを持つてゐるものだが、丈草にはそれが毛頭ない、めでたき限りである。

## 北枝の發句

山吹やこぼれて泥に上かはき　　北枝

居りかはる羽音凉しや枝の蟬　北枝
蟲ぼしや幕をふるへばさくら花　同

さすがに北方の逸士と云はれただけのものを持つてゐる。「居りかはる羽音凉しや枝の蟬」のごときは二百年の間、喞々として紙魚の食つた寫本の間に夏をささやいてゐる蟬である。「居りかはる」と出たところや、その新しさは我ら後人もなほ學びえざるところである。「居眠辯」に記して「世にいふ翠臺の北枝は、萬事ねむるにたへたりと、花にそむき眠るにはあらず、月にそむきて眠るにもあらず、月に對して覺るにもあらず、唯よくどこでも眠るなり」と醉北枝は言つてゐる。しかし「蟲ぼしや幕をふるへばさくら花」のごときは、作者自身はあどけなく詠じ過ぎたものであらうが、夏の日、蟲干しの折のさくらの花びらを見ることは、秋にも增してあはれにさびしいものである。しかし此の「さく

ら花」の句は北枝の句でないことは明かであるが、しかし此處で疑義を挿んで置く。北枝の句でないにしても仲々好い句であることは否まれぬ。それらの句で見ても、我が北枝の眼光は仲々幽遠の境を睥睨して餘すところ無いやうである。

有明や光おさまる桃の花　北枝

池の星またはらはらと時雨かな　同

許六の作者列傳に據ると、「北枝者。加州金澤人也。業磨工。見蕉翁好風雅。北方逸士也。」と云ひ、蕉門十哲の一人に數へてゐる。

# 句評

# 一茶の發句

みぞ萩や水につければ風の吹　一　茶

旅日記の中のこの句は珍らしく靜で、あぢはひ深い。みぞ萩といふのは普通の萩よりかたけの低い些細な流れなどに生えてゐるものである。溝萩のことであらう、そと歩きをして一叢のみぞ萩を折つて家苞にし、それを手桶に挿し水を吸はせた。或ひはほどよい霧を吹いたかも知れない、ともあれ、凋れかゝつたみぞ萩に一脈の生氣がのぼつたと見え、花のいろも氣のせいか冴えてりんとした。野にある花はしをれやすいものであるが、ようも斯様に呼吸を吹き返してくれた。氣がつくと勝手の戸が開いたまゝ、北南の風が爽かに入つて來て、

この可憐の花をうごかしてゐる。

句の意味はこれだけであるが、いかにも味ひに生きたところが深く、花の氣もちをえぐり出してゐる。一茶としては珍らしくいゝ句である。わたしはあまり性格的な一茶の句は好きではない。却つて沈み込んだときの一茶に幽寂を感じることを一茶のためにも、且つ私の好きを漁るためにも採るのである。

鶴下りて一倍寒きのぎくかな　一茶

肌さむい朝冷が深くなるころである。

野原に出ると下葉の枯れた野菊が咲てゐる。莖がよほど骨立たしく硬くなつてゐるので、折りながらも今さららしく秋深いことが感じられる――するとふと目についたのは白い一羽の鶴が下りてくる姿である。雪のやうに白い、鋭いくらゐの感じである。しみじみと眺めてゐるうち、むしろ冬近いやうな氣がし

て來た。遠山には雪のひかりが潜んで暗鬱な景色といふより、どこか透明な風景である。「鶴下りて一倍寒さのぎくかな」――どこか玲瓏とした氣品さへ帶びてゐる。

この句は文化元年の作で、そのころ鶴がかなり日本に來たものらしかつた。一茶は實際にこんな景色を見たかどうかは予の與り知らないところであるが、机上の發句としても或る凜とした氣品をもつてゐることは、けなげにもめでたいことである。「きりぎりす隣にゐても聞えけり」の句は一茶の洒落の風致をほのかに優しく覗かした寫生句である。句は讀んで字のごとき意味ではあるがいかにもきりぎりすらしい句で私は好きである。單なる發句といふものを平俗に解釋しても、この句などは普通の讀者にもよくわかるやうな氣がする。

夕月や流れ殘りのきりぎりす　一茶

洪水の時の句である。

陰慘な出水のあとの雜草が泥にまみれて、地に伏してゐる。中には頭を擡げた穗のある草などに、ところどころの泥水の溜つたところがある。人の氣を沈ませるやうな夕月が早上つてゐるが、まだ宵淺いきりぎりすが彼處此處に淋しく間斷を置いて啼いてゐる。こんな景色をながめると人々はも一度出水のおそろしかつたことを思ひ出す。それにしても夕月のすつきりした色はどうであらう。まるで何事もなかつたやうに穩かに澄んでゐる。いま啼いてゐるきりぎりすも大方流れ殘つた木の上か、丈高い草の上でなければ人家にでも匿れてゐたのであらう、何ともいへないしをらしい聲を立てゝゐる。——

思ふに夕月といふからには、宵淺いころであらう、しかし句の姿からいふと何となく更けてゐるやうな鼠色の暗が思ひ出されてならない。

あさぢふや茶好になりて朝寒き　一茶

朝寒くなると火のそばに坐るのが樂しくなる。夏の間から火に遠のいてゐた氣もちが、四五日前から沁々と爐のそばを戀ふてゐる。そして湯を沸して茶を淹れて朝ごとに飮む。あまい澁い煎茶の濃いのが起き出たからだに、えもいはれず爽ばりと美しい氣もちにならせる。家のものもまた友だちなども茶好きである。自分もたうとう茶好きになつたやうである。霜にはまだ〳〵間があるが朝ごとの寒さは時にぴりつとくるやうである。素足の冷えはきのふよりもひどいやうな氣がしてくる。あさぢふも頭も垂れるほど露をふくんでゐて、下葉は落ちつくしてゐる、哀れを感じてならぬ。

一茶は貧乏だつたからなほ一杯の茶も、その用意のあつたときには戴くやうな氣もちで飮んだのであらう。貧しいものは些細なものにも複雜な感情で嬉し

がるものである。江戸にゐたころの彼はひどく貧乏してゐたから、朝ごとの喫茶さへ一茶には美しいよろこびであつたにちがひない。——こゝにあさぢふを加へ點したことも、並々ならぬ秋の深さを思はせる。すこしも濁らないすつきりとした朝の心をそのまゝうつし出したものである。

小襖にかれのの雨のかかる也　　一茶

町はづれの家でなければ、座敷からすぐ野に出られるやうな家である。風は吹きぬけてゆく、そのたびにざらざらと砂埃を感じるのだが、秋が闌けてから砂ほこりはない、だが時とすると障子のすき間から、あまりに荒涼とした野の姿が見えるので、さむしさは一入である。

けふも折あしく雨がふりそゝいで、風がないのに座敷の中へ吹き込んできてならぬ。障子を閉めてから氣がつくと襖がしつとりとぬれてゐる。いまさらに

野の枯れたありさまが蕭條として目にうつつてくる。——

野はかれて何ぞ喰たき庵かな　一茶

厠へ立つとか庭へ出るほかは滅多に縁側へさへ出なくなり、野の眺めは甚だしく蕭條としてゐる。子供らの遊ぶ聲さへあまりしなくなつた。朝も夕方もいつも同じやうな穩さ、靜さはあるが、その中に雲が走つて見えるやうな荒涼さが佇んでゐる。四五日前に降つた雨で水溜りができてゐて、枯れ草がその上に垂れ込んだまゝ、澄んで森平としてゐる。——作者はさういふところに庵をむすんでゐるのだ。そしてさういふ光景にぴつたりと目を据ゑ寂しがつてゐるのである。

時間でいへば晝すぎの三時ころであらう、作者は何か食べたい心をもつてゐた。何となく腹が空いてゐるやうな思ひがしてきたのである。しかし一茶の庵

にはさういふときに取つて置くやうな茶菓子の用意があらう筈がない。
「何か食べたいものだ。」
それは口淋しいばかりでなく、もう少し腹淋しく空いた心である。さういふ空腹の念ひに枯野を見た。あるひは枯野を配したところに、骨身にひどく一茶があつた。かれの發句が予に響いた。野は枯れてと出て何ぞ喰ひたき庵かなと靜かに閑やかなすなほさを現はしたところに「故郷は蠅まで人をさしにけり」などと皮肉るよりも、もつと親しさが予には感じられた。同じやうな句に「木がらしや口淋しいとゆふべかな」といふのはあるが、たうてい比較にならないくらゐに、枯野の句の方がよい。

木がらしや小溝にけぶる竹火箸　一茶

物すごいやうな句である。

朝であるか夕方であるかわからない。

竹火箸は火桶にさしたものではなく、おそらく竈に用ひたものであらう。いつも火箸が見えなくて、竹で火箸のかはりをつとめさしたもので、さういふ意味なれば朝のやうではあるが、一茶のやうな不規律な生活をしてゐては、夕方に飯を焚くことが間々あつたであらう。不時の收入などからよく自炊にはさういふことがあるものである。一茶の場合もこんな時ではなかつたか？――

その飯を焚くのに炭を用ひてゐたことは否まれない、一人者ではいまもむかしも薪の要はない筈である。七輪で炭を起して竹の火箸を用ひたが、そのうち竹火箸に火が移つて燃えた。そして慌てゝ一茶は小溝のわきへつッ立てた。一抹のけむりが上つてゐる――そこへ朝からの木枯しが物すごく落葉を吹きつけては、幾度となく過ぎ去つた。一茶はぼんやりそれを眺めてゐる。何となくか

れが暮しに憔悴れてゐる顏容が見えてくるやうである。つまり生活の中身を剝ぎ立たやうな句であるが、發句だけに物すごさが一段と深く感じられる。

この句などから考へると、一茶は小說をかける人であつたらう、すくなくとも自分だけのものを書き拔ける異才をもつてゐたことは、「ふるさとやよるもさはるも茨の花」の一句にも充分に窺ひ知られるではないか、この句には中々寂しさが籠つてゐる。まづ芭蕉以後の俳人で小說をかける腕をもつてゐたものはこの一茶よりほかにはなかつたらう、それもかなり新しくて吾々に近い暮しを生活してゐたからである。

降雪もはりあひなれや薬竹賣　一茶

朝からの雪である。

竹賣りが一人、道の遠くから步いて來る、その他には人通りすらなく、何と

なく蕭條としてゐる。近づいて來るのを見ると、竹の束のさきにはまだ青いふさふさした笹の葉がついて、それにも雪がまみれてゐる。美しさは一入である。

行きすぎるのを見送つてゐると、いかにも風流げに見える。これを樂しんでゐるやうに思はれる。雪は小やみもなく降り竹の青さはだんだんに遠のいてゆく。見てゐるとさびしくなる。樂しんで賣つてゐるやうに見えるが、まことはさうではないのであらう。――唯、葉竹賣としてあるのは、わたしの考へでは葉が竹のさきについてゐるだけで、他にべつに深い意味があるのではなからうと思つてゐる。それとも何か他に意味があるのかも知れない、知厚の垂敎を乞ふ次第である。

# 夜半翁

冬の日は四季を通じて閑寂な心もちがする。賣文の忙しい閑暇をぬすんで折折俳書などを讀むが、冬の夜などふさはしく樂しみである。

この頃蕪村全集を讀んで、一代の大才蕪村翁が自分の娘を嫁入りさせて安心をしたり、先方の家風をいやしんで又取戻したりしてゐるところで、自分は老いては子を思ふ親を有難くさへ思ひ、小説などを讀んでも感じない不覺の涙感をさへ感じた。蕪村の娘は手のいたむ病氣に惱まされてゐた。あるひは神經痛かロウマチのやうな疾患かも知れない。ともあれ、さういふ病氣の娘をいたはり婚家から取り戻してから、臨終の枕邊にまで近々と一緒に暮してゐたが、その心

は豪邁不羈の蕪村にもあるまじい深い愛し様であつた。人としてかれが世の常人であつたことは誠に好ましいところである。自分は蕪村の句に最もなじまなければならぬとおもふた。芭蕉のさびはなくとも、何か大木の肌に蒼々と蒸しついた苔の壯大をおもふた。

芭蕉は心境の澄むに從つて柔和な顏つきで、いつも平淡に澄んでゐたらうが、蕪村はどこかはぢされる心をもつてゐたらうとおもへる。世上の應酬をも取入れ風雅の道も怠らなかつた蕪村は、何も彼も默つて見てゐた蕉翁とは、人間らしく會へばくさみを感じたらうが、しかし大幹を交へる雨日の老樹であつたにちがひない。

きりぎりす自在をのぼる夜寒かな　蕪村

鮎落ちていよ〳〵高き尾上かな　同

この句の正しい解釋よりも、かれ蕪村がそこに心を置いた落着きが尾上の瘠せた山肌の巍峨たることを思はせる。自在をのぼるは單なる青匹のきりぎりすではなく、肌寒い夜半翁の心の中から出た一匹でなければならぬ。ほの暗い行燈の下に坐した夜半翁は、夜の獅子のやうな靜さで、半眼をひらいて、かすかに耳をうごかしてゐる。――

灯ともせといひつゝ出るや秋のくれ　蕪村

門を出て故人にあひぬ秋のくれ　同

その道を歩いてゆく姿も眼に見えるやうである。寂寞をしつかりとつかんでゐて、離さないところに羊腸たる夜半翁の道がある。

この道や行く人なしに秋の暮　芭蕉

こがらしの地にも落さぬ時雨かな　去來

かれらが同時に物の底に手を觸れてゐることは、既に一家の重い心を建ててゐることである。岩壁のやうに拔くことのできない聳立を持してゐる。

松風の里は糀するしぐれかな　嵐雪

水仙の香やこぼれても雪の上　千代

この可憐な千代尼のこころも矢張たけはちぢまりながらも、眞諦に入つてゐるものと思はねばならぬ。そのほのかさの中に凋然として噴けてゐる一代の心がある。

寂寞はくもの巣のやうなもので拂へども盡きない、また眼にふれるものではない。わけて夜半翁は結局一代の才の終りかけたころには、もうこの蜘蛛の巣をしつかりと見て、手に觸れてゐた。壯麗大機の中に老いてゆく美しさは、夜半翁の生涯にあつた。しかも蕭條の風物にひそむものを取まとめる幽遠をも、

又世帶人情の中に思ひをひそませるものをも同時に持つてゐた。

こがらしや畠の小石眼に見ゆる　蕪村
初霜やわづらう鶴を遠く見る　同
うぐひすの竹に來初めしぐれかな　同
葱さげて枯木の中をかへりけり　同
冬の梅きのふや散りぬ石の上　同
勝手まで誰か妻子ぞ冬ごもり　同

畫俳に放浪したかれの句は、同時に繪ごゝろを含んでゐた。

きりぎりす自在をのぼる夜寒かな　蕪村

は、決して畫俳の種類に落ちたものでなく、念々止まざる夜半翁の時に魂の

息づかひとなつて現れたものである。かれが怪狸に筆硯を染たことはともかく、その「きりぎりす」だけは霜鋭い嚴冬にもなほかれが座右に飛んだものと思はねばならぬ。

## 千代尼

毎日のしぐれや霙にふりこめられ、障子もうすぐらく心寂しく、出でて歩かんに早や寒さきびしき頃なり。せん方なく千代尼の句集など拾ひ讀みせるなかに、水仙の香やこぼれても雪の上、といふのあり。何となくこころ惹かるる句なり。

冬枯やひとり牡丹のあたたまり　千代

朝の日の裾にとゞかぬ寒さかな　千代
はつゆきは松のしづくに殘りけり　同

千代尼は加賀松任なる聖興寺に墓碑ありけり。松任は金澤を離ること二里、北加賀に位する古めかしき一小宿驛にして、名物あんころ餅を喫し千代尼の墓をたづぬる雅人いまなほ絶えず。老栂亭々たる聖興寺の境内にそゝぐ時雨のあめあしを思へば、綺備よからざりし千代尼の、その醜かりしために俳道たくみに風流すぐれたること自ら偲ばるゝなり。享保五年四月十九にして尾山城下、(今の金澤)の足輕福岡彌一に嫁しけるが、そのをりの、謎かろか知らねど柿の初ちぎり、と自ら謙遜しつゝ夫に見えしところ、己れもよくよくみにくゝかりしことを氣にせしなるべし。七年の後夫に別れ、翌年一人しかあらざりし彌市を失ふに至りぬ。

破る子のなくて障子の寒さかな　千代

この句まことに予が好めるの句なり。予の千萬言を冗にせし小説も亦この一句に及ばざるがごとし。異才あり百合を描くに秀でたりと。萬暦の支那に蘭をゑがくに柔しき異才をもてる馬守眞あり、何か相似たるこゝちす。千代尼は世才とも秀でたる俗雅人なるべく、馬守眞亦それに相較べ得るがごとし。ただ千代尼は美しからず、馬守眞は艶麗たる妝ひをもてるがごとく思はる。倖して時雨と霙の松任在に赴き、すなはち此の一文爲る所以なり。

## 涼扇句抄

涼み居て闇に髪干す女かな　召波

下町あたりのまだ宵淺いころである。納涼臺が出てゐてそこに煙草盆があり、蚊遣のけむりが縷々として上つてゐる。二三人が何か浮世話をしてゐる。通りにはちらほらと人通りがあるくらゐで、うら小路のやうなところですこしばかりの空地で二三本の立木くらゐあるらしい。或ひは紺屋の干場になつてゐるかも知れない空地である。車井戸を誰かゞ上げる音がしてゐる。

作者はそこを通りがゝりに或ひは道をたづねたのかも知れぬ。涼み臺の人ごゑのする方へ行かうと思ひながら、小路の角をまがらうとすると、柳か何かの立木があり、そこに床几を据ゑて坐つてゐる女があつた。道をたづねるものですがと言つて、宵淺いとはいひながら充分に熟した闇の中に、くつきりと浮いた眞白い女の顏を見た。女はその道はしかじかの道でございますと言つて敎へてくれた。どうも濟みませんと言つて最う一度女のかほを見返すと、女の髮の

毛がくろぐろと艶やかにうしろへ垂れてゐた。夕方早めに洗つたのであらう、まだ糊の匂ひさへしてゐた。そればかりではない、女は風のくる道に向いて髪を乾かしてゐるやうである。手にある團扇も髪をうしろへなびかせては、春中であふいでゐるやうである。

二三間行きすぎてからも女のもの靜で、どうやら凄艶に近い顏立ちが目にうかんで來て、振りかへつて見ると仄白い藍手の浴衣地が見えるばかりだつた。闇の重つたあたりにはもう顏立ちが判らなかつた。何となく心惹かれるやうな夕景、そして妙に洗髪が強くあたまに殘つてゐる。——

作者はおそらく途上でさういふ髪干す女を見たものにちがひなからう。闇に髪干すが荒彫りでよく感じが出てゐる。凉居てともの靜な出方もよい。「凉居て闇に髪干す女かな」と、もう一度口で言つて見て何か夏の夜のかくれた魂を掘

りあてたやうな莊嚴を感じさせる句である。

川ばたにあたま剃合ふ凉みかな　楚常

もう螢の季節もすぎたのである。螢に騒ぐ子供もゐない川端は、二三日前の雨で一層きれいに澄んだ流れになつて、底の砂利さへ美しく透いてゐる。淺いせゝらぎの風情である。そこに石の段々がある。その石の上に踞んで月代を剃つてゐるのが八百屋の小者である。まだ夕方と言つても暗くなるのに間のある永い夏の日のくれで、石の上に立てかけた鏡にうつる蝙蝠のかげも濃く、空は明るいころである。そんなに廣くない川面であるが、吹く風はひやひやと凉しくほれぼれするいゝ風である。

そこへ經師屋の小者がくる。剃刀は空いてゐるが剃らぬかといふ。では剃り合つて見ようと答へる。かれらは段段の上で默つて剃りはじめる。そこへ又誰

かゞ來合せる。また剃合ふことになる。――この川すぢの家並の人たちはみな川べりへ出て涼むのである。そして口々に剃る人と剃られる人をからかふ。そんなにきれいに身じまひをして誰に見せようとするのだといふ。みんなは笑ふ。しかし永い日のくれはまだ剃刀の刄を見分けることができる。

剃られた青いあたまの男はまた川べりの床几の上に戻つて、何か話し合うてゐる。田舍めいた夏の日のありさまが樂しく目にうかぶ。或ひはこれはどこかの山の坊で、坊主らが剃り合ふのではないかとも思つて見た。坊主だとすれば川もどこか山寺あたりで一段と田舍めいて考へられる。剃り合ふといふ感じは坊主にはいかにも相應はしく想像されるが、しかし剃り合ふことがよくあるから、町の人々が剃り合ふたとして考へた方がいゝだらう。

穿きながら草履を洗ふ清水かな　　北　枝

草いきれのした野路を歩いて來た足の疲れを感じた。孰方を向いても暑い、青田の上に日が照りつけてゐる間に、あちこちに森や林がこんもりと茂つてゐる。しかたなしにまた歩き出した。何度も畦の小川の音を聞いたが喉の乾きを醫すべくもない……。

とある社頭の森かげへ來たときに、そこに美しい清水が滾々と湧いてゐるのを見出した。ほつとしてその冷たい清水を掬んで喉をうるほした。冷たい野の水の味が耐らなくうまかつた。かれはもう一杯それを飲んで、涼しいすこしうす暗い社頭の景色につかれた目を移した。蟬のこゑが夏の眞盛らしく木の頂の遠くに啼いて、それさへ一段と涼しげである。かれはその時或る誘惑を感じた。埃で白い草履の上に乘つてゐる自分の足を、そつくりこの清水に浸したら、さぞいゝ氣もちだらうと思ふた。しかしそれは俗人のすることのやうで氣はさし

たが、湧いて流れてゆく清水を目に入れてゐると、たとへ足を浸してもすぐに清水の濁りは澄んでゆくであらうと考へた。

かれは思ひ切つて草履のまゝ、その清水に足をひたした。かれは草履をぬいで這入るつもりではあつたが、瞬間の、不圖した氣もちからそのまゝ浸つたのである。疲れと暑さでくるしんだ足は呼吸を吹き返したやうに冷たさ新鮮さが沁みこんで、頭腦までハッキリするやうに思へた。かれは平常から足といふものゝ幸福さを考へてやらなかつたことを思ひ出して、いま涼しく喜んでゐる足の仕合せを興深く覺えた。玉砂利が足の甲の上に觸れては流れた。

作者は「草履を洗ふ」と言つてゐるが、それよりも隱れた氣もちを自分は採るやうにした。功利的な「草履を洗ふ」氣もちの內側に作者の句意があるのだらうと考へても見たからである。

網打の見えずなり行く凉みかな　蕪村

川べりの石垣の上に腰かけて凉んでゐると、山瀨といふ凉しい風が吹き下りて來た。川はかなり大きい流れで鮎などがゐる川だ。ふと氣がつくと磧に人かげがしてゐるが、暗くてよく見えない、――しばらくすると瀨の上に網を投げる音がした。やはり今の人かげは夜網を打つ人らしい。よく見るとその人は瀨の上の網の下手にかゞんで、鮎を透して網の目を見てゐる。幾尾かをつかまへたらしい。

凉んでゐる人は何か聲をかけようとしたが、瀨の音に洗はれてしまつて返事がなかつた。そればかりではない、夜目にも白い磧の渚づたひにその人のかげが次第に遠のいて行くやうである。たゞ投網のざんぶりと水にはまる音だけが折々瀨の音よりも一そう凉しくきこえるばかりであつた。そしてこれらの情景

は單に暗いと云つてもほんのりした星あかりの漂ふたほの暗さである。石の白い川原のほとりに見える人かげが、さながらに浮ぶやうな句である。

## 水　扇

夏の飲みもの食ひものにさまざまあるべし。

蒼顔の果も見えけりところてん　許六

清瀧の水汲みよせてところてん　芭蕉

されど紅塵裡水道に冷したるところてんの色いたづらに磨り硝子のごとかれど、夏日暑さを鎖するの料にはあらず。

アイスクリームに添へたる短冊形のせんべいのあるは、大方の諸君子の知るところなるべし。されどあれは何のために添へられるかを知らざる人多かるべしと言へる友は、まづ短冊形のせんべいに盛りたるアイスクリームを裏返しにして、口中上あごにぢかに冷たきをあてざるためなりと言ひぬ。ことの眞僞は知らず、故あることかなと思ひぬ。

碓氷山上、碓氷村に碓氷川の源泉あり。冷たき泉のふくれて湧き盡くるときなし。予、その泉を掬ひ味ひけるが信越線熊の平の水よりも數等つめたく、永くは手を浸すことあたはず、美しさ心神を透明になす。頭底輕井澤の水と較ぶべきものにあらず。

されど輕井澤の水も冷くて洗面に耐へざるものあり、予、ひと夏をここに暮

して歸京するとき、つねに魔法罎の中に一杯ををさめ、東京に持ち歸りて家族にすゝめしことあり。今夏、ひそかに思ふらくは此の高原の水を沸かしめ茶を入れんには、一そうの山水の味沁み徹りて茶の味天外のものあるべしと。

水飯や簾捲いたる日の夕　紅葉

紅葉の句は派手にて好まざれど、この句意また後世をたのむべきものなり。水飯とは夕方どき清水をもて洗ひ濯ぎ、飯一粒づつの芯に冷たさ沁みたるころ、清き漬物にて食すべきものなり。むしろ盛夏のころより、こころもち秋近く暑さ仲々に烈しきとき、一夕の水飯の心、哀しとはなして食すべきなり。

瓜は鄕里にてみのうりと云ふ。

山の茶店、海近きところの茶店、それらの堀拔き井戸に五つ六つ浮べ冷した

るありさまの、仲々に俳味の姿あり。行商人ら集ひその肌に庖刀あつるを見れば、古き木版畫の景色さながらの、川楊のかなたに一帆おもむろに過ぐるを見るなるべし。東京の瓜は白かれど郷里にては黄色の肌に縞のすぢ走り、大きさ一と握りのあまりあり。子規の「瓜二つ重たさうなる禿かな」といへる句の、こころまたなしとせず。されば郷里の童子らのその瓜のおもてに、眉目鼻を描き、みのうりちやうちんとはなすなり。または梅雨明けの夕方には泳ぎ遊ぶ子供のために、その生れ年月を書き、すつぽんに命とられぬやうにまじなひするため、大川に供養流しを敢てするなり。

朝露によごれて涼し瓜の泥　芭蕉

瓜の句、さまざまに讀みふけりしが、この句ほどすがすがしきものはなし。これ、いまの人の句のやうに新しきなり、誰か二百年前の瓜と思ふものぞ。芭

蕉はものの奥や深さに手をさぐり入れて、あたらしきものをつかむ人なり。この人の狙ひのていねいに落着きたるありさま、感嘆の外なし。
その他瓜の句の、わが好みしをあぐれば左の二三なるべし。

旅人の枕に瓜の匂ひかな　浪化
瓜喰に松蔭せまき日なたかな　李下
葉がくれなこけ出て瓜の暑さかな　去來
大垣は夜明になりぬ眞桑瓜　眠石

夏に氷あり、氷室といへるものあり。享保版、「江戸砂子」によれば「六月朔日、氷室の祝、賜氷節と云、おほやけに氷を召す事あり、それにしたがひて地下にも氷餅、又、かき餅やうのものを食す。」とあり。いまの世の姿うつりて人

造氷とて機械にてつくるなり。その氷の緣起に曰く、
「仁德天皇六十二年五月に額田大中彥皇子鬪鷄といふ所にかりに出給て山に上り、野中を見やり給ひしかば廣き庵を作りたるやうなる所あり、人をつかはして見せたまふに窟なりと申、そのときこの山のあたりに侍る人をめして問せ給ふに氷室なりと申、皇子その氷をいかやうにして納るぞと問せ給ふ、こたへて申さく、土を一丈あまりほりて草をその上にふき、芦萱などをあつめしきて氷をおさむればいかやうなる大旱にもとけず、これをとりて熱月に用ゆるとなん、其時皇子此氷を仁德帝へ奉らせ給ひければ、叡感ありしよし日本紀に見えたり、是氷を奉りし始めなり、これより國々所々に氷室をおかれけるなり。近きは丹波の奥山に氷室ありけるよし、又、富士山伯耆の大山などにもありしなり。」
「氷室守龍に卷れしはなしかな」これは曉臺の句にして詰らぬやうなれど、龍

に巻れしは何となく氷室の感じあり。

くず餅、涼しけれど好まず。

粽は笹の葉につつまれ、新しげなれど腹はりて好まず。されど春に於ける草餅の優しきに似て、何となく好ましき俳味を帶びたるものなり。

相知れる女の塔澤に入て文こしたるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ　其角

鹽そへて草の香淺き粽かな　尙白

句境は自ら愛すべき粽の風雅をよみ得たるものなるべし。粽に似たるものにて土用餅といへるものわが鄕里にあるが、むしろ涼しからざるものの如し、紅（くれなゐ）

せるささげ豆を餅のそと側につけたるもの、盛夏、腹のちから弱りたるとき食して力餅とは稱ふ也。

夏の口、東京の町にあま酒賣の呼びありきけるは、予のごとき田舍もののその風雅知るによしなきことなり。あま酒すすりて甘美しといへるは誰が子ぞ。

予のこのごろつくづく思ふはラムネの流行廢れしことこれなり。そのかみ我ら幼なき時いかにハイカラにして高貴なる飲料なりしか? いまは場末や活動館内にて折々呼賣りせるをながめ、時代の高尚をこそ悲しくまた當然とは思ひぬ。ラムネの玉ほしさに憧れたるは予のみにあるまじ。

予の一年餘り滯郷中に食べたる鮎の數知るべからず、鮎のわた苦（にが）きは山川の

味、徹りて一片花瓣を嚼みたるがやうなり。

鮎くれてよらで過行夜半の門　　蕪村

宵淺きほどに上流に夜網打てる知り合ひの、門邊を過ぎて五六が程頒ち行きしをよみしものならん。田舍の暮しにはこのやうなること屢々あるなり。蕪村の鮎の句の新鮮なること、芭蕉の瓜の句とともに三誦すべし。鮎の最もあたらしきはいまだなれず、からだぐなぐな也。すこし時經ちてぴんと反りを打ち、ぬらぬらのあぶらのやうなるもの肌につけるは、あぢはひ新しきなり、それより時經ちてぐなぐなになるは最早なれたるあとにて、市上一片落葉のごとき鮎なり。

鮎のさしみはあまりに非道なる食ひものなり、鮎は燒き或はつゆとなすべし、山川のおとめごをさしみにして喫ふは何人の風流なる。——予、鄕里の門前を

走る流れに鮎を生簀に入れ、夕されば自ら石垣を下りて料理るがほど、生簀の中よりつかまへ夕膳にしたゝめぬ。數すくなくなりしほどに漁師きたりて生簀を充せり。いま都にありて色黄なる鮎たまたま燒きくらひて、予が故郷をこそ思ひ慕ふなれ。色黄なる鮎の味ひ夕方のわが庵に坐して思へば、まことに「鮎くれてよらで過行夜半の門」べにあらず、こよひは細き月さへなく、茫たる都門の熱したる風のすぐるのみなり。

西瓜畑の夜半すぎて圓らかなる西瓜の肌手さぐりあてるはそも何たる悲しさぞと言へる人ありき。この言葉西瓜くらふごとに思ひ出され微笑まるるなり。なにゆゑかを知らず。西瓜は石をもて割りたるは味すぐれたりとなん。

# はるさめ草

けふは朝からの雨である。

若葉に風さへ加はり雨の音が春雨らしくもなく、あらあらしく降り注いでゐる。こんな日は俳句でも讀んでゐるに恰度よいと思つて樂しみながら一つ一つ句に自分の考へを加へて見ることにした。

ゆきとけや深山曇を鳴く鳥　曉臺

雪解頃の或る霞のかゝつた鬱然たる山河の風色である。殘雪が齒のやうに皓い。それに何か暖かい氣もちが山と山との間に漂ふてゐる。茫々たる春色である。だがまだ樹は冬枯れのまゝの立姿だ。鳥が高い屋根の上から急に立つて啼

いた。冬の時分はもつとゐた烏が數少なくなり、その不吉な、くろぐろした姿も何だか春めいてゐる。近い山と遠い山との間にかゝつてゐる鬱然たる曇色をつんざいて、寂しく唖々として啼き立つてゐる。——

自分はこの句を味ふと、すぐ加賀國の連峰を想起した。ちら〳〵した底光りを含んで、何か眩しい感じを鋭く封じた雪解頃の曇つた風色が、すぐわたしの眼前に描かれた。おそらく曉臺は寒國の景色を詠んだものであらう。

花の雨鯛に鹽するゆふべかな　　仙北

この句の意味は、花に招んだ客が來なくなつたのか、それとも新しい鯛が來たので明日の分に塩をふつて置いたのか、どう解釋してもよいやうである。しかし前者が句の眞實を物語つてゐるやうである。

わたしは鯛を塩するといふ感じが、いかにも幅廣い、新鮮な感じだつたので、

他の何物の解釋よりも唯これだけでいゝ句であると思ふた。此場合鯛は小鯛の類であらう。女扇のやうに尾がはね上りその尖端に自から汐曇りさへ感じさせるくらゐである。それへ荒塩をばらばらと女の器用な手が撒いた。鯛は一そうくれなゐに沈んでいきいきとして見えた。一脈の新しさが句意をつんざいてゐる。

召波の別業に遊びて

行く春や白き花みゆ垣のひま　蕪村

前書のとほりの句意である。すらりとした丈のすがすがしい蕪村らしい句である。

夏の近づいた行春の一日、よく白い花が目につくものである。白い花は清淨で、決して人に嫌はれることがない。まことに淡淡としてゐる。眼を閉ぢてみ

ると浮んでくるは雷に白い花ばかりではない、それに映じた一つの心である。すがすがしいものを見たときの心がわたしに思ひ出させる。特に召波の別業でなくともよいのである。

竹の子や兒の齒ぐきの美しき　嵐雪

子供と對ひ合せになつて膳をかこふてゐる。何か子供があどけないことを言つてゐるので、父母もこれに耳を藉しながら食事をして、ふと氣がつくと子供の餅米のやうな齒なみが、いくらか透きながら美しく揃つて見え、齒ぐきも桃色である。竹の子を食べるくらゐであるから九つか十ぐらゐかも知れない。しかし竹の子がどうも不調和のやうに思はれてならぬ。或ひは竹の子の精悍さを何となく併せ描いたのかも知れない。子供の生ひ育ちといふものと結び併せた句のやうである。かりに九つか十くらゐだと考へて見たが、之は五つか六つく

らゐでもよい。年齢のすくないほど歯ぐきの美しさが初々しく見えるやうな氣がする……。

芭蕉襍記　定價金二圓五十錢

昭和三年五月十三日印刷

昭和三年五月十六日發行

著者　室生犀星

發行者　前田信
東京市小石川區高田豊川町四三

印刷者　道又好三
東京市小石川區關口水道町四一

印刷所　武藏野書院印刷部

發行所　東京小石川目白臺
振替東京六七一四六
武藏野書院

月のおと
蕉門ハ一花
荘子
竹の書画
空蔵
肖像翁坂乎

尾州
桂想堂
翁に於
生著

稲手わこゝろあり　よ江猫

観心染め之わ　ひね之猫

やぶれ垣之集

保高
藤城

玉よ河性

元禄七年甲戌十二月